

四国横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

第一冊

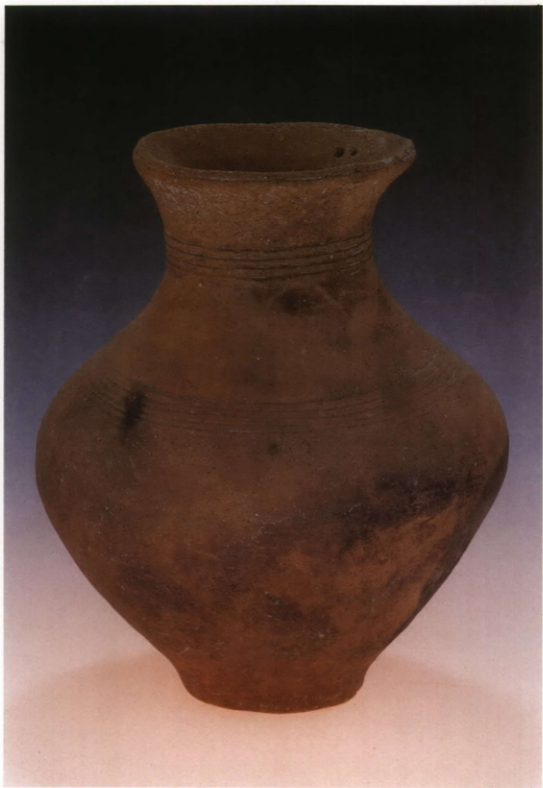
中村遺跡

乾遺跡

上一坊遺跡

1987.3

香川県教育委員会  
日本道路公団



乾遺跡 S X 8501出土土器

## 例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊である。
2. 本書に収録したのは、1984年から1985年にかけて調査を実施した、香川県普通寺市中村町に所在する中村遺跡・乾遺跡と同市吉原町に所在する上一坊遺跡の三遺跡である。
3. 調査は、日本道路公団高松建設局の委託を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課調査三係（普通寺連絡事務所）が実施した。
4. 発掘調査は中村遺跡を真鍋昌宏、乾遺跡・上一坊遺跡を薦田耕作、今井和彦が担当した。
5. 調査に要する経費は、日本道路公団が負担した。
6. 調査にあたっては、下記の個人と機関の指導や援助を得た。記して謝意を表したい。  
大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館） 日本道路公団高松建設局 同・普通寺工事事務所 香川県土木部横断道対策室 普通寺市横断道対策室 共同企業体 地元自治会 地元対策協議会
7. 出土品の整理は、普通寺連絡事務所職員が実施した。
8. 本書の作成に当っては、文化行政課職員をはじめ、調査に参加した調査員の助言を受けながら、以下のように分担執筆した。また、校正作業では横田周子の協力を得た。  
I-1……………伊沢肇一（調査三係係長）  
I-2, III, IV……………薦田耕作（ // 主任技師）  
II……………真鍋昌宏（ // // ）
9. 本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
  - (1) 挿図の縮尺は、掲載の図内にスケールで示した。
  - (2) 方位は、国土座標第IV座標系の北を表わす。

(3) 水平基準線の数値は、海拔高を示している。

10. 本書に用いている遺構記号は次の通りである。

SA 柵列      SB 建物      SD 溝  
SE 井戸      SK 土坑      SX その他の遺構

11. 調査組織は下記の通りである。

#### 昭和59年度

総括	課長	遠藤 啓(～11. 25)		
		磯田文雄(11. 26～)		
	主幹	林 茂		
		松本豊胤		
	課長補佐	中村 仁		
庶務	係長	下河芳樹(～5. 31)	調査	普通寺連絡事務所
		宮谷昌之(6. 1～)	所長	石塚徳治(～4. 30)
	主任主事	酒井幸子		入江 久(5. 1～)
	主事	前田和也	係長	伊沢肇一
			中村遺跡主任技師	真鍋昌宏

#### 昭和60年度

総括	課長	磯田文雄(～12. 20)		
	教育次長 課長事務取扱	樫原 悠(12. 21～)		
	主幹	松本豊胤		
	課長補佐	片山 堯		
庶務	係長	宮谷昌之	調査	普通寺連絡事務所
	主任主事	前田和也	所長	入江 久
	主任主事	酒井幸子(～5. 31)	係長	伊沢肇一
	主事	松下由美子(6. 1～)	乾遺跡他技師	薦田耕作
			嘱託	今井和彦

#### 昭和61年度

総括	課長	廣瀬和孝
	主幹	松本豊胤
	課長補佐	片山 堯

庶務 係 長 宮谷昌之  
主任主事 前田和也  
主 事 松下由美子

整理 普通寺連絡事務所  
所 長 入江久  
係 長 伊沢肇一  
乾遺跡他 主任技師 薦田耕作  
中村遺跡 主任技師 真鍋昌宏

# 目 次

I	はじめに	1
1.	調査の経緯	3
2.	遺跡の立地と環境	8
II	中村遺跡	13
1.	調査の経過	15
2.	調査の概要	19
(1)	土層序	19
(2)	遺構	20
①	検出遺構の概要	20
②	自然河川	23
③	平安時代の遺構	24
④	中世後半の遺構	27
⑤	近世以降の遺構	35
3.	遺物	37
(1)	縄文時代の遺物	37
(2)	弥生時代の遺物	38
(3)	平安時代の遺物	40
(4)	中世後半の遺物	41
(5)	近世以降の遺物	51
4.	まとめ	56
III	乾遺跡	61
1.	調査の経過	63
2.	土層序と遺構	66
(1)	土層序について	66
(2)	遺構について	71
3.	遺物について	76
(1)	S X 8501出土遺物	76
(2)	S X 8502出土遺物	86

(3) S D8501出土遺物	93
(4) S K8501出土遺物	93
(5) S X8503出土遺物	94
(6) 包含層出土遺物	96
4. まとめ	100
IV 上一坊遺跡	105
1. 調査の経過	107
2. 土層序と遺構	110
(1) 土層序について	110
(2) 遺構について	113
中世後半の遺構	113
近世後半の遺構	128
3. 遺物について	134
(1) 土師質土器・磁器・陶器	134
(2) 備前焼播鉢	150
(3) 瓦	150
(4) 近世陶磁器	154
(5) 木製品	170
(6) 石器	172
(7) 鉄器・キセル	176
(8) 銅銭	178
4. まとめ	179

# 挿 図 目 次

I	第1図	四国横断自動車道埋蔵文化財 包蔵地……………6	第30図	NR01, S D01・02出土土器 実測図……………38	
	第2図	発掘作業風景(乾遺跡)……………7	第31図	石器実測図……………39	
	第3図	整理作業風景……………7	第32図	帯金具実測図……………40	
	第4図	周辺地域の遺跡……………9	第33図	銅印実測図……………40	
			第34図	釜・鍋類の形態分類……………41	
II	第1図	調査区設定図……………17~18	第35図	建物・土坑出土土器実測図……………42	
	第2図	基本層序模式図……………19	第36図	土坑出土土器実測図……………43	
	第3図	中心部遺構配置図……………21~22	第37図	溝出土土器実測図(1)……………44	
	第4図	自然河川平面図……………23	第38図	溝出土土器実測図(2)……………45	
	第5図	自然河川断面図……………24~25	第39図	溝出土土器実測図(3)……………46	
	第6図	S D02実測図……………25	第40図	ビット・遺構面出土土器 実測図……………47	
	第7図	S D01実測図……………26	第41図	近世遺物実測図(1)……………51	
	第8図	S B01実測図……………28	第42図	近世遺物実測図(2)……………52	
	第9図	S B02実測図……………28	第43図	瓦実測図……………54	
	第10図	S B03実測図……………28	第44図	銅銭拓影……………55	
	第11図	S B04実測図……………29	第45図	木製品実測図……………55	
	第12図	S B05実測図……………29	第46図	遺構変遷図……………58	
	第13図	S B06実測図……………29			
	第14図	S B07実測図……………30	III	第1図	乾遺跡グリッド設定図……………65
	第15図	S B08実測図……………30		第2図	基本層序模式図……………66
	第16図	S B09実測図……………30		第3図	土層実測図……………68
	第17図	S B10実測図……………30		第4図	遺構配置図……………69~70
	第18図	S B11実測図……………31		第5図	S X8501土層断面図……………71
	第19図	S B12実測図……………31		第6図	S X8501, 8502出土遺物 分布図……………72
	第20図	S B13実測図……………32		第7図	S X8502土層断面図……………73
	第21図	S B14実測図……………32		第8図	S K8501平面図・断面土層図……………74
	第22図	S B15実測図……………32		第9図	S X8503断面土層図……………75
	第23図	S K02実測図……………34		第10図	S X8503, S D8502平面図……………75
	第24図	S K03実測図……………34		第11図	S X8501出土土器実測図(1)……………77
	第25図	S K05実測図……………35		第12図	S X8501出土土器実測図(2)……………78
	第26図	S K06実測図……………35		第13図	S X8501出土木製品実測図(1) ……………81~82
	第27図	S K07実測図……………35			
	第28図	S K08実測図……………35			
	第29図	石棒実測図……………37			



第14図	S X 8501出土木製品実測図(2)……83	第27図	S B 22平・断面図 ……………123
第15図	S X 8501出土石器実測図(1)……84	第28図	S B 23平・断面図 ……………123
第16図	S X 8501出土石器実測図(2)……85	第29図	S B 24平・断面図 ……………123
第17図	S X 8502出土石器実測図(1)……88	第30図	S E 01平・断面図 ……………127
第18図	S X 8502出土遺物実測図……89	第31図	S K 11平・断面図 ……………128
第19図	S X 8502出土石器実測図(2)……92	第32図	S E 02平・断面図 ……………129
第20図	S D 8501, S K 8501, S X 8503 出土遺物実測図……………95	第33図	S E 03平・断面図 ……………130
第21図	包含層出土遺物実測図……………98	第34図	S K 04平・断面図 ……………131
第22図	包含層出土石器実測図……………99	第35図	S K 05平・断面図 ……………132
第23図	乾遺跡周辺の地形……………101~102	第36図	S K 12平・断面図 ……………132
IV 第1図	上一坊遺跡グリッド設定図 ……108	第37図	S K 13平・断面図 ……………133
第2図	土層実測図(1) ……………111	第38図	S K 14平・断面図 ……………133
第3図	土層実測図(2) ……………112	第39図	建物遺構出土石器実測図 ……138
第4図	北西地区平面図 ……………113	第40図	ピット出土石器実測図 ……139
第5図	南東地区平面図 ……………114	第41図	ピット出土石器実測図 ……140
第6図	S B 01平・断面図 ……………115	第42図	ピット出土石器実測図 ……141
第7図	S B 02平・断面図 ……………115	第43図	ピット・溝出土石器実測図 ……142
第8図	S B 03平・断面図 ……………116	第44図	井戸・土坑・溝出土石器 実測図 ……………146
第9図	S B 04平・断面図 ……………116	第45図	土坑出土石器実測図 ……147
第10図	S B 05平・断面図 ……………116	第46図	井戸・土坑・溝出土石器 実測図 ……………148
第11図	S B 06平・断面図 ……………117	第47図	土坑出土石器実測図 ……149
第12図	S B 07平・断面図 ……………117	第48図	溝・土坑出土石器実測図 ……151
第13図	S B 08平・断面図 ……………117	第49図	溝・包含層出土石器実測図 ……152
第14図	S B 09平・断面図 ……………118	第50図	溝・包含層出土石器・瓦実測図 ……………153
第15図	S B 10平・断面図 ……………118	第51図	溝・土坑・包含層出土陶磁器 実測図 ……………155
第16図	S B 11平・断面図 ……………118	第52図	溝出土陶磁器実測図 ……156
第17図	S B 12平・断面図 ……………119	第53図	溝出土陶磁器実測図 ……159
第18図	S B 13平・断面図 ……………119	第54図	溝出土陶磁器実測図 ……160
第19図	S B 14平・断面図 ……………120	第55図	溝出土陶磁器実測図 ……165
第20図	S B 15平・断面図 ……………120	第56図	溝・土坑出土陶磁器実測図 ……166
第21図	S B 16平・断面図 ……………121	第57図	包含層出土陶磁器実測図 ……169
第22図	S B 17平・断面図 ……………121	第58図	ピット・溝・土坑出土木製品 実測図 ……………171
第23図	S B 18平・断面図 ……………121	第59図	石器実測図(1) ……………173
第24図	S B 19平・断面図 ……………122		
第25図	S B 20平・断面図 ……………122		
第26図	S B 21平・断面図 ……………122		

第60図	石器実測図(2)	174
第61図	石器実測図(3)	175

第62図	鉄製品・キセル実測図	177
第63図	銅銭拓影	178

## 表 目 次

I	第1表	調査一覧表	5	IV	第1表	建物遺構一覧表(1)	124
II	第1表	主要遺構一覧表	20		第2表	建物遺構一覧表(2)	125
	第2表	掘立柱建物一覧表	27				

## 付 図

1. 中村遺跡遺構配置図
2. 上一坊遺跡遺構配置図

## 図 版 目 次

- 巻頭図版 乾遺跡 S X 8501出土土器
- 図版 1 善通寺地区航空写真
- 中村遺跡**
- 図版 2 (1)自然河川(北から)  
(2)自然河川堆積状況(南壁)
- 図版 3 (1)S D 01南区全景(北から)  
(2)S D 01南区全景(南から)
- 図版 4 (1)S D 01北区壁検出状況(南から)  
(2)S D 01北区全景(南から)
- 図版 5 (1)S D 01北区全景(北から)  
(2)S D 01堆積状況(南壁)
- 図版 6 (1)S D 01堆積状況近景(南壁)  
(2)S D 01堆積状況近景(南壁)
- 図版 7 (1)S D 02全景(北から)  
(2)S D 02近景(南から)
- 図版 8 (1)S D 02近景(北から)  
(2)銅印出土状況
- 図版 9 (1)C・D-4区全景(西から)  
(2)C・D-5区全景(東から)
- 図版 10 (1)S B 01全景(北から)  
(2)S B 02全景(南から)
- 図版 11 (1)S B 03全景(東から)  
(2)S B 03全景(南から)
- 図版 12 (1)S B 04全景(南東から)  
(2)S B 04全景(東から)
- 図版 13 (1)中央部建物群全景(西から)  
(2)中央部建物群全景(東から)
- 図版 14 (1)S B 07全景(西から)  
(2)S B 06全景(東から)
- 図版 15 (1)中央部建物群全景(南から)  
(2)中央部建物群全景(東から)
- 図版 16 (1)S B 08全景(東から)  
(2)S B 08近景(東から)
- 図版 17 (1)S B 09全景(北から)  
(2)調査区西部全景(東から)
- 図版 18 (1)S B 11全景(西から)  
(2)S B 11近景(西から)
- 図版 19 (1)S B 12全景(西から)  
(2)S B 12近景(西から)
- 図版 20 (1)S B 13・14全景(東から)  
(2)S K 04全景(北から)
- 図版 21 (1)D-12・13区全景(東から)  
(2)柱痕検出状況(Pit No.11)
- 図版 22 (1)土師質小皿検出状況(Pit No.4)  
(2)土師質小皿検出状況(Pit No.4)
- 図版 23 (1)石棒  
(2)NR 01出土土器
- 図版 24 石器
- 図版 25 S D 01・02出土土器
- 図版 26 (1)帯金具  
(2)銅印
- 図版 27 中世後半出土土器
- 図版 28 (1)中世後半出土土器(外面)  
(2)中世後半出土土器(内面)
- 図版 29 (1)中世後半出土土器(外面)  
(2)中世後半出土土器(内面)
- 図版 30 (1)中世後半出土土器(外面)  
(2)中世後半出土土器(内面)
- 図版 31 (1)中世後半出土土器(外面)  
(2)中世後半出土土器(内面)
- 図版 32 (1)中世後半出土土器(内面)  
(2)中世後半出土土器(外面)
- 図版 33 (1)中世後半出土土器(内面)  
(2)中世後半出土土器(外面)
- 図版 34 (1)近世陶器(外面)  
(2)近世陶器(内面)
- 図版 35 (1)近世以降出土土器(外面)  
(2)近世以降出土土器(内面)
- 図版 36 その他の遺物

## 乾遺跡

- 図版 37 (1)発掘前の風景  
(2)調査区より西の風景
- 図版 38 (1)重機による表土除去作業  
(2)土層, C-2・北壁
- 図版 39 (1)土層, C-2・南壁  
(2)土層, C-3(N)・北壁
- 図版 40 (1)土層, B-4・東壁  
(2)土層, A-4・西壁
- 図版 41 (1)S X 8501・S X 8502 全景  
(南より)  
(2)S X 8501・S X 8502 全景  
(南より)
- 図版 42 (1)S X 8501流木検出状況(南より)  
(2)S X 8501流木検出状況(東より)
- 図版 43 (1)S X 8501木製鋸出土状態  
(2)S X 8501木製鋸出土状態
- 図版 44 (1)S X 8501土器出土状態  
(2)S X 8501土器出土状態
- 図版 45 (1)S X 8501木製品出土状態  
(2)S X 8501木製品出土状態
- 図版 46 (1)S X 8501木製品出土状態  
(2)S X 8501石器出土状態
- 図版 47 (1)S X 8501土器出土状態  
(2)S X 8502 全景(西より)
- 図版 48 (1)S X 8502土器出土状態  
(2)S X 8502土器出土状態
- 図版 49 (1)S X 8502鉄鏝出土状態  
(2)S X 8503 全景(西より)
- 図版 50 (1)S X 8503枕列検出状況  
(2)S X 8503木製品出土状態
- 図版 51 (1)遺構検出状況(D-3, 西より)  
(2)S K 8501(C-2)
- 図版 52 (1)S K 8501(C-2)  
(2)S K 8503(D-3)
- 図版 53 (1)S K 8504(D-3)  
(2)遺構検出状況(D-1・2, 南より)
- 図版 54 S X 8501出土土器
- 図版 55 S X 8502出土土器
- 図版 56 S X 8502出土土器
- 図版 57 (1)S X 8502出土土器  
(2)S X 8502・S X 8503, 包含層出土遺物
- 図版 58 S X 8502出土遺物
- 図版 59 S D 8501・S K 8501・S X 8503出土遺物
- 図版 60 包含層出土遺物
- 図版 61 S X 8501出土木製品
- 図版 62 S X 8501出土木製品
- 図版 63 S X 8501出土木製品
- 図版 64 S X 8501出土木製品
- 図版 65 S X 8501出土木製品
- 図版 66 S X 8501・包含層出土石器
- 図版 67 S X 8501・包含層出土石器

## 上一坊遺跡

- 図版 68 (1)発掘作業風景  
(2)白線入れ作業風景
- 図版 69 (1)A・B列遺構検出状況(南より)  
(2)A・B列遺構検出状況(北より)
- 図版 70 (1)1・2列遺構検出状況(西より)  
(2)A列ピット群全景(西より)
- 図版 71 (1)B・C列全景(南より)  
(2)S D 03土層
- 図版 72 (1)S D 02土層  
(2)S E 01
- 図版 73 (1)S E 01土層  
(2)S E 01掘り方の土層
- 図版 74 (1)S E 01底  
(2)S E 02上面
- 図版 75 (1)S E 02  
(2)S E 03上面
- 図版 76 (1)S E 03  
(2)S D 06上面
- 図版 77 (1)S K 04  
(2)A-2区, 土坑
- 図版 78 (1)小皿出土状態

(2)小皿出土状態

- 図版 79 (1)小皿・古銭出土状態  
(2)小皿・古銭出土状態
- 図版 80 (1)小皿・古銭出土状態  
(2)SD01遺物出土状態
- 図版 81 建物遺構・ピット出土土器
- 図版 82 建物遺構・ピット出土土器
- 図版 83 ピット出土土器
- 図版 84 ピット・溝・井戸・土坑出土土器
- 図版 85 溝・土坑出土土器
- 図版 86 土坑出土土器
- 図版 87 溝・土坑・包含層出土摺鉢・瓦
- 図版 88 溝・土坑・包含層出土陶磁器
- 図版 89 溝・土坑出土陶磁器
- 図版 90 溝出土陶磁器
- 図版 91 溝・土坑・包含層出土陶磁器
- 図版 92 溝出土陶磁器
- 図版 93 溝・土坑・包含層出土陶磁器
- 図版 94 溝・土坑出土陶磁器
- 図版 95 溝出土陶磁器
- 図版 96 溝・土坑・包含層出土陶磁器
- 図版 97 溝・包含層出土土器
- 図版 98 溝・土坑出土木製品
- 図版 99 溝・包含層出土石器
- 図版 100 ピット出土石器
- 図版 101 井戸・溝・ピット・包含層出土鉄製品
- 図版 102 溝・ピット出土鉄製品・キセル・銅銭

# I はじめに



## 1. 調査の経緯

四国横断自動車道(普通寺～豊浜)埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和58年1月1日付、日本道路公団大阪建設局との委託契約に始まる。以来4年の歳月を要し、現場での発掘調査は昭和61年12月末をもって終了した。(一部用地未解決あり)

発掘調査は、四国横断自動車道(普通寺～豊浜)31.6km、面積2,041千㎡の1割強に当たる211,500㎡を対象とした。

昭和57年度第4半期に普通寺市竜川地区(普通寺I,C)で初めて発掘調査に立入った。それまでに、埋蔵文化財調査について、現地踏査(分布調査)を基に、日本道路公団と協議を重ねた。

協議は、整備計画決定、施行命令が出された昭和47年6月頃から続けられ、下って実施計画認可、路線発表があった51年4月からはそれぞれの遺跡について具体的な話し合いが持たれた。

昭和56年5月に入り、巾杭設置測量が公団の手で行われ、具体的に用地買収交渉が行われるに伴い、発掘調査の準備も進められた。

発掘調査は、比較的用地買収が早かった普通寺地区、豊中地区の順に進めた。用地買収契約調印が終了した所から、予備調査の実行計画を立てた。しかし稲の植付、立毛、水路、畦畔、農道確保の問題が次々と噴出し、地元への必要にして十分な配慮が問われた。公団や対策室、市町、関係機関、地元協議会との連携により、協力が得られるに至った。周知されていなかった箇所の子備調査を実施したところ、新規の遺跡が次々と発見され、発掘面積が60,900㎡から211,500㎡へとふくれ上がった。それに伴い調査工程と工事工程の調整が一層緊密さを増した。

多度郡条里については、当初坪境の溝、または畦畔の検出によって条里の全容が把握できるものと考えていた。ところが予備調査を実施した段階に、縄文、弥生時代や古代、中世、近世の自然河川や建物を中心とする集落跡の色彩が強く、新規の遺跡とした。

高瀬地区においても、予想していなかった高瀬川北岸の大門地区に古墳時代後期の竪穴式住居跡25棟を検出した。

豊中地区では、延命遺跡の城ノ岡地区で発掘調査中、宮川を挟んで対峙する八反地地区で電柱立替え工事中、偶然弥生土器を発見した。予備調査の結果、濃密な遺構が確認されるに至った。

財田川左岸に広がる三豊平野において、買収契約未調印の箇所も、地元対策協議会、公団、県、市横断対策課、その他関係機関参加のもと、地区別に説明会を開催し、地元の協力が得られた所の予備調査を実施した。それによると、財田川寄りの12,000㎡に濃密な弥生後期の竪穴住居を中心とした集落が検出された。

石田、長砂古、中姪の各遺跡も同様にして予備調査を実施し、発掘面積を確定した。

昭和62年度供用開始を目標に工事は急ピッチで進行している。そのため、発掘調査区内を工事用道路が走り、カルバート・ボックス等の構造物施工箇所を優先して発掘調査した。特に、平野部



に所在する永井遺跡と刈田郡条里は、調査工程と工事工程上のコントロールポイントとなった。

調査体制の充実も大きな課題となった。調査員は3名でスタートしたが、昭和58年4月に調査の拠点となる善通寺連絡事務所を開設。11名の陣容を確保、59年度12名、60年度17名、61年度21名と増員し、調査のスピード化をはかった。併せて、発掘現場作業員もピーク時には230名を数えるに至った。

出土品の整理作業も、昭和58年度に1班を要し、基礎整理を始めた。61年1月からは、報告書作成に向け本格的に整理作業（整理補助員4名、整理作業員16名）に取りかかり、61年度には、実績報告書の他に2冊の報告書（7遺跡）を刊行した。併せ、一般・学童・生徒向けに小冊子「いにしへの讃岐Ⅱ」も刊行。

現場説明会も、大門遺跡、刈田郡条里で実施したところ、大盛況を呈し、文化財に対する興味、関心の高さを認識した。

遺跡の名称については、発掘調査の成果に基づき、遺跡の性格や立地等について検討した結果、一部名称変更をせざるを得なくなった。

発掘現場作業員延83,000人を要して発掘し、多くの出土品（コンテナ28入、4,570箱）や遺構を検出した遺跡は、今、地中深く眠る。62年度供用に向け、構造物、土木工事が急ピッチで進む。

発掘調査は終了したが、62～64年度に報告書作成事業が待ち受けている。

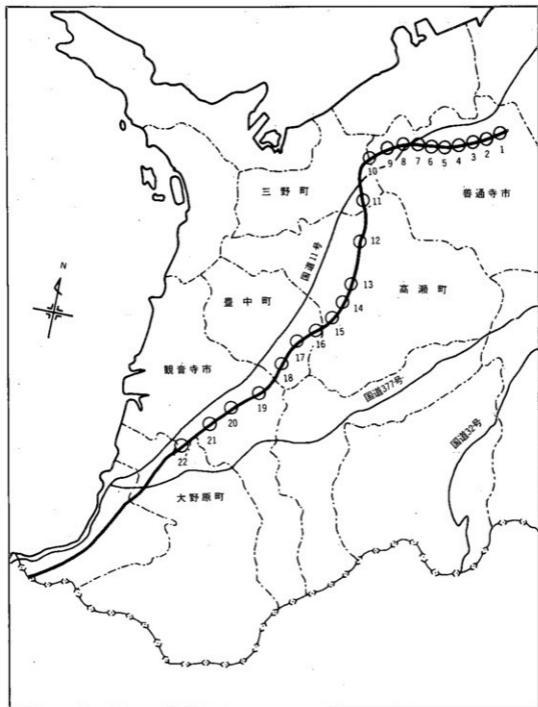
旧 新

多度郡条里 下所地区	金蔵寺下所遺跡
稲木B地区	稲木遺跡B地区
稲木C地区	稲木遺跡C地区
永井地区	永井遺跡
吉原A地区	矢ノ塚遺跡
吉原B <sub>1</sub> 地区	上一坊遺跡
吉原B <sub>2</sub> 地区	乾遺跡
利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区	利生寺遺跡、大門遺跡
土佐神社跡	矢ノ岡遺跡
刈田郡条里	一の谷遺跡群
中煙遺跡	柞田八丁遺跡

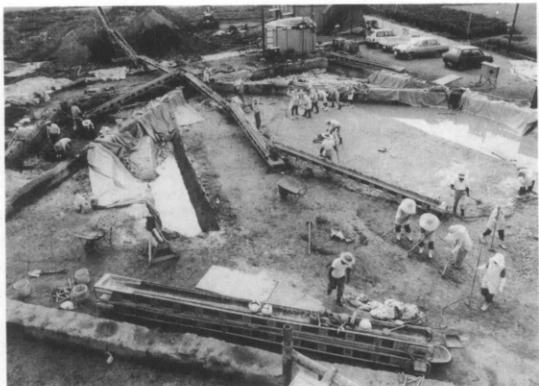
遺 跡 名 称 変 更

第1表 調査一覧表

道跡番号	道跡名	所在地	面積 (㎡)						調査期間
			発掘面積	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	
1	金蔵寺下所道跡	普通寺市金蔵寺町下所	17,000	1,300	8,000	7,700			58.4.1~ 60.2.28
2	稲木道跡・C	普通寺市稲木町下吉田町	4,000		600	3,400			59.4.1~ 60.3.30
3	稲木道跡・A	普通寺市稲木町下吉田町	300		300				58.6.29~ 59.2.14
	稲木道跡・B	普通寺市稲木町下吉田町	17,100		5,100	12,000			59.9.17~ 60.2.8
4	永井道跡	普通寺市下吉田町下所西 中村町島田・横田	33,300				15,600	17,700	60.5.7~ 61.12.23
5	中村道跡	普通寺市中村町鞆岡	9,000			9,000			59.7.3~ 59.9.17
6	乾道跡	普通寺市中村町乾	2,300			200	2,100		60.9.2~ 60.11.20
7	上一坊道跡	普通寺市吉原町上一坊	2,600			400	2,200		60.11.13~ 61.1.24
8	矢ノ塚道跡	普通寺市吉原町矢ノ塚	11,800			4,800	7,000		59.10.8~ 60.8.30
9	西碑殿道跡	普通寺市碑殿町	5,200			3,000	1,400	800	60.2.4~ 61.7.28~ 8.11
10	深尾石棺群	三野町大見深尾	500			500			59.9.11~ 59.10.23
11	道免道跡	三野町大見道免丸尾	100			100			59.9.11~ 59.10.23
12	北条道跡	高瀬町上高瀬北条	100				100		60.5.9~ 60.5.9
13	利生寺道跡	高瀬町上勝間砂古	3,200				3,200		60.5.22~ 60.7.18
	利生寺古墳	高瀬町上勝間砂古	700				700		60.12.2~ 61.3.17
14	大門道跡	高瀬町上勝間砂古	5,500				5,500		60.7.22~ 61.1.28
15	矢ノ岡道跡	高瀬町上勝間矢ノ岡	2,600				2,600		61.1.28~ 61.2.27
16	四ツ塚古墳	登中町笠田笠岡	1,000		200	800			59.4.16~ 59.5.14
17	財田古墳	登中町上高野	1,000		1,000				58.9.26~ 58.11.30
18	延命道跡城の岡地区	登中町上高野	5,000		4,000	1,000			58.11.28~ 59.7.18
	延命道跡八反地地区	登中町上高野	13,000			10,000	2,000	1,000	59.7.19~ 60.5.15 61.9.1~ 9.30
19	一の谷道跡群	観音寺市本大町古川町	36,100			2,500	17,600	16,000	60.5.15~ 61.12.25
20	石田道跡	観音寺市池ノ尻町石田	17,200			1,200	16,000		60.5.1~ 61.1.11
21	長砂古道跡	観音寺市池ノ尻町大長	8,900			1,200	2,500	5,200	61.1.13~ 61.8.12
22	作田八丁道跡	観音寺市作田町八丁	14,000			100		13,420	61.4.3~ 61.11.28 62.1.7~ 62.1.27
	合計		211,500	1,300	19,200	57,900	78,500	54,120	棟 480



第1図 四国横断自転車道埋蔵文化財包蔵地(普通寺~豊浜間)



第2図 発掘作業風景（乾遺跡）



第3図 整理作業風景

## 2. 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的環境

香川県のほぼ中央部に位置する丸亀平野は、土器川、金倉川、弘田川がつくりだした沖積平野であり、香川県最大の耕地面積をもっている。地味は肥沃であり、昔から米どころとして知られた地域である。

普通寺市は、丸亀平野の西部に位置する。南は大麻山、西に五岳山と天霧山を控え、東と北に平野が開けている。

中村遺跡(36)・乾遺跡(5)・上一坊遺跡(35)は南東から北西にむけてゆるやかな下りの傾斜を示すこの沖積平野上に営まれている。中村遺跡は普通寺市中村町本村に所在し標高は16.4~17.4mを計る。乾遺跡は中村遺跡に隣接し普通寺市中村町乾に所在する。標高は16.7~17.3mを計る。上一坊遺跡は、乾遺跡より西へ約1kmに位置し普通寺市吉原町上一坊に所在する。標高は13.0~14.0mを計る。

### (2) 歴史的環境

#### 旧石器時代

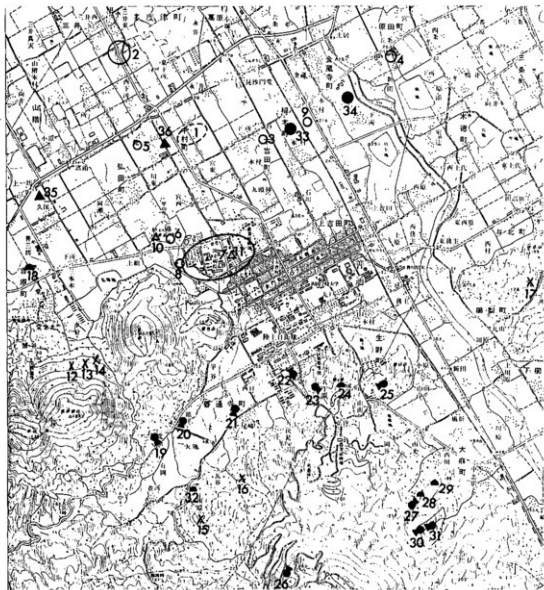
普通寺市の旧石器時代を裏づける遺物の出土は最近まで皆無であったが、四国横断自動車道建設にともなう発掘調査で数点の旧石器時代の遺物が出土した。58~59年度にかけて行なわれた金蔵寺下所遺跡の調査ではナイフ形石器1点、スクレイパー数点が出土した。地山に掘り込まれた平面プランが不整形の縄文時代晩期の土坑状の遺構より検出されたものである。また59~60年度にかけて調査が行なわれた矢ノ塚遺跡ではナイフ形石器1点、縦長剝片1点が弥生時代中期の溝より出土した。いずれも流れ込みによる遺物の出土で、調査地区内で遺構の検出にはいたらなかったが、周辺地域に旧石器時代の遺構が存在する可能性を示した。

#### 縄文時代

旧石器時代同様、普通寺市の縄文時代については、最近まで不明な部分が多かった。四国横断自動車道関連調査で縄文時代の後期から晩期にかけての土器がかなり出土している。五条遺跡(4)では縄文時代後期の土器片が数点出土した。金蔵寺下所遺跡では地山直上の包含層、平面プランが不整形な土坑より縄文時代晩期の土器片が数点出土している。また稲木遺跡(3)では、溝状遺構の最下層より、やはり縄文時代晩期の土器が数点出土している。

また60年度より開始された永井遺跡(1)の調査では縄文時代の自然河川を数本検出している。うち1本には杭列が確認された。縄文時代の後期から晩期にかけての土器が大量に出土しており、61年度の調査においても同時期の遺構の検出が期待されている。

乾遺跡(5)は永井遺跡の西約300mに位置するもので、包含層より縄文時代晩期の土器を数点出土している。



- |                 |             |             |
|-----------------|-------------|-------------|
| 1. 水井遺跡         | 13. 我拝師山B遺跡 | 25. 磨白山古墳   |
| 2. 三井遺跡         | 14. // C遺跡  | 26. 野田院古墳   |
| 3. 稲木遺跡A地区      | 15. 山の谷遺跡   | 27. 丸山2号古墳  |
| 4. 五条遺跡         | 16. 瓦谷遺跡    | 28. 丸山1号古墳  |
| 5. 乾遺跡          | 17. 障山遺跡    | 29. 谷田古墳    |
| 6. 甲山遺跡         | 18. 繁井神社古墳  | 30. 経塚古墳    |
| 7. 旧練兵場遺跡       | 19. 北原古墳    | 31. 桜塚古墳    |
| 8. 旧練兵場遺跡・彼ノ宗地区 | 20. 栗塚古墳    | 32. 宮ヶ原古墳   |
| 9. 稲木遺跡C地区      | 21. 王藤山古墳   | 33. 稲木遺跡B地区 |
| 10. 甲山シスト群      | 22. 北向神社古墳  | 34. 金尾寺下所遺跡 |
| 11. 旧練兵場遺跡・仙遊地区 | 23. 鶴ヶ峯1号古墳 | 35. 上一坊遺跡   |
| 12. 我拝師山A遺跡     | 24. 鶴ヶ峯古墳群  | 36. 中村遺跡    |

第4図 周辺地域の遺跡

## 弥生時代

弥生時代になると、遺物・遺構の報告例は多くなる。多度津町の三井遺跡(2)、五条遺跡、甲山遺跡(6)で弥生時代前期の土器が多数出土している。また丸亀市の中の池遺跡では集落を画すると思われる環濠より、稲木遺跡では溝状遺構より多数の弥生時代前期の土器が出土している。

乾遺跡は、弥生時代前期の甲山遺跡の北約1kmに位置する。生活址の遺構は検出されなかったが、弥生時代前期の自然河川より完形の壺形土器、ミニチュア土器などが出土した。また同じ自然河川より木製墩の末製品が4点検出された。これらの遺物の出土は、乾遺跡の近辺で弥生時代前期からの人間活動を想像させるものである。また中村遺跡(36)においても、弥生時代の自然河川を検出している。

弥生時代中期の遺跡としては、旧練兵場遺跡(7)、彼ノ宗遺跡(8)、矢ノ塚遺跡などがある。彼ノ宗遺跡は旧練兵場遺跡の西端にあたる場所で、甕棺墓、竪穴式住居を多数検出している。また矢ノ塚遺跡でも竪穴式住居の他、同時期の掘立柱の建物跡を多数検出した。両遺跡とも分銅形土製品、ミニチュア土器などの祭祀遺物がかかり出土した。矢ノ塚遺跡においては、鳥形土製品、銅剣形土製品なども出土している。普通寺市内においては、弥生時代前期に始まった稲作文化が、中期にはいと、広がりを見せはじめたのではないかと想像できる。

弥生時代後期で注目されるのは、稲木遺跡C地区(9)と仙遊遺跡(11)である。稲木遺跡C地区では竪穴式住居、土坑墓、壺棺墓の他に河原石を用いた集石墓と思われる遺構7基を検出している。また仙遊遺跡では、人面の線刻が施された組合石棺が確認された。いずれも社会の集団化を予想させる遺跡で、弥生時代後期にはいと普通寺市周辺の弥生文化が大きな広がりを見せたことがうかがえる。

普通寺市周辺の弥生時代を特色づけるものとして、青銅器の出土がある。陣山遺跡(17)では平形銅剣三口、瓦谷遺跡(15・16)では平形銅剣二口、中継形銅剣五口、中継形銅鐸一口、我拝師山遺跡(12・13・14)では平形銅剣五口、銅鐸一口などである。この銅鐸は大阪府茨木市の東奈良遺跡出土の鋳型でつくられたことが判明している。大阪でつくられた銅鐸が香川にわたってきている事実、あるいは、平形銅剣と銅鐸のほぼ限られた地域からの出土は、青銅器研究の上で極めて注目すべきことである。

## 古墳時代

普通寺市内には、およそ400基以上の古墳を数えることができる。その中で特徴的なことは大麻山の北東部山麓にある椀塚古墳(31)から火上山山麓の大窪古墳まで積石塚(経塚古墳(30)、丸山1・2号古墳(27・28)、野田院古墳(26))が多く存在することであろう。中でも大麻山中腹、標高400mの高所には、前方後円墳としては、四国でも最高所に位置する野田院古墳があり、ここからは普通寺市内をはるかに見下ろすことができる。

市内の前方後円墳で注目されるのは、磨臼山から北原に至る約2.5kmの間に六基もの前方後円墳

が集中し、しかもほぼ東西一直線上に並ぶということである。東から遠藤塚 (25) 鶴ヶ峰 (23) 丸山 (22) 王墓山 (21) 菊塚 (20) 北原 (19) の前方後円墳がそれである。同一系譜上の首長墓群とも考えられており昭和59年11月29日、有岡古墳群として国史跡に指定された。

その他、大麻山およびその周辺には、前期の谷田古墳 (29) 後期の熊の巣古墳、瓦谷1号墳、宮ヶ尾古墳や群集積の夫婦岩古墳群、岡古墳群などが点在している。

### 歴史時代

律令時代の行政区分では、普通寺市は東の「那珂郡」と西の「多度郡」に分かれていたと考えられ、郡境は金倉川と推定される。金蔵寺下所遺跡は、この郡境付近に位置し、現在の周辺の地名から推定すると、「那珂郡」の喜徳郡、金倉郷、「多度郡」の良田郷のいずれかにあったものと考えられる。金蔵寺下所遺跡では方形の掘り方をもつ掘立柱建物跡を20数棟検出しており、奈良時代を中心とした時期が与えられている。この建物群の存在する南辺で自然河川が検出され、畜串・木製模造品、赤色顔料を塗布した土器などが出土した。これらの遺物は建物群の性格を考えるうえで興味深い。

金蔵寺下所遺跡で検出された建物群とほぼ同時期とされる建物群が稲木遺跡B地区(33)、矢ノ塚遺跡でも確認されている。当時の文化、政治、交通に重要な役割を果たした南海道があったとされる近辺での遺跡であるため、古代の普通寺市を知る上での手がかりとなろう。

現在、普通寺市を含めて丸亀平野には、N30°Wの主軸方位をもつ方面地割が残っており、この地割が奈良時代施行の条里制の痕跡であると考えられてきた。普通寺市における横断道の各遺跡で奈良時代、平安時代、中世、近世の建物遺構、溝状遺構が多数検出されている。平安時代以後のそれら遺構の主軸方位はほとんどがN30°Wとなる。奈良時代にはじまった条里制施行は、平安時代以降には普通寺市で徐々に広まっていったことを裏づけるものである。

### [参考文献]

- (1) 「普通寺市史第一巻」 普通寺市 1977年7月
- (2) 「新編香川叢書考古編」 香川県教育委員会 1983年3月
- (3) 「中の池遺跡発掘調査概要」 丸亀市教育委員会 1982年3月
- (4) 「彼ノ宗遺跡発掘調査報告書」 普通寺市教育委員会 1985年3月
- (5) 「四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財実績報告」 昭和59～60年度 香川県教育委員会 1984～1986年3月





## II 中村遺跡



## 1. 調査の経過

中村遺跡は、従前より弥生土器の散布が見られ、弥生時代の集落遺跡と考えられてきたが、その範囲は散発的な遺物の出土状況から、確定するには至らなかった。今回四国横断自動車道建設予定地内に推定範囲の一部が含まれることから、昭和59年7月に予備調査、継続して本調査を実施することになった。

調査の方法として、日本道路公団の設置したセンター杭・幅杭をもとに、国土地理院国土座標第IV座標系に準拠し、20mメッシュを基本とする調査区画の設定を行った。これは、将来予想される周辺の開発を想定し、同一基準での遺構配置図作成を意図したものである。しかし、この半面、丸龜平野の水田区画が、ほぼN-30°-Wの方向性を持ち、条里制の名残りと考えられていることから、これを分断する形での区画設定になったこと、一部地域では地形に合致しないなどの問題も生じている。

もう一つの問題として、条里制の遺存を確認する為に、想定条里の交点及び線上の確認が必要であったが、これらが、現水路及び道路と重複する部分が大半をしめ、調査を困難なものにしている。

調査は、予備調査と本調査に分けて考える。

予備調査は、土層序の確認と、遺構面・包含層のあり方、遺構密度等を明らかにし、本調査の資料とするために実施した。

この結果に基づき、本調査では遺構面直上まで重機による掘削を行い。遺構面上精査から人力による作業に切り変えて実施した。

次に図面は、平面図では、20mメッシュを基準とし、各区画とも2mメッシュの小区画を設定し、1/20の図面作成を原則とした。又、平面図に付随するレベルについては、各遺構断面図を作成しようと同時に、2mメッシュの交点についても記入を実施した。

土層図は、原則的に各区画の東面・南面で1/20の縮尺で実施した。

以下調査の進行状況については日誌にもとづいて略述する。

## 調査日誌抄

昭和59年

- 6月18日 伊沢・真鍋地元自治会の集会へ挨拶かたがた、現場作業員の募集に協力を要請するため出席。
- 7月2日 調査準備。現場事務所への物品搬入及び調査区画設定のための図面作業。
- 7月3日 本日から作業員10名就労。初夏の暑い日の中、調査区内の草刈りを実施。
- 7月4日 予備調査開始。調査区画サイドにトレンチを設定し、重機による表土剥ぎと精査を実施。
- 7月5日 予備調査終了後、継続してDE12～14区（市道北側）の全面拡張と遺構面精査を実施する。
- 7月9日 D・E-12～14区の精査に併行して、E-11・12区の表土剥ぎを実施。
- 7月11日 E-11・12区精査開始。
- 8月3日 A～D-1～3区（調査区東部）は包含層が若干見られるものの無遺構で終了する。
- 8月7日 E-10区でNR01の一部を検出、両端で土層確認用のトレンチを設定し、掘り下げを実施。川底で自然木を検出。埋土中から土器底部出土。
- 8月10日 C-4区SD02精査中に、溝底から銅印出土。調査での出土は県内初例である。
- 8月17～18日（矢ノ塚遺跡南半部分の予備調査実施）
- 8月29日 D・E-9区SD01埋土中から帯金具（巡方）出土。SD01及びSD02は、埋土及び時期に共通性が見られることから、条里制に関係する遺構ではないかなどと議論する。
- 8月30日 銅印の出土を主なものとして新聞発表を行なう。
- 9月3日 調査区全体の第1遺構面を終了し、第2遺構面で検出されたNR01の調査を開始する。
- 9月7日 NR01の調査を終了する。

9月13日 最後まで残ったSD01の調査を終了する。

9月14日 現場作業を終了し、遺物・道具の搬出を開始する。

調査参加者 田村久雄・森岡光明・石村 守・中村貞臣・庄野義昭・我那山幸夫・小田典生・神原正剛  
北堀周子・山口ハルミ・藤井マサ子・林 徹子・我那山美江子・北堀郁子・真鍋ナツ・福崎チヨミ・山下キミ子・多田サカエ・中筋照子・西田重子・金森キヨ子・林和子・大平京子

昭和60年

3月～4月 出土遺物基礎整理  
図面整理

昭和61年

6月～12月 遺物・図面トレース  
遺物写真撮影  
編集作業

整理担当 北堀周子・細川倫子・横田周子・真井典子・林 徹子・池田由美・川田裕加子・長谷川郁子・香川陽子・猪木原美恵子



第1図 調査区設定図

## 2. 調査の概要

### (1) 土層序

中村遺跡の基本土層序は、第2図に示す通りである。

第一層 耕作土

第二層 田床

第三層 淡灰白色粘質土層

この層は、遺跡の中心と考えられるD・E-9～11区では検出されたが、調査区の東部・西部では欠落する。

第四層 黄白色粘土層（地山）

これも中心部で見られ、東部ではやや砂質に徐々に変化し、西部では礫層になる。

これは、旧地形形成に係わることであり、詳しくは4. まとめで述べる。

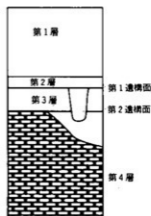
第4層より下については、東部・中央部・西部でそれぞれ深掘りを実施しているが、東部では、第5層淡青灰色砂質土、第6層砂層である。中央部では、第4層が厚く堆積しており、第5層は礫層である。西部では、第4層面で礫層が表われており、砂層・礫層の互層が確認される。

こうしたことから、西部は旧河道である可能性が高いと考えられた。

遺構は、第3層上面で中世後半の遺構面が確認され、第4層上面で自然河川及び平安時代に埋没した溝が検出されている。

第3層が欠落する地区では、第4層上面に近代までの遺構が見られる。

このことから、基本的には遺構面が2面形成されていたことになる。また第3層中には遺物を含まず、その形成年代は平安時代から中世後半期に至る間と考えられる。



第2図 基本層序模式図

## (2) 遺 構

### ① 検出遺構の概要

検出された遺構は、縄文～弥生時代に形成・埋没した自然河川。平安時代に埋没した溝。中世後半（室町時代）の建物址・溝・土坑と、近世末期から近代にかけての溝・土坑などである。

調査区の大半で、田床直下が遺構面であることから、遺構形成期以降の土地利用によって、検出遺構の大半が上部を削平されていることが伺われる。中にはすでに消滅してしまった遺構の存在も想定される。

検出された遺構の分布は、調査区の中心部に集中する傾向があり、周辺部では希薄になる傾向が強い。

これは、中心部のみ第3層が存在し、後世の削平をあまり受けていないことと、東部や西部に比べてベースがより安定していることに無関係ではなからう。

中世後半の遺構のあり方は、後者により規制されていると考えられる。

第1表 主要遺構一覧表

遺 構 名	地 区 名	旧 名 称	備 考
掘立柱建物			P27 表2 参照
土 坑 SK	01 C - 9	SK01	
	02 D - 11	SK01	
	03 E - 11	SK01	
	04 F - 12	焼土坑	
	05 C - 5	SK01	
	06 D - 12	SK04	
	07 D - 13	SK03	
	08 D - 13	SK01	
	09 D - 8	SK01	
	10 D - 10	SK01	
	11 F - 12	SK01	
溝 SD	01	平安溝01	
	02	平安溝02	
	03		
	04 D - 10	SD01	
	05 E - 10	SD01	
	06 D - 11	SD01	
	07 D - 10	SD03	
	08 E - 10	SD02	
		SD02	
		SD4-1	
		SD4-2	
	09 E - 9	SD05	
	10 E - 10	SD5-1	
	11 D - 9	SD06	
	12 D - 8	SD09	
	13 D - 9	SD01	
	14 D - 12	SD03	
	15 D - 12	SD02	
	16 D - 12	SD01	
	17 D - 9	SD7-2	
ピット SP	01 C - 8	SP01	
	02 D - 10	SP23	
	03 D - 10	SP01	
	04 E - 9	SP36	
	05 E - 9	SP08	
	06 E - 10	SP12	
	07 E - 10	SP06	
	08 E - 11	SP14	
	09 E - 11	SP08	
	10 D - 12	SP02	
	11 E - 10	SP03	





第3図 中心部遺構配置図

## ② 自然河川 (NR01)

NR01は、第4層上面で検出された。調査区内で確認されている規模は、最大幅10m、検出長36.50mで、深さは最深部で1.20mを計る。断面は、緩やかなU字状をなし、埋土の状況から見て、徐々に埋没していったことが想定される。NR01の埋土は、10層に区分された。

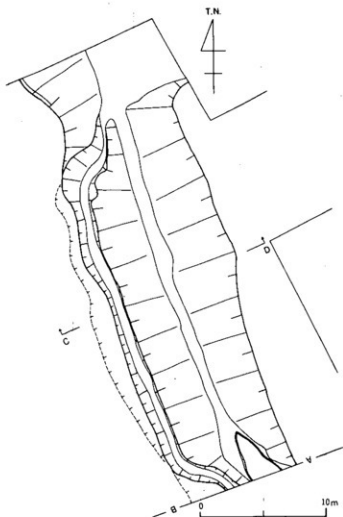
10層中、上二層(灰色砂質土・灰黒色粘質土)中から弥生土器底部片が出土した。又、最下層淡黒色粘土層中には、多くの流木等植物遺体を含んでいた。NR01の西側に併走して幅1.50m深さ約70cmの逆台形状を呈する溝が検出されている。

この溝は、NR01の南部から分岐し、北部で再び合流する形をとるが、その断面形状からして、人為的なものであろうと推定される。

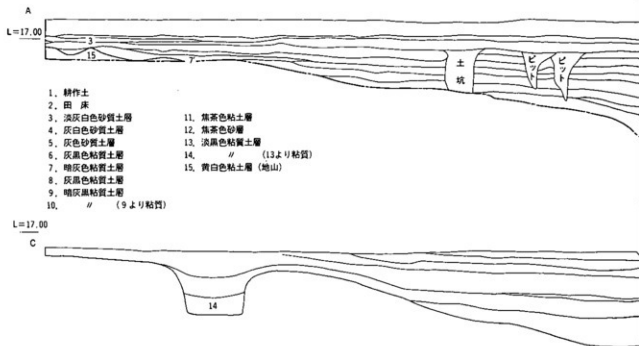
機能的には、自然河川が灰黒色粘質土に見られるように、澁み状態を呈し、川としての機能が

不十分になった時点で、この部分を迂回させる目的で設置されたものと考えられる。

NR01の時期は、ほぼ埋没するのが弥生時代と推定されることから、上限は縄文時代に遡る可能性がある。又、NR01に併走する溝は、弥生時代の中で考えられよう。



第4図 自然河川 (NR01) 平面図



第5図 自然河川断面図

### ③ 平安時代の遺構

S D 01 幅約4.50mを計り、北部では2条の溝になる。検出長18.20m、深さは最深部で約0.50mを計る。

埋土は、3層に分かれ、上層から灰黒色砂質土、砂層、砂礫層に分けられる。砂礫層には、拳大の礫が多く見られた。

埋没状況は、砂礫層の形式に疑問が残るが、上二層のあり方から、徐々に埋没していったことが考えられる。

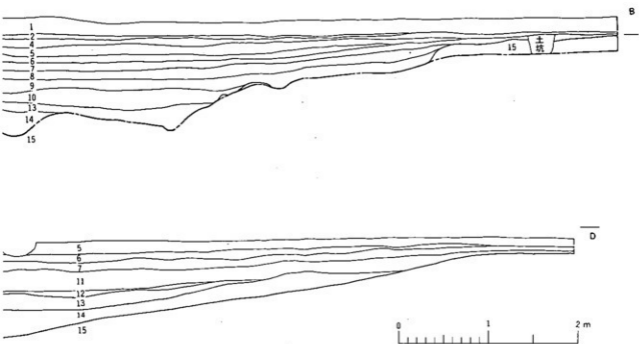
遺物は、各層から散発的に出土したが、年代的にはあまり大きな差は見られず、平安時代前半と考えられる。

方向は、溝の形状が一定でないことから、北端・南端の中心を結ぶ線を中心軸として設定すれば、N-30'-Wを示す。

S D 02 最大幅1.70m、検出長8.60m、最深部0.35mを計る。

この溝の東西に、併走する溝があり、埋土の状況が近似することと、S D 01のあり方から見て、全体でS D 02とすべきであろう。ただ東側の溝は西層の一部が検出されているにすぎず、全体の幅は不明である。

方位は、中央溝の中軸線では、N-18'30'-Wを示すが、検出長が短く参考にとどめておく。

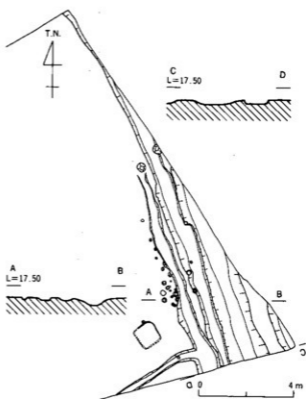


埋土は、3層に区分され、硬質細砂・灰色の細砂・荒い砂に区分することができる。

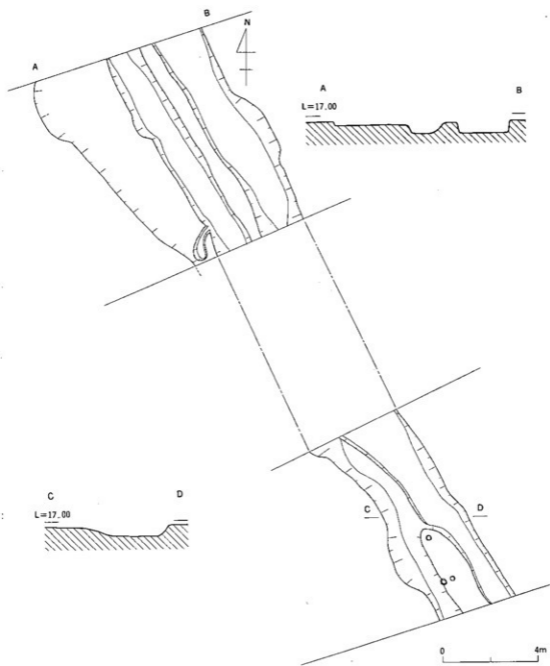
遺物は各層から散発的に出土し、銅印は溝底で検出された。

調査区東側には現水路が見られ、北部ではこの水路に重複する可能性が高い。

埋没状況は、S D01同様に、自然埋没であろうと推定され、その年代は平安時代前半である。



第6図 SD02 実測図



第7图 SD01 实测图

#### ④ 中世後半の遺構

中世後半の遺構は、調査区中央部西側で集中的に検出されており、その多くは柱穴である。ここでは、遺構の種類別に記述する。

##### <建物>

検出された建物址は15棟であるが、その他に多くの柱穴が見られる。柱穴の埋土には差が見られない。柱穴群を建物・柵列などの諸施設の痕跡であるとすれば、何回もの建て変えを想定しなければならないが、現状ではその痕跡が認められず、出土遺物からすれば比較的短期間の集落であった可能性が高い。今回建物址と考えている15棟以外にも建物の可能性があると同時に、15棟中にも若干の疑問が残るが、復元の一例として提示しておく。

S B01 1間×2間で主軸を南北方向にとる。南梁がやや不整形である。柱穴は径18~40cm、深さ26~40cmを計る。柱穴6穴中3穴に詰石が見られる。

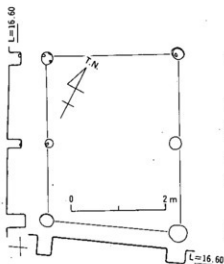
S B02 2間×3間で、主軸を東西方向にとる。南西部隅は調査区外で確認されていない。柱穴は径18~24cm、深さ12~30cmを計る。内柱も見られるが、方形区画をなさない。北辺の一部と東辺に廂を思わせる柱穴列があるがS B02との距離が52~58cm程度であり、廂とは考えにくく、柵列の可能性もある。

S B03 1間×北桁2間、南桁5間で主軸を東西方向にとる。柱穴の径は12~16cm、深さ10~20cmを計る。建物内北東隅に土坑(S K01)が見られるが、建物に伴うものかどうか不明である。柱穴は小規模で、これによって柱の数が増えたものと考えられるが、北(調査区外)に伸びる可能性も残されている。

S B04 4間×5間で、主軸を東西方向にとる。径12~20cm、深さ10~24cmを計る。S B03同様に、柱穴が小規模である。

第2表 掘立柱建物一覧表

	規模	方位	梁 行 (柱間平均値)	桁 行 (柱間平均値)	備 考
S B01	1間×2間	N-28°-W	2.78	3.70 (1.85)	
02	2間×3間	N-31°-W	4.05 (2.03)	6.12 (2.04)	
03	1間× $\frac{2}{5}$ 間(北/南)	N-24°-W	1.78	4.22 ( $\frac{2.11}{0.84}$ )	
04	4間×5間	N-25°30'-W	3.78 (0.95)	4.43 (0.89)	
05	3間×4間(?)	N-25°-W	3.05 (1.02)	5.49 (1.37)	1間は廂か?
06	1間×2間	N-25°-W	2.45	3.80 (1.90)	廂付
07	4間×5間	N-25°-W	3.88 (0.97)	4.14 (0.83)	
08	2間×3間	N-30°-W	3.60 (1.80)	8.46 (2.82)	
09	1間×2間	N-35°-W	2.42	3.42 (1.71)	不明
10	2間×2間以上	N-30°-W	2.94 (1.47)	(1.78) (0.89)	調査区外
11	2間×3間	N-31°-W	4.52 (2.26)	8.00 (2.67)	
12	1間×2間	N-28°30'-W	2.36	3.12 (1.56)	
13	1間×2間	N-28°30'-W	2.70	4.58 (2.29)	
14	1間×2間	N-28°-W	2.80	5.20 (2.60)	
15	2間×2間	N-25°30'-W	1.86 (0.93)	2.74 (1.37)	

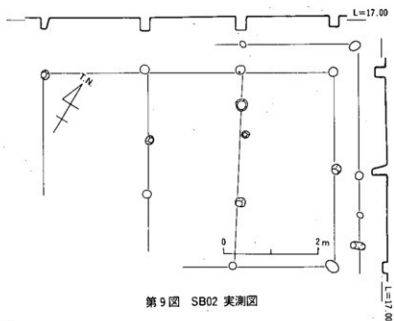


第8図 SB01 実測図

建物の周囲にはSD04・06・07がほぼ長方形に巡ることから、建物址を区画する溝と考えられる。

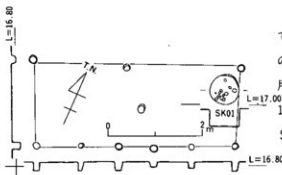
SB05 3間×4間で、主軸を東西方向にとる。柱穴は径14~22cm、深さ10~48cmを計る。桁行の柱間が不ぞろいである。東梁間は廂の可能性もあるが、東2列目の柱穴が西梁間に対応しないため、建物内の区分柱である可能性が高い。

建物位置は、東西に走るSD07が南へ屈曲するコーナーにあたり、SB05がSD07に規制された建物であることが伺われる。



第9図 SB02 実測図

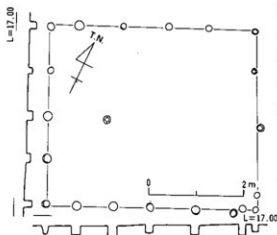
SB06 1間×2間で、主軸を南北方向にとる。ただ東桁行は4間になっており、2間の通常柱間に小柱穴が1穴ずつ配置される形のため、補助柱であることも考えられる。柱穴は径18~32cm、深さ16~46cmを計り、四隅の柱穴がこの建物の柱穴の中では規模が大きい。西辺に1間の廂が付く。建物との柱間は96cmを計る。



第10図 SB03 実測図

SB07 4間×5間で、主軸を東西方向にとる。東梁間が3間で南の桁行の柱穴が不ぞろいである。建物内に区分用の柱穴が見られる。柱の径は12~24cm、深さ10~20cmを計る。南北桁行の西から3穴目は、SD04に切られて消滅している。

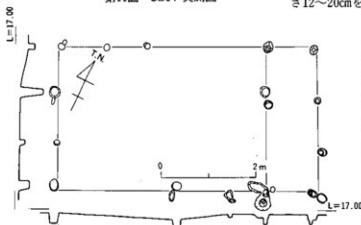
SB08 2間×3間で、主軸を東西方向にとる。ただ、西梁間は、ほぼ3間で南西の隅柱が欠落する。桁行も南辺は3間であるが、北辺に



第11図 SB04 実測図

は補助柱と考えられる柱穴が見られる。建物内には1間×2間の区分けの柱穴も見られる。柱穴は径18~42cm、深さ4~28cmを計る。この建物は、南の調査区外へ伸びる可能性もあり、確定規模ではない。

SB09 1間×2間で、主軸を南北方向にとる。東桁行は1間しかないが、柱間が広すぎるので中間の柱穴が欠落したものと考えられる。梁間も南で2.16m、北で2.42mとなり、全体では台形状を呈している。柱穴は径14~26cm、深さ12~20cmを計る。



第12図 SB05 実測図

SB10 2間×2間以上で、主軸を南北方向にとる。現状では総柱であるが、南の調査区外の状況が不明である。柱穴は、径20~28cm、深さ12~42cmを計る。梁間の柱間にばらつきが見られる。

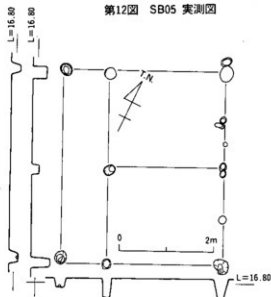
SB11 2間×3間で、主軸を東西方向にとる。西梁間は中間の柱が欠落しており現状では一間であるが、柱間が広いので欠落した

ものとする。

柱穴は、径20~28cm、深さ24~54cmを計る。東西の梁間外に柵列が見られるが、柱間は不ぞろいである。しかし、東柵列とは1.50mの距離があり、東梁間の柱穴と対応はしないものの廂である可能性も残る。

SB12 1間×2間で、主軸を南北方向にとる。柱穴は、径20cm前後、深さ6~16cmを計る。

SB13 1間×2間で、主軸を東西方向にとる。柱穴は、北西隅柱穴と南桁行中間の柱穴が欠落している。柱穴は、径20~24cm、深さ12~20cmを計る。建物内中央部に焼土坑(SK04)が



第13図 SB06 実測図



見られるが、土坑主軸と建物主軸が合致しておらず、建物に伴う土坑であるかどうかは不明としておく。

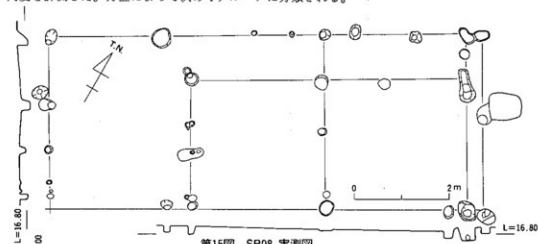
SB14 1間×2間で、主軸を東西方向にとる。柱穴は、径20~40cm、深さ14~28cmを計る。

SB15 2間×2間で、主軸を南北方向にとる。南梁間はSB05の柱を共有する。又、東桁行は、北から3穴目が溝(SD07)にあたるため、本来2間×3間であった可能性もある。

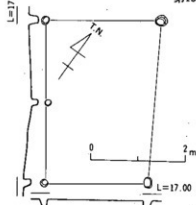
柱穴は、径12~14cm、深さ14~20cmを計る。現状では総柱である。

現在確認される建物は、以上15棟であるが、次に方位について記したい。

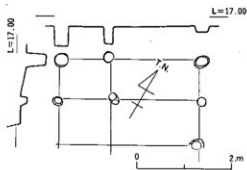
方位は、主軸が南北方向であればそのまま、東西方向であれば主軸と直交する線と真北とのなす角度を計測した。方位によって次の4グループに分類される。



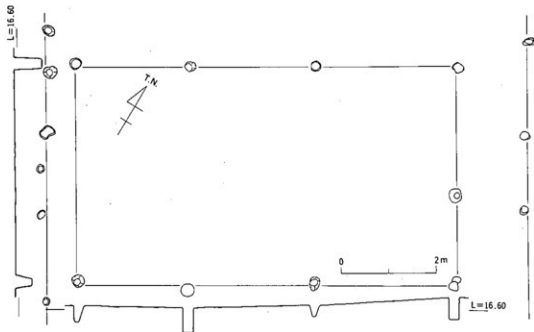
第15図 SB08 実測図



第16図 SB09 実測図

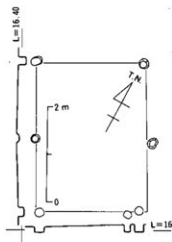


第17図 SB10 実測図



第18図 SB11 実測図

- I N-25°-W前後 6棟 SB03 SB04 SB05 SB06  
SB07 SB15
- II N-28°-W前後 4棟 SB01 SB12 SB13 SB14
- III N-30°-W前後 4棟 SB02 SB08 SB10 SB11
- IV N-35°-W前後 1棟 SB09



第19図 SB12 実測図

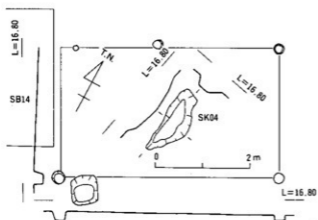
各グループの特徴として、グループIは、集落の中心部に集中し、中心的な建物であると考えられる。

グループIIは、集落の外縁部に位置する。

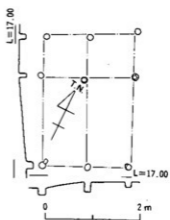
グループIIIは、調査区の南辺に位置するものが多い。

グループIVは、1棟だけでありこれといった特色はない。

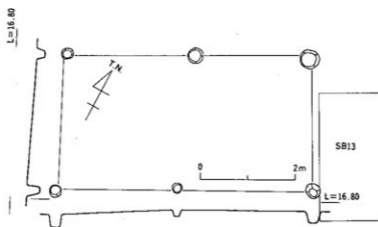
現状での周辺水田区画の方が、N-30°-Wを中心としていることを考え合わせると、ほぼ、その誤差内である。当時の集落が規則的な建物配置を持たなかったと考えるか、グループIに属するSB03, 04, 05, 06, 07, 15の6棟が集中していること、溝状遺構を伴うものが多いことを考え合わせて、グループIが示す方位が、ある一時期規制された方位であった可能性を示唆するものであると考えるかは、今後の丸亀平野における中世集落の構造を把握していく中で解明されていくのではないだろうか。ともあれ、グループIと他グループとの間に何らかの区分があった可能性は強い。



第20图 SB13 实测图



第22图 SB15 实测图



第21图 SB14 实测图

#### <溝>

S D03 S B07の西辺をコ字状に囲む溝である。検出時の規模は、幅28cmで北辺2 m、西辺5.2 m、南辺4.4mを計る。本来の形状は不明である。

なお、S D03はS D04によって分断されており、時間的に先行するものである。又、S D03によって切られている溝が2条あるが、痕跡程度であり、本来の用途は不明である。ただ、この地域が集落化される以前の耕作に伴う痕跡である可能性もある。

S D04 幅0.52m、長さ28.6mを計る。集落中心部の西限を限る溝である。S D04からはこれを基幹として、S D06、07、08の各溝が東へ向かって伸びており、建物配置上重要な位置をしめるものと考えられる。又、S D04はS D05とほぼ直交する形で北へ伸びる。

S D05 幅0.5m、長さ15.4mを計り、S D04と直交して東西方向に伸びる。

S D06 幅0.5m、長さ北辺11.2m東辺5.6mを計り、]字状に囲る溝である。この区画内にS B04がS D04に接する形である。

S D07 S D06の南辺を東西に延長する形で]状で検出されている。幅0.90m、長さ北辺14.4 m、東辺は現状で4.60mを計る。この溝の延長部分は検出されておらず、自然消滅するものと考えられる。以上のようにS D06、07、08に囲まれた内側に、S B05、06がある。

S D08 S D04のほぼ南端から]状に分岐する溝である。幅0.7m、長さ北辺で4.4m、東辺で5.6mを計る。溝内埋土中から、石臼片、土器片、礫が検出されている。

S D09 S D08から東へ派生する溝。幅0.6m、長さ21.7mを計る。

S D10 S D08に切られている。幅0.25m、長さ17.70mで、S D11に合流する。

S D11 S D09に切られているが、S D09より北には伸びていない。幅0.8m、長さ8.4mを計る。東辺をS D11、北辺をS D10に囲まれた「状内にS B08がある。

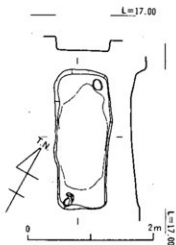
#### <その他の遺構>

S P04内から、土師質小皿が合わせになった状態で出土している。これは、土師質小皿を身蓋にして使用したものと思われるが、内容物は残存していなかった。中世集落内でのこのような例は、徐々に増加しており、その意味付けについては、今後を待ちたい。

### <土坑>

SK01 径60cmの円形を呈し、深さ34cmを計る。土坑内から、小礫・土器片が検出されている。SB03内に存在することから建物内の施設とも考えられる。

SK02 長径2.2m、短径90cm、最深部24cmを計る長方形の土坑である。対角線上二隅に拳大の河原石が見られる。

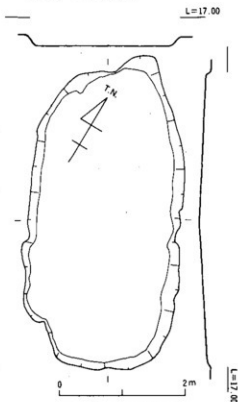


第23図 SK02 実測図

土坑の形状からして、墓墳である可能性もあるが、底部が平坦ではないこと、出土遺物が見られないことから、性格は不明としておく。

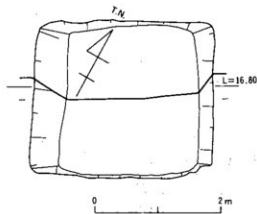
SK03 長径4.70m、短径2.40m、最深部18cmを計る楕円形の土坑である。遺物が少量出土しているが、性格は不明である。

SK04 長径1.52m、短径0.58m、最深部で18cmを計る不整形な土坑である。四壁は焼土化していた。SB13内に存在するが、建物に伴う遺構かどうかは不明である。

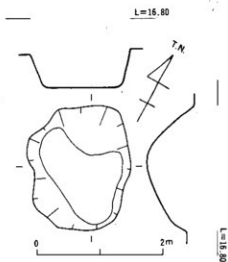


第24図 SK03 実測図

⑤ 近世以降の遺構



第25図 SK05 実測図



第26図 SK06 実測図

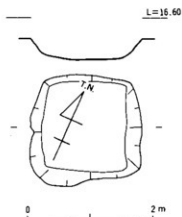
<土 坑>

SK05 長径2.90m, 短径2.40mの長方形を呈する。深さは0.35mを計る。内容物には近代以降の陶磁器類が多く包蔵されていた。

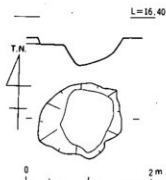
SK06 長径2.00m, 短径1.60m, 深さ0.7mの不整形円形を呈する。土坑内からは、近世以降の土器が出土した。

SK07 一辺約1.8m, 深さ0.34mの不整形方形を呈する。

SK08 長径1.3m, 短径1.2m, 深さ0.46mの不整形円形を呈する。



第27図 SK07 実測図



第28図 SK08 実測図

<溝>

S D13 溝西辺は確認されていないが、検出時の状況で、幅2.90m、長さ6.90m、深さ約0.6mを計る。市道南側で延長が確認されていない為、現在の水路と合流する可能性が高い。溝埋土中から瓦等の破片が出土した。

S D14 幅1.2m、長さ8.0m、深さ約0.3mを計り、S D09にほぼ併走する。溝底から板状木製品と箸?が出土している。



発掘作業風景（建物跡）

### 3. 遺物

#### (1) 縄文時代の遺物

##### <出土状況>

縄文時代に属する遺物に石棒がある。石棒は、第4層に全体の2/3がめりこむ形で出土し、掘り方等は検出されなかった。したがって、第4層中に含まれていたものか、第4層上面からめりこんだものであるかは不明である。しかし、4層上面が比較的安定しつつも、縄文時代の生活の痕跡が皆無であること、第4層が縄文時代後期前半以降の生活面であると推定され石棒の年代観に合致せずやや後出することから、第4層の形成時、縄文時代後期初頭（中津式）の段階に含まれたと理解している。

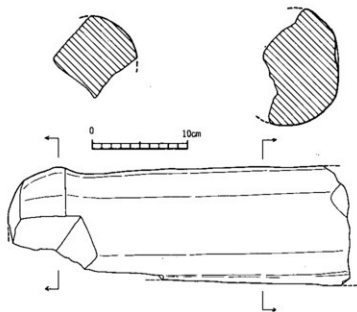
##### <石棒>

石棒は、全長36cm、最大径12.5cm、先端より7.5cmの所でくびれており、くびれ部の径は現状で8.0cmを計る。全体の2/3が欠損している。

材質は結晶片岩製である。

##### <土器>

J1は、底径3.0cmを計る。やや上げ底気味の底部片である。色調は暗茶褐色で、1mm前後の砂粒（石英・長石等）を多く含む。外面調整は横方向に砂粒が動いた痕跡があり、ヘラ削りもしくは糸痕であろうと考えられる。



第29図 石棒実測図

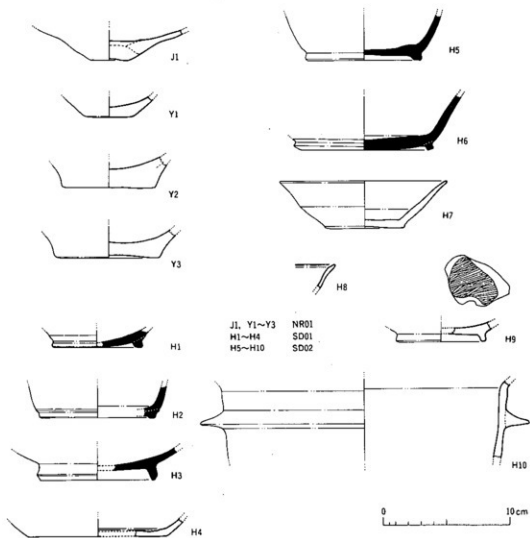


## (2) 弥生時代の遺物

### <土器>

NR01第5・6層(第5図)から弥生土器の底部が3点とその他の地点から石鏃1点、スクレーパー2点が出土した。

弥生土器は、Y1が底径3.8cmのやや丸味を持つ平底で、色調は淡茶褐色である。底径と底部の厚みから後期に属するものと考えられる。Y2は底径7.4cmで、色調は淡赤褐色である。1~2mmの砂粒を多く含む。形体・胎土から前期に属するものと考えられる。Y3は底径8.2cmでややあげ底の平底で、色調は黄色っぽい乳白色である。1~2mmの砂粒を多く含む。形体・胎土から前期に属するものと考えられる。3点とも内外面の調整が剥落によって観察できず、詳細な時期、器種は不明である。



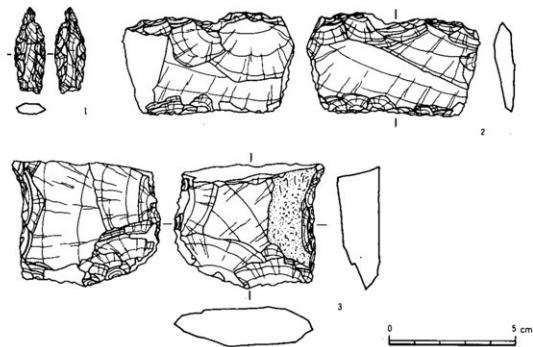
第30図 NR01, SD01, SD02 出土土器実測図

### <石器>

①石鏃は、所謂「ロケット型」を呈し、2側縁とも両面で調整が見られる。全長3.4cm、最大幅1.2cm、厚さ0.4cmを計る。両面ともに、剥片時の剥離面が観察される。(SD08)

②板状のスクレーパーである。刃部は両面調整で、反対側縁に刃潰し調整が見られる。両サイドとも折損しているが、一方は製作時及び使用時の折れであろうと考えられる。(SP10)

③は、半切のスクレーパーである。刃部は両面とも細かな調整が見られ、反対側縁はやや荒い刃潰し加工が両面に見られる。サイドは、片面のみ細かな調整が見られ、形体調整とも見られる。逆サイドは、折れており使用時のものであろうと考える。(SD10)



第31図 石器 実測図

### (3) 平安時代の遺物

#### SD01の遺物

H 1 は、高台付坏で高台部から外上方へ直線的に伸びる体部を有する。

H 2 は、高台付坏で、低い高台部からやや内彎しながら上方に伸びる体部を有する。

H 3 は、高い高台を持ち、高台端外側に斜めに切られたような形状を呈し、体部はやや丸味を持ちながら外上方に伸びる。外面及び内面の一部に灰釉が見られる。

H 4 は、土師器坏で、内外面ともに調整不明である。

第32図は、銅製の巡方である。一辺3.0cm×3.1cm、高0.3cmを計り、中央やや上方に0.6×1.7cmの方孔が見られる。内面の四隅に鋳痕が見られる。

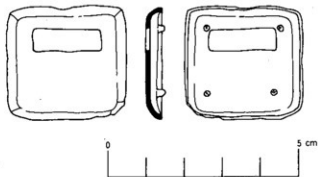
#### SD02の遺物

H 5 は、須恵器の高台付坏で、高台は外下方にふんばり、体部は丸味を持って外上方へ伸びる。

H 6 は、高台付坏で、高台は外下方にふんばるつま先上がりを呈し、体部は外上方に直線的に伸びる。

H 7 は、土師器坏で、平底の底部から2回外反しながら外上方へ伸びる。色調は白っぽい淡茶褐色である。

H 8 は、緑釉の口縁部破片で、やや端反りの形態を示し、内外面ともうす黄緑色の釉がかかっている。

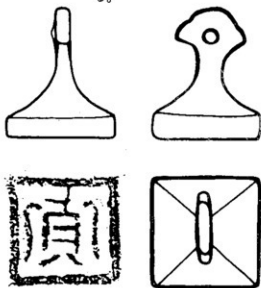


第32図 帯金具 実測図

H 9 は、内黒の黒色土器で、内底には横方向のミガキがみられる。又、高台内側も黒色を呈す。

H 10 は、土師器の羽釜で、口縁部は断面三角形の鏝から上方に伸び屈曲して外上方に伸びる形態を示す。3～5mmの砂粒を多く含む。

第33図は、銅印である。印面は2.8×2.8cm、高0.6cmの方形で幅1.8×高2.9cmの苔紐有孔のつまみを有する。印面の文字は、「貞」で文字の左右に裝飾と考えられる。「ノ」が見られる。



第33図 銅印 実測図

#### 4) 中世後半の遺物

##### <建 物>

(S B01) T 1 は、土師質小皿である。径8cm高1.2cmを計る。口縁部はやや丸味を持ち端部を丸くおさめる。底部はヘラ切りである。

(S B02) T 2 は、土師質小皿である。径6.9cm高1.0cmを計る。口縁部は外反しながら端部を丸くおさめる。底部はヘラ切りである。

(S B07) T 3 は、羽釜Aである。丸く幅のない鈎から内上方に短く伸びる口縁部が付く。内外面ともナデ調整である。口径18.2cm。

T 4 も羽釜Aである。丸く幅のない鈎から内上方に短く伸びる口縁部が付く。内外面ともナデ調整である。口径26.2cm。

##### <土 坑>

S K 01の土器 T 5 は、羽釜Bである。球形の体部に丸く短い鈎を持ち、口縁部が水平に近い形になる。

T 6 は、土師質摺鉢である。3条を1単位にし2列を基本としてまばらにオロシ目を配している。形態は土鍋Bである。

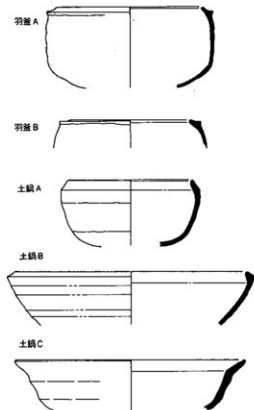
S K 02の土器 T 7 は、羽釜Aである。やややかなカーブを描く底部から、ほぼ直線的に上方に伸びる体部を有し、幅の狭い鈎を持ち、屈曲して内上方へ伸びる口縁部を持つ。調整は内底が刷毛目(10条/cm)、他はナデである。体部外面には煤の付着が見られる。

T 8 は、T 7 同様

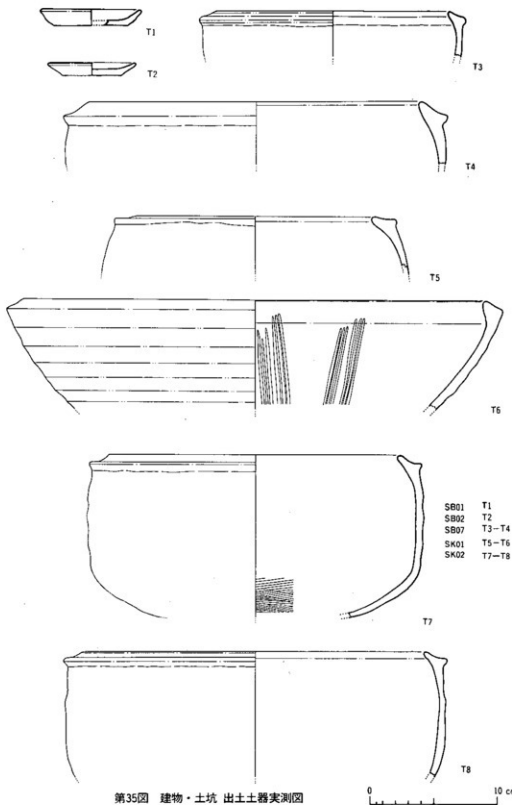
S K 03の土器 T 9 は、土師質小皿である。ヘラ切りの底部からやや丸味を持ち外上方に伸び、丸く終わる口縁部を有する。調整は内外面ともナデである。

T 10は、羽釜Aである。把手と把手上方の円孔が見られる。内面には5本/cmの刷毛目が施される。把手は内面調整後に付け、円孔も同時に穿かれていることがわかる。

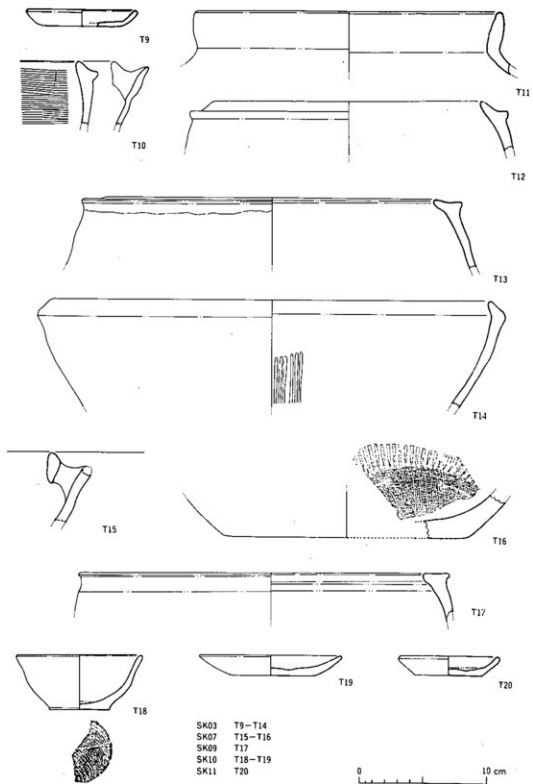
T 11は、土師質壺である。丸味を持ちながら上方へ短く伸びる口縁部を持つ。色調は、乳白色で、5mm前後の石英粒を多く含む。



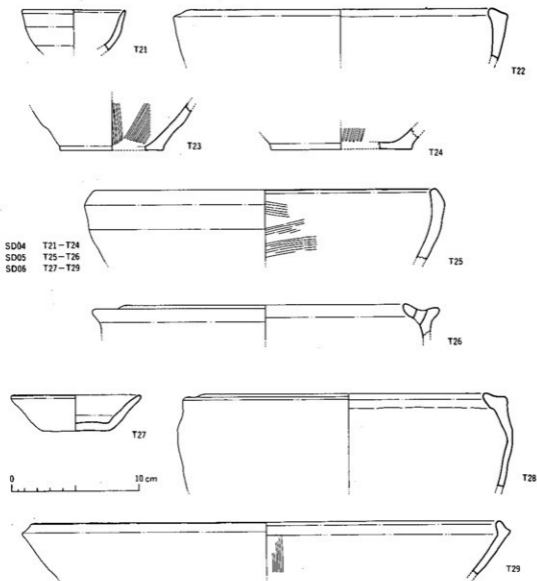
第34図 蓋・鍋類の形態分類



第35图 建物・土坑 出土土器実測図



第36图 土坑 出土土器实测图

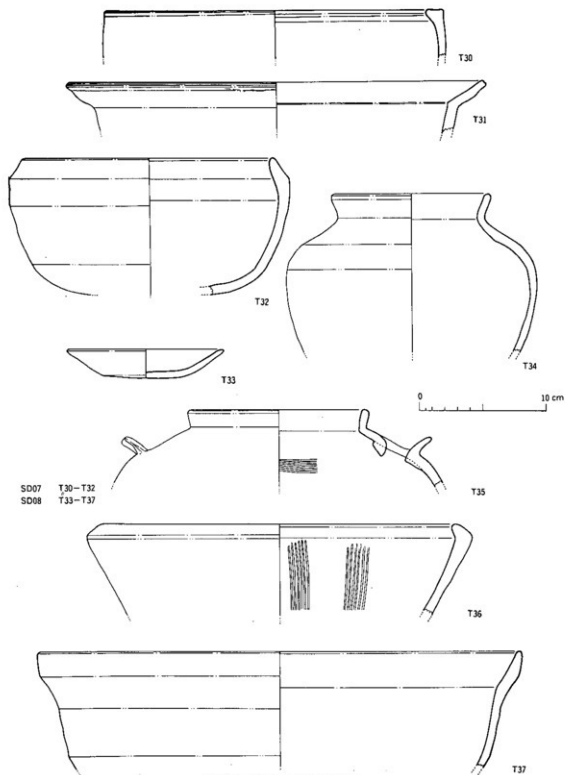


第37図 溝出土土器実測図(1)

T12・T13は、羽釜Aである。球形の体部に丸く短い鐔が付き、外上方へ伸びる口縁部を有する。

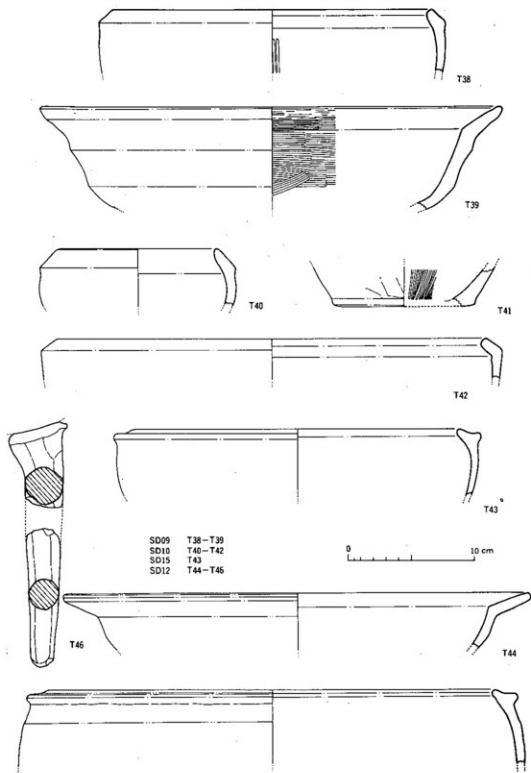
T14は、土師質攪鉢である。底部からやや丸みを持ちながらも直線的に外上方へ伸びる体部を持ち、屈曲して内上方へ短く伸びる口縁部を有する。6条を1単位とするオロシ目がまばらに施されている。形態は土鍋Bである。

SK07の土器 T15は、土鍋の把手である。把手上方には斜めに円孔が見られ、調整は内外面ともナデである。



第38图 清 出土土器实测图(2)





第39图 清出土土器实测图(3)

T45

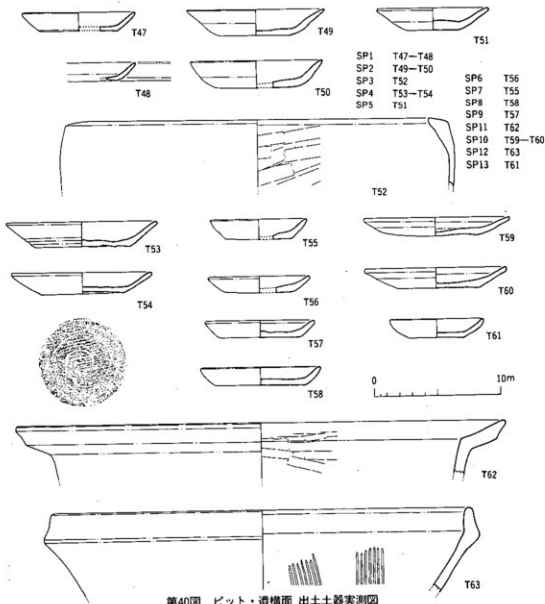
T16は、陶製摺鉢の底部である。条線は、内底に6本を1単位とする細線が見られ、体部内側には全面オロシ目が観察される。色調は、赤褐色を呈し、混入品と推定される。焼成地は不明である。

SK09の土器 T17は、羽釜Bである。調整は、口縁部内・外面がナデである。

SK10の土器 T18は、椀Aである。糸切り底から内彎しながら外上方へ伸びる体部を持つ。

T19は、土師質小皿である。ヘラ切りの平底から外上方へ内彎しながら伸び、端部は丸い。

SK11の土器 T20は、土師質小皿である。ヘラ切りと底部から外上方へ伸びる口縁部を有する。底部には板目が見られる。通有の土師質小皿に比して焼成が良好であり、近世まで下る可能性もある。



第40図 ビット・遺構面 出土土器実測図

<溝>

S D04の土器 T21は、土師質坏である。内彎する体部から外上方へ直線的に少し伸び、端部は鋭い。色調は乳白色で、胎土は精緻である。

T22は、土師質土鍋Aである。口縁部がやや斜めに内上方へ伸びる。

T23は、7条を1単位とする土師質摺鉢の底部である。条線はまばらに配されている。口縁形態は不明である。

T24は、現状では6条を1単位とする土師質摺鉢の底部である。口縁形態は不明である。

S D05の土器 T25は、土師質土鍋Aである。体部から口縁部への屈曲部はやや丸味をもつ。内面調整は刷毛目。

T26は、土師質土鍋Aである。釣部に把手を付け、把手上方から内面に向かって斜めに円孔をもうける。

S D06の土器 T27は、陶製坏である。平底の底部から外上方へ直線的に伸び、端部は丸く終わる。

T28は、土師質羽釜Aである。幅の狭い鈎から内上方へ短く伸びる口縁部を有する。端部は丸く終わる。

T29は、土師質摺鉢である。直線的に外上方へ伸びる体部から、ほぼ直角に内上方に屈曲する口縁部を有する。内面には6条を1単位とするオロシ目が見られる。オロシ目の条線は細かい。形態的には土鍋Bである。

S D07の土器 T30は、羽釜Bである。口縁部が内上方ではなく内側に伸びる。土鍋Bの形態に類似する。

T31は、土鍋Cである。浅い体部から外上方へ直線的に伸びる口縁部を有する。端部は丸い。内面は刷毛目調整ののちナデである。

T32は、土師質土鍋Aである。半球状の体部から内上方へ屈曲して口縁部に至り、端部は丸く終わる。内面は丁寧なナデ調整、外面は煤の付着が著しい。

S D08の土器 T33は、土師質坏Bである。ヘラ切りの底部から浅く外上方へ伸び、端部は丸い。内外面とも磨滅しており調整は不明である。

T34は、土師質壺である。肩の張る球形の体部から外上方へ短く伸びる口縁部を有する。端部は丸い。内外面とも調整はナデである。(短頸壺)

T35は、土師質壺である。球形の体部から上方へ短く伸びる口縁部を有する。端部は丸い。把手と把手上方に円孔が見られる。内面調整は刷毛目である。

T36は、土師質擂鉢である。直線的に外上方へ伸びる体部から屈曲して内上方へ伸びる短い口縁部を有する。内面には6条を1単位とするまばらなオロシ目が見られる。形態は土鍋Bである。

T37は、土鍋Dである。ゆるやかにカーブする体部から外上方へ伸び、屈曲して上方に伸びる口縁部を有する。端部は丸い。内面調整は刷毛目のちナデで、外面には煤の付着が著しい。

S D09の土器 T38は、体部から内上方に屈曲する口縁部を持つ土師質擂鉢である。現状では2本+αを一つの単位として、まばらな状況でオロシ目が見られる。調整は、内外面ともナデで、体部形態は土鍋Aと同様である。

T39は、浅い体部から外上方に直線的に伸びる口縁部を持つ土鍋Cである。外面調整は、指ナデで、内面調整は7~8本/cmの刷毛目のちナデを施している。体部外面には煮こぼれと思われる付着物が見られる。

S D10の土器 T40は、土鍋Aである。球形の体部から屈曲して内上方に直線的に伸びる口縁部を有する。

T41は、土師質擂鉢の底部である。オロシ目は、4条/cmで、体部形態は不明である。

T42は、垂直気味の体部を持つ土鍋Bである。

S D15の土器 T43は、幅の狭い丸い罎から内傾する短い口縁部を持つ羽釜Aである。内外面ともナデ調整である。胴部下半に煤が付着している。

S D12の土器 T44は、浅い体部に外上方に直線的にのびる口縁部を有する土鍋Cである。内外面ともナデ調整である。外面は煤の付着が顕著である。

T45は、幅の狭い丸い罎から内傾する短い口縁を持つ羽釜Aである。内外面ともナデ調整である。

T46は、土鍋の脚部である。断面は円形を呈する。

< Pit >

S P 1の土器 T47は、土師質小皿である。ヘラ切りの底部からやや丸味を持って外上方へ伸びる。灯芯による煤の付着が認められる。

T48は、T47と同様である。

S P 2の土器 T49は、土師質皿である。底部から外上方へやや外反気味に伸びる。端部は鋭く、内外面とも磨滅している。

T50は、土師質皿である。底部からやや丸味を持ち外上方へ伸びる。内外面とも磨滅している。

S P 5の土器 T51は、土師質小皿である。糸切り底部からやや外反しながら外上方へ伸びる。内外面とも磨滅している。

S P 3の土器 T52は、土鍋Bである。色調は淡肌色で3mm前後の砂粒を多く含む。

SP4の土器 T53は、ヘラ切りの底部から、直線的に外上方へ伸びる土師質皿である。

T54は、ヘラ切りの底部から、やや丸みを持って外上方へ伸びる土師質皿である。底部には板目が見られる。

SP7の土器 T55は、糸切り底から内彎しながら外上方へ伸びる土師質小皿である。

SP6の土器 T56は、土師質小皿である。底部からほぼ直線的に外上方へ伸びる。灯芯の痕跡が認められる。

SP9の土器 T57は、ヘラ切り底からほぼ直線的に外上方へ伸びる土師質小皿である。

SP8の土器 T58は、ヘラ切り底から内彎しながら外上方へ伸びる土師質小皿である。底部には板目が見られる。

SP11の土器 T62は、土鍋Dである。ほぼ直線に伸びる体部から、やや内彎しながら外上方へ伸びる口縁部を持つ。内面の調整は、刷毛目のちナデ。外面には煤の付着が認められる。

#### <遺構面>

E-10の土器 T59は、ヘラ切り底から外反しながら外上方へ伸びる皿である。

T60は、ヘラ切り底から外反しながら外上方へ伸びる皿である。底部に板目が見られる。

D-13の土器 T61は、土師質小皿である。糸切り底から内彎しながら外上方へ伸びる。

F-12の土器 T63は、土師質擂鉢である。直線的に外上方へ伸びる体部から屈曲して短く伸びる口縁部を有する。7条の条線を1単位としてまばらに配する。色調は淡茶褐色で、2~3mm程度の砂粒を多く含む。形態は土鍋Bである。

#### 中世遺物のまとめ

土師質小皿と皿の区分は、口径と深さの法量表によって行なった。土師質小皿は、口径6.3-9.5cm、深さ1-2.2cmの範囲、皿は、口径10.4-12cm、深さ1.5-2.2cmの範囲で考えている。

羽釜Aと羽釜Bは、口縁部の傾きによって二分したが、個体差の範囲内に納まる可能性もある。

羽釜Aと土鍋Aは、鈔の有無程度の差しかなく、羽釜の鈔が徐々に退化する傾向の中では、羽釜Aから土鍋Aへの変化を考えてもいいかもしれない。

少なくともこの時代には共伴関係があり、使い分けが考えられよう。

土鍋Bとしたものは、すべて土師質擂鉢である可能性が高いが、小破片でオロシ目のみられないものもあり、一応区分しておく。

以上の遺物群のセットとしては、羽釜A(B)、土鍋A、土師質擂鉢(土鍋B)、土鍋C及び土師質小皿、皿が考えられる。

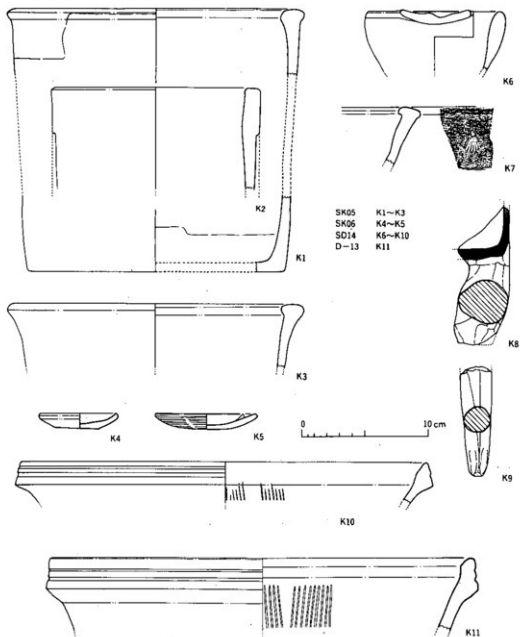
時代差と考えられる程形態差が見られず、一応同時期の所産と考えておく。

時期は、比較する遺物群がなく詳細な検討ができないが、一応中世後半と考えている。詳細な時期は今後の課題である。

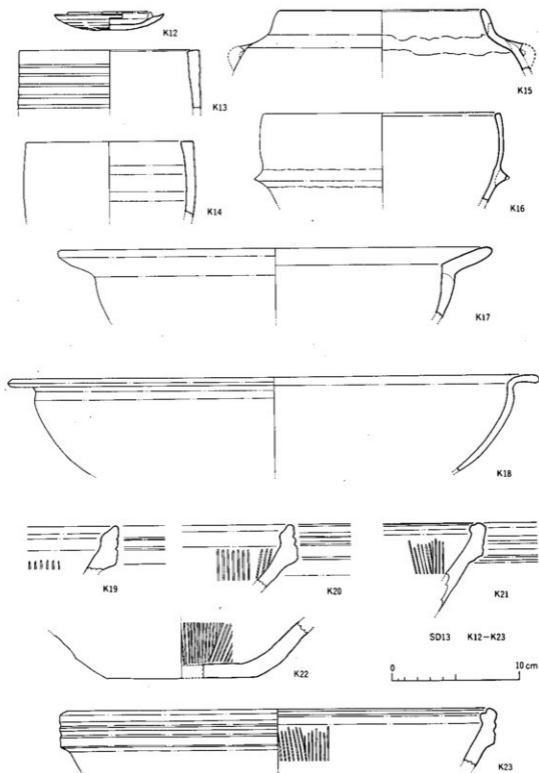
⑤ 近世以降の遺物

<土 坑>

S K 05の土器 K 1は、土師質の火鉢である。内面には煤の付着が見られる。調整は内外面ともナデである。



第41図 近世遺物実測図(1)



第42図 近世遺物実測図(2)

K 2は、K 1と同様である。

K 3は、陶質風の胎土を持つ鉢である。外面は丁寧なミガキが見られる。

S K 06の土器 K 4は、糸切り底から外上方へ直線的に伸びる土師質小皿である。色調は乳白色である。

K 5は、備前焼灯明皿である。底部はヘラ切りで内面に凸帯を持ち、灯芯用に3か所切り込みが見られる。

<溝>

S D 14の土器 K 6は、形態不明である。

K 7は、口縁部内面に拡張があり、上に平坦な面を持つ鉢である。外面に二枚貝のスタンプが見られる。

K 8は、火鉢の脚部である。脚の付部の形状からして角火鉢になる可能性が高い。

K 9は、土鍋脚部の先端である。中世遺物の混入である可能性が高い。

K 10は、陶製擂鉢である。口縁部外面は拡張し、凹線が二条見られる。内面には7条を1単位とするオロシ目が見られる。オロシ目は細い。

D-13の土器 K 11は、陶製擂鉢である。口縁部外面は拡張し、凹線が二条見られる。内面には9条を1単位とするオロシ目が見られる。オロシ目は細い。口縁部外面拡張部のみ軸が見られる。

S D 13の土器 K 12は、備前焼灯明皿である。底部は糸切りの後、体部外面をヘラ削りしている。内面には凸帯が見られ、灯芯用切り込みがある。

K 13は、陶器の鉢である。口唇部は平坦面をなし、体部はほぼ直線に立ち上がる。外面には、現状で5条の凹線が巡っている。調整は内外面ともナデで、色調は暗茶褐色である。

K 14は、陶器の鉢である。口唇部は平坦面をなし、体部はほぼ直線に立ち上がり、調整は内外面ともナデである。色調は、外面がやや暗い暗茶褐色、内面は淡赤褐色を呈している。

K 15は、瓦質の壺である。肩部が少し張り、口縁は短く内上方に伸びる。半輪状の把手が剝落した痕跡がある。

K 16は、瓦質の羽釜である。断面三角形を呈する短い鋳から、やや内彎しながら内上方へ伸びる口縁部が付いている。体部よりも口縁部が大きなやや異形の羽釜である。体部外面鋳下に煤の付着が見られる。

K 17は、土鍋Cである。混入の可能性がある。

K 18は、焙烙である。浅い半球状の体部から外方に伸びる口縁を持ち、口唇部をやや拡張する。外面には煤の付着が見られる。器壁は均一に薄く、内面調整はナデである。

K 19は、擂鉢である。口縁部外面を拡張し、二条の沈線を施す。条線は6条以上を1単位とする。色調は、淡いセピア色である。

K 20は、擂鉢である。口縁部外面を拡張し、二条の凹線を施す。条線は7条を1単位とする。



色調は、体部外面が淡茶褐色で、その他は濃茶褐色を呈している。重ね焼きによる。

K21は、摺鉢である。口縁部外面を拡張し、二条の弱い凹線を施す。条線は6条以上を1単位とし内面全面に施す。口唇部に凹線が一条見られる他、体部外面に横方向のヘラ削りがある。

K22は、摺鉢底部である。内底から内面全面に条線が施される。条線は7本を1単位としている。体部外面下半には横方向のヘラ削りが見られる。

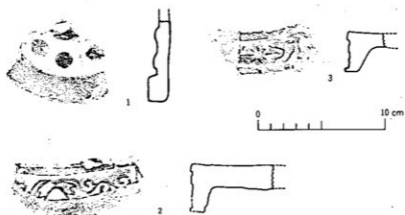
K23は、摺鉢である。口縁部外面を拡張し、二条の凹線文を施す。口唇部に凹線が一条見られる。

#### <瓦>

1は、丸瓦瓦当で左回り巴文である。珠文の大きき巴の尾の太さからして、江戸時代中頃以降の所産と考えられる。(SD14)

2は、平瓦瓦当で均正唐草文である。文様線が均一であること、瓦当面对する文様の占める割合が低いことから、江戸時代中頃～後半の所産と考えられる。(SD14)

3は、平瓦瓦当である。中心の文様しか分からないが、文様線が細いことから、江戸時代中頃までの所産と推定される。(SK12)



第43図 瓦 実測図

#### <金属製品>

銅銭 第44図は、寛永通宝である。裏面には「文」の字が見える。(SD14)

図版36は、径2.3cmを計るが、文字は判読できない。(SK03)

簪 図版36は、上部が平板で下半が円柱をなす青銅製品で、下半は折れたものと推定され、「簪」であろうと考えられる。継目の部分は中空になっており、上部も本来円柱状のものをたたき延ばしたものである。(E-10区第1遺構面)

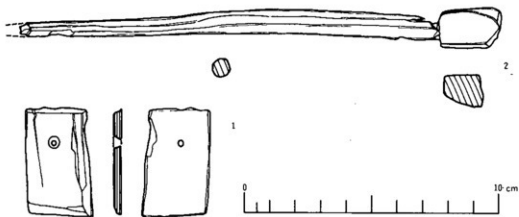
<木製品>

1は、木札である。表裏面が平滑に仕上げられた後、4周を削って形態を整えている。円孔は一方方向から穿っている。文字等は見られず、用途は不明である。(SD13)

2は、箸もしくは簪と推定される。頭部は円柱状に太く残し、体部は先端に向かって徐々に細く仕上げられている。(SD13)



第44図 銅銭拓影



第45図 木製品実測図

#### 4. ま と め

中村遺跡は、当初弥生集落の存在が予想されたのであるが、調査の結果、室町時代中葉～後半を中心とする集落址であることが判明した。

しかしながら、その前後の遺構も散発的にはあるが検出されていることから、調査区内の資料をもとに、この地区の土地・環境及び利用の変遷を概観することでまとめにかえたい。

##### < I 期 >

丸亀平野の地山は、従来、黄色っぽい粘土層であると考えられてきたが、善通寺市域の調査の過程で、この土層が縄文時代後期前半以降に形成されたものであり、この土層そのものが縄文時代の包含層であると認識されるに至っている<sup>註</sup>。

中村遺跡では、この黄色っぽい粘土層中から石棒の出土を見たのみで、縄文土器片の存在は確認されていない。

このことは、同一土層とはいえ、その当時の生活空間に近接した地点でのみ縄文土器の包含がありえるという常識的な状況を示している。

この土層（中村遺跡第4層）上面で検出された遺構として、自然河川・溝がある。自然河川は、その埋土中から縄文土器底部1点と弥生土器底部3点が検出されたことから、上限を縄文時代の中で、下限を弥生時代の中に求めることができる。

又、中村遺跡の西方旧河道を挟んだ西側、乾遺跡で検出している自然河川では、埋土上層から弥生時代前期壺形土器が出土し、機能していた年代が縄文時代まで遡ることが考えられている。

（本書 III. 乾遺跡）

中村遺跡東方約180mの地点（永井遺跡）でも、同様の自然河川が検出され、埋土中から縄文時代後期前半以降の土器群が検出されている。

以上のことから、善通寺市域の沖積平野は、旧石器時代末期から徐々に海進と河川の発達によって形成され、その最終段階が縄文時代後期初頭にあたる。この後、若干の海退があったと言われており、この時、多くの自然河川が形成され、第4層上面が縄文時代後期前半以降の生活面となるが、後世の地下げ等で生活面そのものは削平されたものと考えられる。

このように縄文時代後期前半以降の生活面が、従来言われてきた地山であると考えられるが、近年の地下げによって、深度のある遺構のみその形態をかくうじて残していると言える。

## <II期>

検出された遺構として、溝が二本ある。

これらの溝は、埋土が砂で形成されていることから、徐々に埋没したことが考えられ、その年代は平安時代の前半（9～10c）に比定される。

この溝のあり方からして、平安時代にはその機能があまり生かされていないこと、現在の水田区画方向と合致すること、溝間が110m前後を計ることなどから、条里制施行に伴う溝である可能性が高い。

又、埋没の状況から見て、溝が機能していた年代は奈良時代に遡ることも予想され、平安時代での廃絶の理由に興味を持たれるところである。

次に、この二本の溝中から、銅印と帯金具が検出されたことについて考える必要がある。

銅印は、その形状から平安時代に作られたものである可能性が高いが、帯金具は、奈良時代の所産である可能性が高いこと、両者とも貴族階級の人の所持品であることを考えると、条里推定線上の中村遺跡南側の方一町区画に、これらの人々の邸宅址の存在も推定しうのではないだろうか。

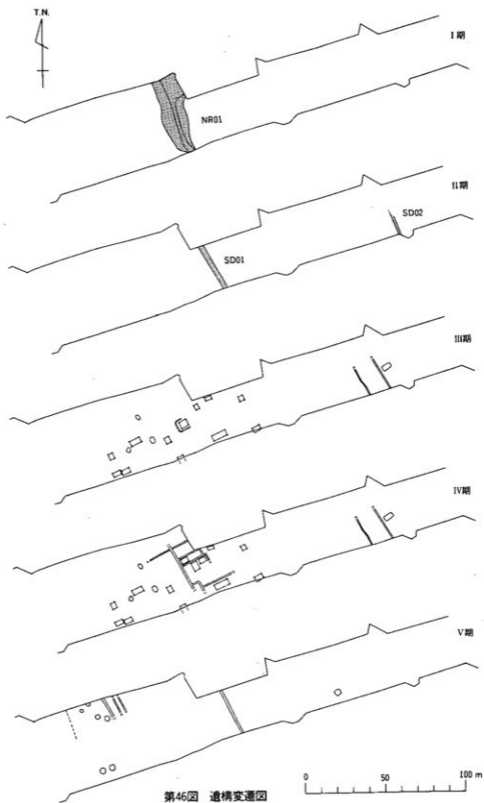
このように、弥生時代以降この時代まで、間に存在する遺構・遺物は無い。このことは、より安定した土地に居住区が集中していたことを考えさせ、この地域が生産地域としてのみ活用されていたか、非生産地域であった可能性も考えておく必要がある。又、S D01・02の上限が奈良時代まで遡るかどうかは、今後の調査に待たなければならないが、その間、たとえ生産地域としても、諸施設をあまり伴わない形態での水田耕作を考える必要がある。

## <III期>

奈良～平安時代にかけて水田化されたこの地区は、平安時代前半時に水田区画の変化が図られるものの、そのまま水田として利用され、室町時代中～後半頃に居住区になる。

この時期をIII～IV期に区分したのは、S B07を囲む溝及びS B07の柱穴が、S D04（S B04-06を囲む溝）に切られていること、S B15が、S B05と一部柱穴を共有することの2点による前後関係を想定しうるにすぎず、こうした溝に囲まれた建物址の東西に位置する建物址の年代はIII～IV期いずれに属するかのみき手はない。

この時期の建物は、水田区画の方位にほぼ合致するが、厳密ではない。又、建物配置に規則性がないこと、小規模建物が多いこと、他に柱穴が集中するが建物として把握できないものがあることなどを考え合わせると、調査地区が集落のどの部分に位置するかが問題になると同時に、中世水田区画のあり方と集落のあり方を、今一度再検討する必要がある。



第46図 遺構変遷図

#### <IV期>

集落中心部では、溝に囲まれた建物址が数棟ある。III期との間にどれだけの時間差があるのかは、現状の資料では判然としない。ただ、出土遺物からは一世代差もないと考えられ、短期間で建て変えを考える必要がある。

#### <V期>

検出されているのは、溝・土坑であり、時期は江戸時代後半から明治であろうと考えられる。IV期以降、再度水田化されたまま、この時期に至るが、V期の遺構も現集落に近い位置でのみ遺構が検出されていることから、基本的な土地利用は水田と考えていい。

#### <VI期>

調査時点まで水田として利用されており、IV期集落廃絶後変化が見られない。

以上6期に区分して概略を記したが、室町時代に集落が見られる他は、水田として常に利用されていた地区であることが判明した。

今後の問題としては、室町集落の廃絶の原因を含めた、集落立地の変化がどのような状況に起因するのかを歴史的状況の変化の中で位置付けることができるかどうかである。

#### (注)

普通寺市五条遺跡でも中津式土器の出土が見られ、所謂「地山」が形成されたのは後期初頭ではないかと考えられる。

又、豊中町延命遺跡八反地地区でも地山と考えていた粘土層に縄文土器片が包含されていることが確認されている。



### III 乾 遺 跡





## 1. 調査の経過

乾遺跡は昭和59年11月29日～昭和59年12月25日にかけて実施した予備調査により遺跡として確定された。中世のピット群と弥生時代の遺構が広がる2,100㎡が調査対象面積となった。

調査に先立ち調査区内の未買収地の確認を行なった。未買収地は調査区の南東で南西に細長く約150㎡の面積を持つものであった。調査区を二分する位置にあったが、すぐ北側を用水が通るために、調査には、さしたる影響はないものと判断できた。未買収地の調査は、その南側の調査の結果で決定することを道路公団との間で確認した。

また、周辺の用水に調査区内の泥水を流してはいけないという地元からの強い要望があげられた。沈殿槽を設置し対応することにした。さらに調査区のすぐ北側に隣接してあるバラキ出水の問題があった。地元の人にとっては非常に由緒ある出水で、その出水の水位に影響を及ぼす深さ以上には掘らないでほしいということであった。道路公団もバラキ出水については注意深く対応しており、バラキ出水の水位の変動のデーターを昭和54年度から継続して記録していた。それによると水位はほぼ一定で標高14.5m付近で安定していた。発掘調査はそれ以上は深く掘らないということを確認した。

道路公団、地元との間で種々の確認をすませ、「昭和60年度発掘調査委託契約書」に基づき横断道工事予定地2,100㎡を対象として9月2日より本調査を開始するに至った。

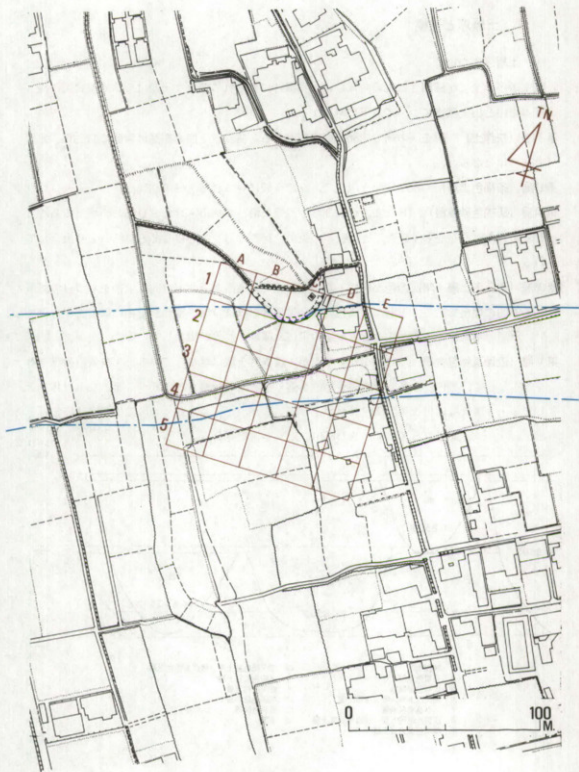
乾遺跡の発掘調査は昭和60年9月2日から11月20日まで実施された。グリッド設定にあたっては、20×20mを一調査区とし、東西にアルファベットを、南北にアラビア数字をつけて調査区の記号とした。調査グリッドの呼称は北西隅の記号でA-1、C-3のようになる。なお、グリッドの主軸は国土座標により、真北から振りだしている。

以下、日誌によって調査の動きを略述する。

### 調査日誌抄

- |      |  |
|------|--|
| (9月) |  |
| 2日   | 調査区の杭打ちをし、グリッドを設定する。作業用の道具等、物品の搬入。                             |
| 3日   | 公団、企業体の立ち会いで調査区内の未買収地の範囲を確認する。                                 |
| 4日   | 本日より作業員による現場作業が始まる。D-2区より重機による表土除去作業を開始する。                     |
| 5日   | C-2区で試掘トレンチの埋めもどしの   |
|      | 土を除去する。幅約10mの黒灰色粘土の上がりがあり、南北方向に主軸を持つ自然河川(SX8501と呼称)と思われる。      |
| 9日   | C-2区のSX8501より弥生時代前期の完形の甕が出土する。                                 |
| 10日  | C-2区のSX8501よりミニチュア土器が出土する。C-2区ではSX8501以外に何か落ち込み状の遺構があるように思われる。 |

- 17日 C-1区のSX8501の東岸より弥生時代前期と思われる土器の底部が2点出土。今後、土器のある程度の出土を見越して平板図を作成して、位置とレベルを確認する。
- 25日 C-1, D-1, D-2 (N)区清掃後写真撮影を行なう。
- 26日 C-1, D-1, D-2 (N)区の平面土層の実測を開始。D-2 (S), B-2区、清掃後写真撮影を行なう。
- 27日 C-2区の落ち込み状の遺構はC-2, B-2区の北側付近だけで完結する円形の溜り (SX8502と呼称) であることが判明。SX8502より漆塗りの木製の碗、永楽銭、土鍋などが出土する。
- 30日 C-2区 SX8501より木製の鉄の未製品が3点出土する。
- (10月)
- 3日 C-2区 SX8501を清掃し、流木の検出状況等の写真撮影を行なう。SX8501が掘り込まれている青灰色粘土よりサヌカイトの石斧1点、縄文時代晩期の土器片数点が出土。
- 5日 台風に乗じて、シート、ベルコン等の整備をする。
- 7日 C-2区 SX8501の流木を除去する。E-3, D-3 (S), C-3 (S・E)区の精査を行なう。極めて新しい時期の土器を含む土坑がたくさんある。
- 8日 D-3 (S), E-3区の土坑を掘り始める。A-4, C-4, B-4区の重機による表土除去作業を開始する。
- 14日 SX8501, 8502, 清掃後写真撮影を行なう。
- 16日 C-2, C-3 (N), B-2区の平面、土層実測を開始する。
- 23日 調査区の南西に近接する企業体のボックス工場の深掘りの現場で灰黒色の粘土の上がりが見られる。調査区を一部かすめ、調査区外で主流を持つ自然河川と思われる。検討する必要がある。
- 24日 D-3 (S), E-3区清掃後写真撮影を行なう。
- 25日 D-3 (S), E-3区の平面、土層実測を開始する。
- 31日 C-3 (S・W), B-4区の掘り下げを続行するが、西岸の落ちちは確認できない。
- (11月)
- 1日 C-3 (S・W), B-4区、清掃後C-2区付近も含めて写真撮影を行なう。A-4区、北・西壁に沿ってボックス工事で露出した流れの方向と時期を確認する目的でトレンチ調査を行なう。南西から北東方向で流れ (SX8503と呼称) がある。南岸に沿って杭列を検出したが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。時期を確認するため調査区外にトレンチを入れる交渉をしたい。
- 5日 C-3 (S・W), B-4区の土層・平面実測を開始する。調査区外の調査の件は公団より許可が得る。
- 11日 SX8503は拡張区で杭列の広がりが範囲、時期 (近世後半) が確認された。
- 12日 拡張区、清掃後、写真撮影を行なう。新しい現場へ道具等を選び出し、作業員の作業は本日で終了する。
- 13日 拡張区等の土層・平面実測を開始する。
- 20日 実測、杭の取り上げ等が終了し、本日で乾道跡における全ての作業を完了する。



第1図 乾遺跡グリッド設定図

## 2. 土層序と遺構

### (1) 土層序について

基本層序の全てが確認される場所はない。当遺跡に見られる顕著な土層について模式図に従って基本層序と出土遺物について以下に略述する。

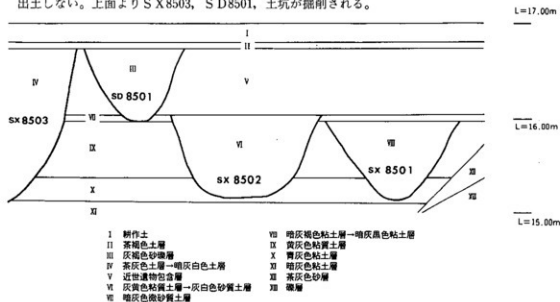
第I層（耕作土） 調査区の南で約60cmの段差がある。耕作土上面の標高は南側で17.3m，北側で16.7mとなる。

第II層（茶褐色土層） 水田に伴う床土で，ほぼ全域に見られる。層厚約10cm。

第III層（灰褐色砂礫層） B-2，C-3区の西壁に沿って検出されたS D8501の埋土である。掘り拳大の河原石を多く含む。近世後半の染付片がこの層を中心にしてS D8501より出土している。

第IV層（茶灰色土層→暗灰白色土層） 調査区西辺で，南西から北東方向に主軸をもつ自然河川S X8503の埋土である。上層の茶灰色土層は拡張区のほぼ全域を覆うが遺物はほとんど含まない。下層の暗灰白色土層からは近世後半の染付，摺鉢，瓦等が出土している。

第V層（近世遺物包含層） D列よりやや西から調査区全域に堆積している。灰黄茶色砂質土層を基本として，黒色粒を多く含む層や粘性が強くなる層に分層され，6～7層となる。B-2，C-2・3区では近世後半の染付等が出土しているが，A-4，B-4区では遺物はほとんど出土しない。上面よりS X8503，S D8501，土坑が掘削される。



第2図 基本層序模式図

第VI層（灰黄色粘質土層→灰白色砂質土層） S X 8502の埋土で、上層より3層に大別される。

第1層は灰黄色粘質土層で近世後半の染付、土鍋などの中世遺物が出土する。第2層は灰黒色粘土層となり、遺物の出土状況は、第1層と同じである。第3層は灰白色砂層及び砂質土層で、須恵器、瓦器、弥生土器などの遺物が出土する。

第VII層（暗灰色微砂質土層） C-2区の北半分のみ堆積し、上面よりS X 8502が掘削されている。層厚は最大で30cmとなる。

第VIII層（暗灰褐色粘土層→暗灰黒色粘土層） S X 8501に伴う土層である。大別して3層となる。

第1層は暗灰褐色粘土層で、C-2・3区ではS X 8501の流路に沿って、A・B・C-4区では、ほぼ全域に堆積する。A・B-4区では、ほとんど遺物は出土しなかったが、C-3（S・W）、C-4区では弥生時代後期の土器片が、かなり出土した。第2層は、黒色粘土層である。A・B・C-4区では西から東にかけてだんだん層は厚くなり、C-3（S・W）で最大層厚40cmとなる。C-2区で北に向かって徐々に消滅する。この層からは、弥生時代前期の完形の壺形土器、土器の底部など数点が出土した。第3層は、暗灰黒色粘土層で、C-4区からC-2区にかけて南から北へだんだん厚く堆積する。最大層厚は75cmである。木製の獣の未製品、流木などが多く検出された。

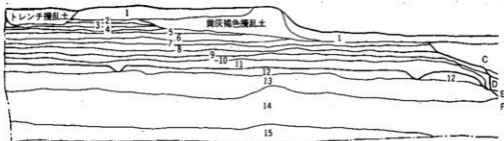
第IX層（黄灰色粘質土層） 当遺跡のベースになる層で、上面よりS X 8501が掘削されている。無遺物層である。

第X層（青灰色粘砂質土） 調査区全域に堆積し、S X 8501、02、03の掘り方の中間より下で確認される。S X 8501の東岸となる部分からは、縄文時代晩期の土器片が数点出土した。

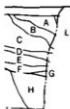
第XI層（暗灰色粘土層） 調査区ほぼ全域で認められ、IX層、X層の下層に水平に堆積する。遺物は含まない。

第XII層（茶灰色砂層） D-1・2区の全域を覆う。調査区の東辺で西から東にかけて上がっていく礫層に伴い堆積した土層である。遺物は含まない。

第XIII層（礫層） 当遺跡の東端から、隣接する中村遺跡の西端にかけて礫層の凸出部が認められる。東から西に向けて下っていくが、その礫層の落ちの上に砂層、粘土層等が堆積し、遺構面を形成している。



A-4 西壁土層図

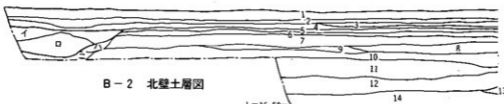


L=16.50m

1. 耕作土
2. 黄灰褐色土層(床土)
3. 暗灰褐色土層
4. 乳灰(黄)褐色土層(黄色が強い)
5. 乳灰茶褐色土層(炭化物、ブロック状に混在)
6. 乳灰(白)色土層
7. 灰褐色粘土層(炭化物混入)
8. (黄)灰褐色粘土層

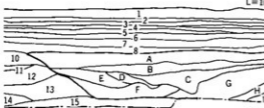
- (I) 9. 暗灰褐色粘土層
- (II) 10. 黄褐色粘土層
- (III) 11. 黄灰(黄)色粘土層
- (IV) 12. 黄褐色粘土層
- (V) 13. 黄褐色粘土層
14. 黄緑灰色砂質土層
15. 暗灰色粘土層

- (VI) 16. 黄褐色土層
- (VII) 17. 暗灰褐色土層
- (VIII) 18. 暗灰褐色土層
- (IX) 19. 赤黄褐色土層
- (X) 20. 暗灰白色土層(黄褐色混入)
- (XI) 21. 暗灰色土層
- (XII) 22. 暗灰色砂質土層



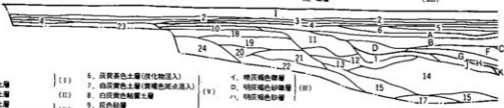
B-2 北壁土層図

L=16.50m



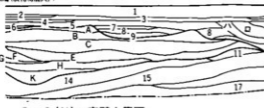
1. 耕作土
2. 暗灰褐色土層
3. 茶褐色土層
4. 黄褐色土層(床土)
5. 灰黄色土層
6. 黄褐色土層(炭化物混入)
7. 黄灰色土層
8. 明黄褐色土層
9. 黄褐色土層
10. 暗灰色粘土層
11. 灰黄褐色粘土層
12. 明灰黄色粘土層
13. 暗灰黄色粘土層
14. 暗灰黄色粘土層(13より黄が強い)
15. 礫層

- (I) 16. 灰褐色土層(炭化物混入)
- (II) 17. 暗灰褐色砂質土層
- (III) 18. 暗灰褐色土層
- (IV) 19. 灰黄色土層
- (V) 20. 明灰黄色土層
- (VI) 21. 暗黄褐色土層
- (VII) 22. 茶褐色土層
- (VIII) 23. 灰黄色土層
- (IX) 24. 暗黄褐色土層
- (X) 25. 暗灰色砂質土層
- (XI) 26. 暗灰色砂質土層
- (XII) 27. 白灰色砂質土層



C-3 (N) 南壁土層図

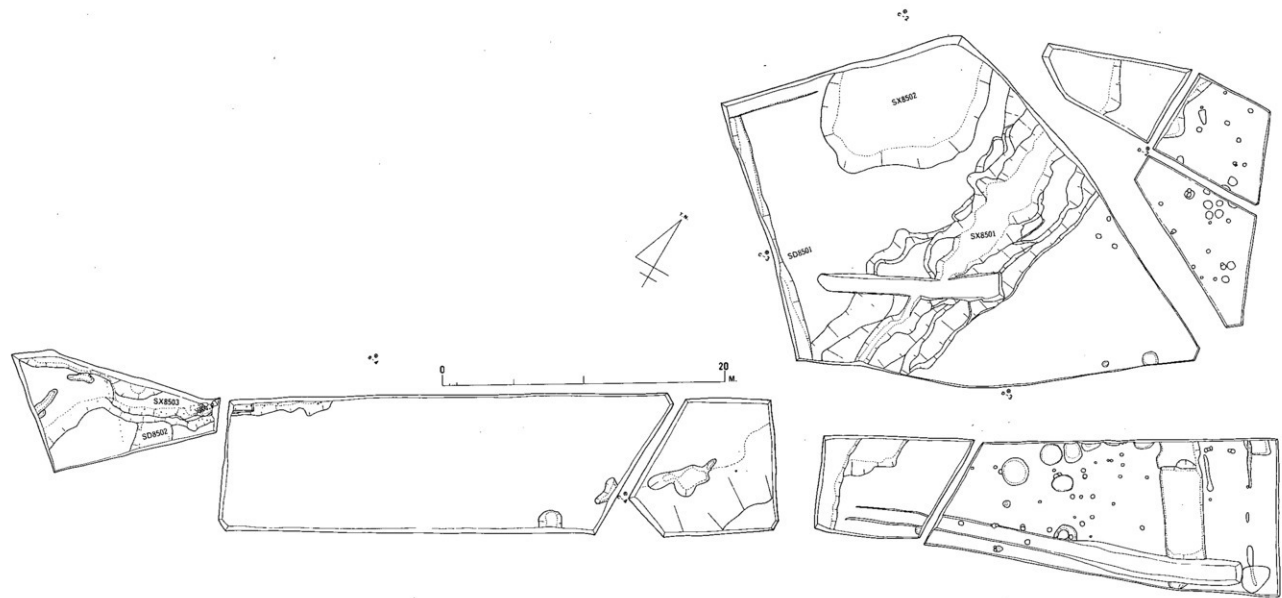
L=16.50m



- (I) 1. 耕作土
- (II) 2. 乳灰色土層
- (III) 3. 茶褐色土層
- (IV) 4. 灰褐色土層
- (V) 5. 灰黄色土層(炭化物混入)
- (VI) 6. 灰黄褐色土層(炭化物混入)
- (VII) 7. 黄褐色土層(黄褐色斑点混入)
- (VIII) 8. 白灰黄色粘質土層
- (IX) 9. 灰黄色砂層
- (X) 10. 暗灰褐色砂層
- (XI) 11. 暗灰褐色砂層
- (XII) 12. 暗灰褐色砂層
- (XIII) 13. 暗灰褐色砂層
- (XIV) 14. 暗灰褐色砂層
- (XV) 15. 暗灰褐色砂層
- (XVI) 16. 暗灰褐色砂層
- (XVII) 17. 暗灰褐色砂層
- (XVIII) 18. 暗灰褐色砂層
- (XIX) 19. 暗灰褐色砂層
- (XX) 20. 暗灰褐色砂層
- (XXI) 21. 暗灰褐色砂層
- (XXII) 22. 暗灰褐色砂層
- (XXIII) 23. 暗灰褐色砂層
- (XXIV) 24. 暗灰褐色砂層

- A. 明灰色粘土層
- B. 明灰黄色粘土層
- C. 暗灰黄色粘土層
- D. 灰黄色粘土層
- E. 黄褐色粘土層
- F. 黄灰色粘土層
- G. F・砂の中混層
- H. 黄色粘土層
- I. 暗黄褐色粘土層
- J. 暗黄褐色粘土層
- K. 暗灰色粘土層
12. 青灰黄色粘土層
13. 青灰色粘土層
14. 明灰色粘土層
15. 青灰色粘土層(砂混じり)
16. 青灰色砂層
- (VII) 17. 暗灰黄色粘土層
18. 白黄灰色砂層
19. 黄褐色砂層
- (VIII) 20. 暗黄褐色(灰)砂層
21. 暗黄褐色砂層
- (IX) 22. 暗黄褐色(灰)砂層
23. 暗灰黄色砂層
- (XIII) 24. 暗灰黄色砂層

第3図 土層実測図



第4図 遺構配置図



## (2) 遺構について

本遺跡で検出した遺構は、土坑、溝状遺構、ピット、それに自然河川、湧水池状遺構などであるが、これらは現在の地表下約20～40cmで認められる。土坑、溝状遺構、ピットは近世包含層からの掘り込みのものもあるが、遺構の検出は黄灰色粘土層の上面で行なった。

各遺構の時期は、C-2・3区を中心に検出した自然河川の可能性もある湧水池状遺構が弥生時代前期～後期にかけてのものである以外は、近世から近代にかけてのものである。

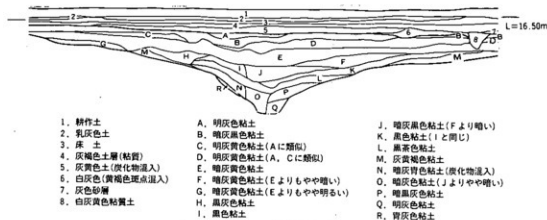
以下これらの検出遺構についてのべる。

### S X 8501

S X 8501は、調査区のほぼ中央（C列）で検出した湧水池状の遺構である。総延長約40mにわたって検出した。最大幅11m、深さは最深部で1.3mを計る。C-2・3区において断面形は、ゆるやかなV字形を呈している。

C-2・3区では、東岸・西岸ともに掘り方があり断面形はV字形で検出されたが、C-4区では西岸の掘り方はなかった。当遺構のベースとしている黄灰色粘質土層が東から西にかけてゆるやかな上がりを示すだけである。断面土層には、黄灰色粘質土層の上層に黒色粘土層の帯状の上がりが見られる。従って、A・B・C-4区から調査区外の南に広がる水田として利用されている平坦地は、当時湿地帯であったことが考えられる。

C-2・3区で検出したV字形の湧水池状遺構（S X 8501）は、南にあったと考えられる湿地帯から水が流れこんでいた場所と推察される。S X 8501が北側で完結する湧水池状遺構なのか、さらに北側に向かって流れを持つ自然河川なのかについてはS X 8501が調査区外におよんでいるため断言はできない。しかし、土層、現地形等を考え合わせると調査区の北側で完結する湧水池状遺構の可能性が高い。まず、土層に関して言えば、S X 8501の下層に暗灰色粘土、暗黒灰色粘土などの粘土層が認められる。これらの粘土層は、流れがある場所よりも流れのないよどみの状態の場所に堆積する粘土層である。また、現在の地形で言えば、S X 8501の北側延長上に調査区に

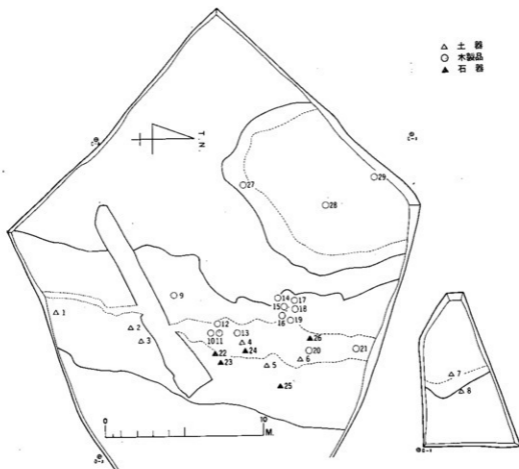


第5図 SX8501 土層断面図

隣接して出水がある。周辺地域の地下水を集め年中水を貯えている出水である。SX8501を発掘中も湧水に悩まされた。地下水脈との関係で言えばSX8501も現在の出水と同じ機能を有していたのではないかと推察される。調査区内の状況からは、推論の域を出るものではないが、SX8501を自然河川と考えるよりも北側で完結する湧水池状遺構とする方が妥当であろう。

SX8501より弥生時代前期の土器、木製加工品、石器等が出土した。第6図がSX8501、SX8502の主な遺物の出土地点である。SX8501が円形に拡張している部分に遺物が集中している。南から流れこんだ水が溜りになってよどんでいた部分と推察される。

第5図、1～7層からは弥生時代後期の土器片が出土している。特に調査区南のC-3区(S・W)、C-4区で多く出土した。8～11層は、南から北へ向けて徐々に薄くなり消滅する黒色粘土層である。弥生時代前期の完形の壺、ミニチュア土器などがこの層から出土している。完形の壺は2/3がこの層に埋没し、1/3は上層に埋まっていた。12・15～17層からは流木・木製の加工品が多く出土した。木製の加工品はほとんど用途は判然としませんが、鉄の未製品と解るものが4点出



第6図 SX8501、8502 出土遺物分布図

土している。そのうち3点は1ヶ所に固まっていた。刃先を下にして暗灰色粘土層につきさしたように出土した。

また、18層の青灰色粘土層より縄文時代晩期の土器片が8点出土している。この層はSX8501の掘り込み面の黄灰色粘土層の下層にあり、SX8501の掘り方の中間より下で確認されている。

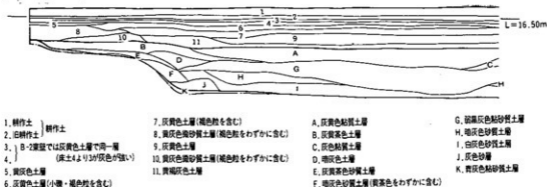
#### SX8502

B-2・C-2区の北壁に沿って検出した湧水池状の遺構である。現在の用水路が直近の北側を流れているために、遺構の全体を明らかにすることはできなかったが、調査区内で検出した部分からおおよその見当は可能である。直径約12m、深さ80cm、底がほぼ平坦で形状が円形を呈する湧水池状の遺構である。

掘り込み面の南西側は当遺跡のベースである黄灰色粘質土層であるが、東側はベース面の上に堆積した暗灰黄色土である。掘り方の下方では青灰色粘砂質土層となり、底は灰色砂礫層となる。

SX8501と同様にSX8502を発掘中にも湧水が多かった。遺構の規模、形状、地下水脈、現在の出水との位置関係などからSX8502は、出水の機能を持つ遺構であったと考えられる。

SX8502の埋土はほぼ水平に堆積している。最下層の白灰色砂質土層(第7図)から須恵器、瓦器などが出土し、近世の染付は含まれない。それより上層の弱黒灰色粘砂質土層(第7図7)、暗灰色砂質土層(同9)などからは、中世遺物を中心として、近世後半の染付も出土する。この層より鉄鍔、木製の漆の椀などが出土している。SX8502の時期については、7・9層より出土する染付の時期をとるのが妥当であろう。近世後半の時期が与えられる。



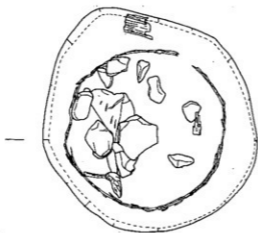
第7図 SX8502 土層断面図

#### SD8501

B-2, C-3(N)区で西壁に沿って検出した溝状遺構である。主軸方位はほぼN30°Wとなる。東岸だけを検出したが西岸は現在の用水路が隣接して流れているため調査できなかった。規模は、幅約2m、深さ50cmで総延長約20mにわたって検出した。掘り込み面は近世包含層の上面からである。埋土は暗灰褐色の砂礫層(握り拳大の石を含む)が中心で近世の摺鉢、染付などが

出土した。

S K 8501



L=16.20m



1. 暗灰茶黄色擾乱土
2. 茶黄色混黒灰色粘砂質土
3. 茶黄灰色擾乱土

第8図 SK8501 平面図・断面土層図

D-3区を中心にして土坑を多数検出した。

S K 8503, 8504, 8509から瓦, 染付が多量に出土したが, いずれも明治時代以後のものであるため記述は省略したい。出土遺物より江戸時代と考えられるS K 8501についてのみ記述する。

S K 8501はC-2区で検出した。S X 8501の埋土中に掘り込まれたもので, S X 8501の上面を検出する作業でS K 8501は一部削平した。残存した部分は, 直径約120cmの円形で深さが約25cmを計る。埋土中に10cm~25cm程度の河原石や安山岩が多く認められた。また第2層と第3層の境で竹製の籠が検出された。竹製の籠は幅3~7cm, 直径約80cmでほぼ正円形を呈する。その内側の1・2層より木片が出土することから木製の桶が埋めこまれていたものと推察される。1・2・3層から近世の陶磁器が数点出土した。それ以外に骨などは検出されなかった。

#### ピット群

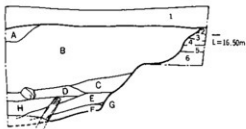
D-1・2・3区でピット群を検出した。検出面はD-1・2区では茶灰色の砂層, D-3区では黄灰色粘質土層である。D-1・2区のピットの埋土に黄灰色の粘土が認められまた深さが浅いことより, 砂層の上に黄灰色粘質土層がありピットはその時に掘り込まれたものと考えられる。D-3区とD-1・2区は現地形で, 約60cmの比高差があることより, 後世に黄灰色粘質土層が削平されたと思われる。ピットの並びも認められず, また遺物の出土も皆無だったためピット群の性格, 時期は不明とせざるをえない。

S X 8503

S X 8503は調査区の西辺A-4区を中心に検出した。南西から北東方向に主軸を持つ自然河川で, 総延長約20mにわたって検出した。現在の用水などとの関係で南岸だけの調査をしたが, A-5区よりS X 8503にほぼ直交して合流するS D 8502もあわせて検出した。

S X 8503は南岸沿いに東側から杭列が並ぶ。杭列はS D 8502が合流する部分で南岸に沿う杭列に直交する方向にも2列認められる。その西側の杭列の延長上でS D 8502の西岸にも杭が確認された。それより西側では、杭は検出されなかった。杭は全部で46本検出したが、長さ、太さなどは一定でない。長さは30~70cm、太さは3~10 cmの間で収まる。両端を鋭角に削っている他は、自然木の外形をとどめたままではいねいな整形はされていない。S D 8502の西岸にも杭列が認められるところから、S D 8502とS X 8503の合流地点にともなう杭列であるという以外には、その機能については断言できない。

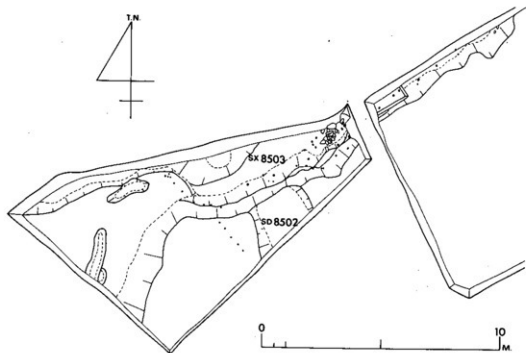
S X 8503の断面土層は第9図である。C~H層はの流れにともなう堆積であると思われる。杭列は水の流れがある時期に川底に打ちこまれて機能していたものと言える。遺物の出土は極めて少なく近世後半の染付、瓦、挿鉢などが数点出土したのにとどまる。



- |                   |                  |             |
|-------------------|------------------|-------------|
| 1. 耕作土            | A. 灰青色堆積土層       | E. 灰青色粘土層   |
| 2. 灰褐色粘土層 (灰化物混入) | B. 灰茶褐色土層        | F. 青緑灰色砂質土層 |
| 3. 乳灰褐色粘土層        | C. 灰褐色土層 (赤茶色混入) | G. 暗灰黒色粘土層  |
| 4. 暗灰褐色粘土層        | D. 赤茶褐色土層        | H. 暗灰青色土層   |
| 5. 黄褐色粘土層         |                  |             |
| 6. 黒灰 (黄) 色粘土層    |                  |             |

(A~HがSX8503の堆土)

第9図 SX8503 断面土層図



第10図 SX8503, SD8502 平面図

### 3. 遺物について

乾遺跡から出土した遺物はコンテナ(28/入)で67杯になる。そのほとんどが、D-3区を中心にした土坑群から出土したもので、明治以降から現代のものが多い。この稿では、それらの遺物は除外して近世までの遺物について遺構ごとに記述する。

#### (1) S X 8501出土遺物

S X 8501からの出土遺物は、弥生時代前期から後期にかけての壺・甕・高杯の土器類、木製墩の未製品など加工された木製品、石器である。これ以外にS X 8501を発掘中にS X 8501の掘り方となる青灰色粘土層より出土した縄文時代晩期の土器も含めて記述したい。

##### 弥生土器

第11図1～9が黒色粘土層を含めてそれより下層から出土した土器で、10～18がそれより上層から出土したものである。

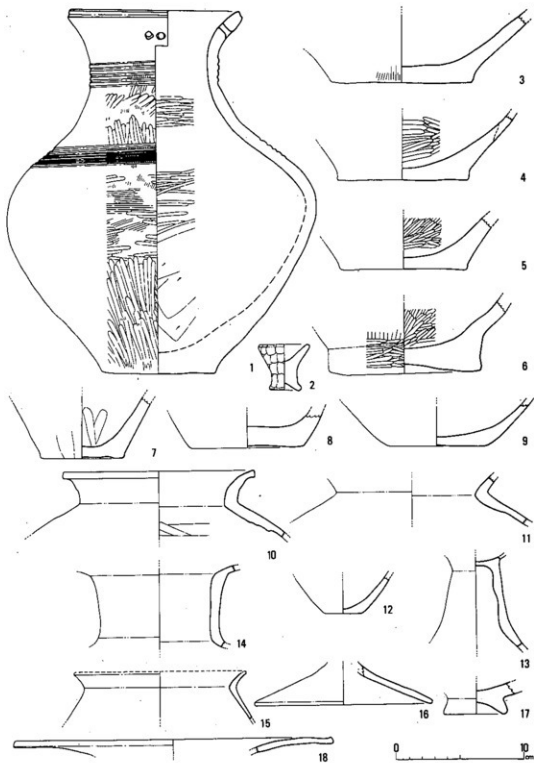
1は口径13.2cm、器高28.8cmを計る完形の壺である。最大復径は体部中央である。それより下に約20×25cm大の黒斑が認められる。口頸部はゆるやかに立ちあがり外反して2孔を有する。口縁端部には1条のヘラによる沈線が施されている。頸部に4条の削り出し凸帯、体部上半に6条のヘラによる平行沈線が施されている。体部外面は8条/cmのハケ目の上にヘラミガキをし体部内面の上半部にもヘラミガキがなされている。下半部には板ナドと思われる痕が遺存する。

2はミニチュア土器で口径4cm、器高3.7cmを計りほぼ完形である。1～3mm程度の微砂粒を多く含む胎土は粗い。器壁外面は全面に指頭圧痕があり、器壁内面はナド調整がなされている。全体的に仕上げは粗雑である。

3～9は壺の底部である。8・9は磨減が著しく調整はほとんどよみとれない。3の外面下半部にわずかに刷毛目が認められる。4～6は器壁内外面ともにヘラミガキがなされているが、十分にはよみとれない。7は外面にヘラナド、内面に指ナドが認められる。胎土は、4・9が微砂粒を含む割合が少なく比較的精緻であるが、それ以外は1～4mm程度の微砂粒を多く含む粗い。色調はいずれも暗茶褐色系統で4・7・9がわずかに赤みがかった。6は底部の立ち上がりが顕著に認められ、底部と体部の区別が明確である。3・4・5・7にもその特徴が認められるが、8・9にはない。3～6・8は弥生時代前期の時期に納まると考えられるが、7・9は底部の厚さにより弥生時代中期の可能性もある。

10は壺形土器で頸部はやや外反気味に立ち上がり中央部で屈曲しさらに外反する。頸部から口縁にかけてだんだん細くなるが、口縁端部には平坦面を造り出していねいに仕上げている。体部上半部の内面にはヘラ削りが認められ器厚は薄くなっている。

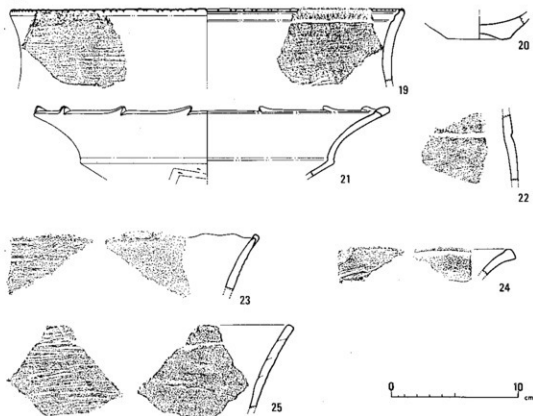
11～18はわずかな破片であるが、実測可能な土器として図化した。磨減が激しく調整は全くよみとれない。おおむね弥生時代後期を中心とした時期の土器であると思われる。



第11图 SX8501 出土土器实测图(1)

## 縄文土器

第12図19は深鉢である。口縁端部に刻み目が施され、内面に2条の凹線を持つ。内面には横方向の細かい条痕があり、外面には二枚貝の腹縁による条痕が認められる。20は深鉢の底部であると思われる。他の土器と比べて、1～2mmの微砂粒を多く含み、胎土は粗い。磨滅のため調整は不明である。21は貼りつけによる波状口縁を持つ浅鉢である。内面には斜め方向の、外面には横方向のヘラミガキがわずかに認められる。24も21と同じように貼りつけにより口縁端部を肥厚させて丸味を持たせている。調整は内外面ともにヘラミガキがなされている。22は外面に1条の沈線文を持つ深鉢である。23・25は深鉢の口縁で、ともに外面はナデによる調整が施されている。23の口縁には山形文を造り出している。19～25は全て縄文時代晩期の時期が与えられるものである。



## 木製品

第12図 SX8501 出土土器実測図(2)

SX8501の暗灰黒色粘土層を中心にして木製の加工品が30点近く出土した。うち3点は、鉄の未製品であり、1点は鉄の未製品の可能性が高いものである。他の木製品の用途は不明であるが、いずれも加工されている。

第13図W-1・2は板状に加工された木製品である。W-1は長さ112.4cm, 最大幅13.7cm, W-2は長さ107.8cm, 最大幅5.7cmを計る。両方とも両端が厚く、中央部を薄く作ってある。面を整



形した時の工具痕などは認められない。W-3～5は鋸の未製品である。3点とも基本的な作りは同じで、刃部・突起部を造りだし、中央を山形に盛り上げ両端を薄く加工している。突起部の柄孔は作られていない。樹種は樫であると思われる。

W-3は、縦31.3cm、横23.7cm、断面形の最大幅は4.6cmを計る。右上隅が欠損しているが原形を保っている。刃部から頭部に向けてゆるやかに隆起するが突起部は明瞭ではない。工具痕は、ある程度観察可能で幅約2cmのノミ状の工具で面が整形されていることがわかる。上面左半分は右上から左下方向へ右半分は左上から右下方向へ向かって削られている。削った工具痕に沿って数本の稜線が認められ、面をいくつかに分けて整形した様子がうかがえる。

W-4は、縦33cm、横25cm、断面形の最大幅は4.1cmを計る。突起部を画する線がW-3より不明瞭で整形は進んでいない。比較的下半分で工具痕が多く認められる。整形の方向はW-3と同じである。

W-5は、3枚の中では最も整形が進んでいる。縦27.9cm、横22.2cm、断面形の最大幅は3.9cmを計る。突起部周辺に多く工具痕が認められ、突起部の盛り上がりも明瞭である。突起部から刃先に至る面には、あまり工具痕は認められないが、他の2点と比較して面を薄く平らに整形している。

W-6は鋸の未製品の可能性が高いものである。W-3～5の前段階の未製品であろう。縦32.4cm、横25cm、断面形の最大幅は7.4cmを計る。面全体に激しく凹凸が残っているが、鋸のアウトラインを呈し、頭部が厚く刃部が薄くなっている。突起部になるとと思われる盛り上がりも認められる。整形は表・裏両面ともに頭部から刃部方向への削痕がわずかに遺存する。

W-3～6を木製広鋸の制作工程の順番に並べると、W-6→W-4→W-3→W-5の順番になる。1個体分の原材を上部を厚く下部が薄く中央が盛り上がるように面を上下方向に削っていく。突起部も大まかに削り出している。(W-6の段階)側面をていねいに整形し、刃部を斜め方向に薄く削り、刃先を造り出す。突起部の面もある程度平坦になるように整形する。(W-4・3の段階)さらに刃部・刃先を薄くていねいに削り出し突起部の盛り上がり刃部の区別が明瞭になるように、突起部周辺を細く整形していく。(W-5の段階)この後、柄つぼが穿孔されて、着柄となる。しかし、最も整形の進んだW-5にしても、完成品の木製広鋸と比較した場合、突起部・刃部中央部ともかなり厚い。おそらくW-5の段階からさらに細い整形がくり返され柄つぼの穿孔がなされるものと思われる。

W-7～16は、用途不明の木製の加工品である。外形より棒状、板状、角材などにわけられる。いずれも、全面にわたり整形されているために、自然木の外形は全く残っていない。

## 石器

第15図は全てサヌカイト製のものである。1～9が石鋸、10・11・14がスクレイパー、12が石斧、13は彫器の可能性のある石器である。

1は二等辺三角形状の、基部が凹基状をなす石鏃である。一方の逆刺部の先端を欠損しているために完形ではないが、袂部が深いものである。

2は細長い二等辺三角形状のものである。1と同様に基部は凹基式となるが逆刺部は1より短い。一面中央部には広い剝離面をとどめる。風化が進み、やや白色がかかった色調を呈している。

3は細長い五角形の有肩鏃である。身部を平坦に作り、側辺はいずれもていねいな調整がなされている。中央部には剝離面を残す。基部はやや凹基状をなす。

4は、先端部、逆刺部の一方が少し欠損しているものの完形に近い凹基式のものである。風化のため白色がかっている。

5は二等辺三角形状の基部がやや外彎するものである。

6は基部がやや凹基状を呈し、先端部が欠損している。中央部に剝離面を残すが側辺はていねいに調整されている。

7・8はともに逆刺部の一方が欠損している。基部は凹基式で袂部を深く作っている。8は風化が進み白色がかっている。

9は1側辺のみが両面からていねいに調整されている。石鏃の未製品であろう。

10は側辺の一面に自然面を残すスクレイパーである。刃部はやや内彎し片面にこまかい調整が施されているが片面は粗く調整されている。

11もスクレイパーである。側辺の一面に自然面を残す。刃部は両面とも比較的粗い調整がなされ、やや内彎している。

12は石斧である。基部に自然面が残る、基部から先端部にかけて彎曲しながら細くなっていく。刃部の一側辺は両面調整がなされ、先端部の刃は鋭く作られている。使用痕は認められない。

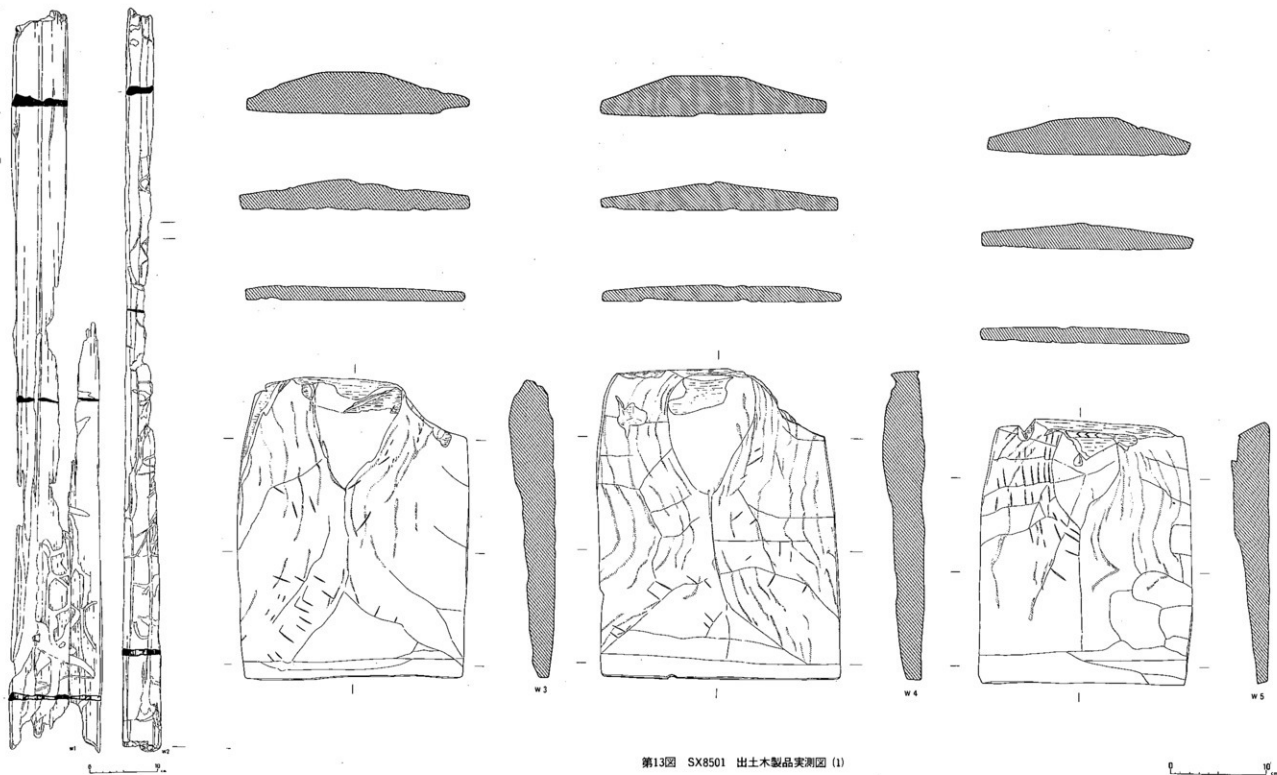
13は彫器の可能性のある石器である。彫器だとすると、図の上部が刃部となる。一方の側縁は1回の加撃によって彫刀面を作り出し、他方の側縁には2条の櫛状剝離が認められる。刃部の角度は約90°となる。器体の両長側辺の両面ともにこまかい調整が施され比較的鋭い刃部を作り出している。

14は一方の側辺が直線一方の側辺が外彎する刃部をもつスクレイパーである。彎曲する側辺は両面から調整が施されている。

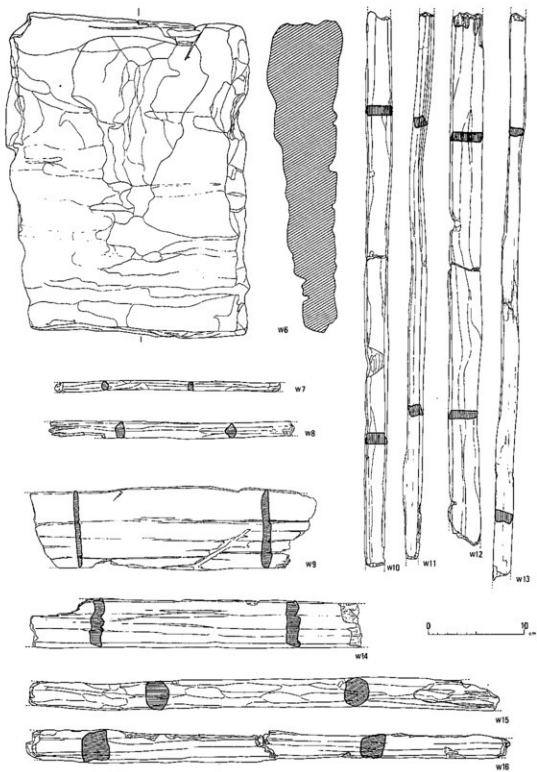
第16図15は赤みがかった緑泥片岩である。板状の自然石の一面を砥石に転用したものである。

16は側辺の一面に自然面を残すサヌカイト製のスクレイパーである。上下の両側辺に直線に近い刃部を造り出している。風化がすすみや白色がかっている。

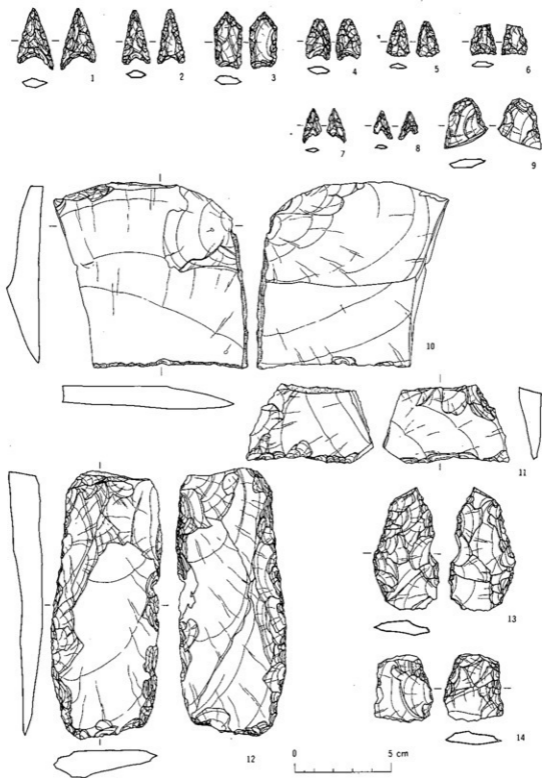
17・18はサヌカイトを素材とした石包丁の一部である。17は形態的に半月形を呈するもので、18は長方形状のものであろう。18は約半分が欠損しているが、短側辺には袂をもつ。刃部の調整は両面から施され比較的細かい。



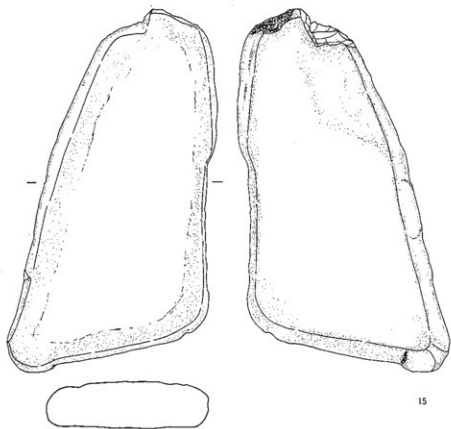
第13図 SX8501 出土木製品実測図(1)



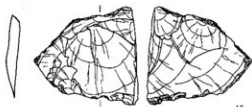
第14图 SX8501 出土木製品実測图(2)



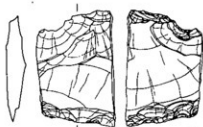
第15圖 SX8501 出土石器实测圖 (1)



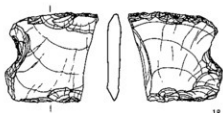
15



16



17



18



第16图 SX8501 出土石器实测图 (2)

## (2) S X 8502出土遺物

S X 8502より出土した遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、土師質小皿、土鍋、土釜、鐙鉢、木製加工品、鉄鏝、染付と多種におよぶ。染付はわずかな破片だったために図化できなかった。

### 土器

#### 弥生土器

第17図1～6は、弥生時代後期の土器である。S X 8501出土の土器と同様で磨滅が激しく、調整がよみとれないものが多い。

1は「ハ」の字状の肩部から外反しながら立ち上がる口縁をもつ壺である。口縁端部を上方向につまみあげ端面を幅広く作り出している。調整は磨滅のため、よみとりにくいが、口縁部は内外面ともに、ナデ調整がなされていると思われる。

2は壺の口縁部である。1と同様に「ハ」の字状の肩部から外反しながら立ち上がる口縁を有し、口縁端部は丸くおさめている。器壁内面に横方向の篋削りが認められる以外は、調整は読みとれない。1・2ともに胎土は0.3～4mm程度の微砂粒を多く含み粗い。1は暗茶灰色、2はそれよりやや赤みを帯びた色調を呈している。

3は、口縁端部を幅広く作り出し、その面に鋸歯文、波状文を施した壺の口縁部である。口縁端部の上方にも平坦面を造り出し竹管文を施すという手のこんだ施文を行なっている。器壁内外面ともにナデ調整がなされている。

4は壺の口縁部である。肩部から口縁は「く」の字状に折れ曲がり、やや外彎しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。器壁外面は12条/cmの刷毛による調整が施されている。

5は頸部から外側に向かって口縁が大きく開く壺である。口縁端部は、やや下方に拡張し平坦面を造り出し、強いヨコナデ調整を施している。

6は小型の鉢である。体部は外彎しながら立ち上がり、端部を細くおさめている。器壁外面は磨滅のため調整がよみとれないが、内面はナデ調整が施されている。

3～6の胎土は比較的精緻である。5が赤褐色の色調を呈し、3・4・6は淡褐色である。

#### 須恵器

7は杯の底部の破片である。体部と底部の区別は明瞭で、底部のやや内側にはいったところから逆台形状の低いしっかりとした高台を持つ。内面はいいいなヨコナデが施されているが底部外面は粗雑な仕上げとなっている。

8は長頸壺の一部と思われる。破損しているため、脚になるのか高台になるのかは不明である。体部は外反しながら立ち上がり「く」の字状に折れ曲がる。口縁部は破損している。体部は内外面ともにヨコナデが施されているが底部は雑な仕上げである。底部外面、体部外面には自然釉が附着し白色がかっている部分が多い。全体の色調は黒灰色である。

9・10は甕である。ともに体部外面は平行のたたきが、体部内面は同心円たたきが施されている。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整が施されている。9は推定口径12.0cmを計る。口縁は外反しながら立ち上がり口縁端部の上方をややつまみあげている。10の口縁はほぼまっすぐに立ち上がり先端でゆるやかに外反し、口縁端部は上方にやや拡張されている。色調は9が淡灰色で、10は白灰色を呈す。

#### 土師器

11は、口縁部が欠損している椀である。底部側面にやや内反する面を作り出し、強いヨコナデを施している。体部は外反し、内外面ともにヨコナデ調整を施しているが仕上げは雑である。淡黄茶色を呈し、胎土・焼成ともに普通で、底部はヘラ切りである。

12・13は、わずかな破片である。12の体部は外反し先端でやや外彎する。13は、ゆるく内彎し口縁端部を少し肥厚させている。13は2～3mm程度の微砂粒を多く含み胎土は粗い。12は茶灰色、13は白黄色を呈する。

14・15はともにヘラ切りの杯の底部である。14は器壁内外面ともにナデ調整が施され、ていねいな仕上げがなされているが、15は粗雑な仕上げである。体部は14が外反しながら、15がやや内彎しながら立ち上がる。14は赤褐色、15は暗茶灰色の色調を呈する。15は1mm程度の微砂粒をわずかに含む。

16は盤又は杯の底部である。器壁内外面ともにていねいなナデ調整が施されている。高台は貼り付けのもので、外側にむかってふんばる形をしている。胎土は細かい砂が混じる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。

17は椀であるが、体部の1/3ほどが欠損している。推定口径14.8cm、器高5.8cmを計る。やや外反し先が細くなる高台を持つ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部は、わずかに外反させている。器壁内外面ともにていねいなナデ調整が施されている。焼成は良好で、精緻な胎土で作られ、白黄色の色調を呈している。

18は、断面が三角形状を呈し、指頭圧痕が残る雑な高台を持つ椀である。底部と体部の境は明瞭でなく、体部は外彎しながら立ち上がる。器壁内面はていねいなナデ調整が施されている。体部外面下半部には植物せいの圧痕が残る。胎土は精緻で、焼成は良好、色調は白灰色を呈する。

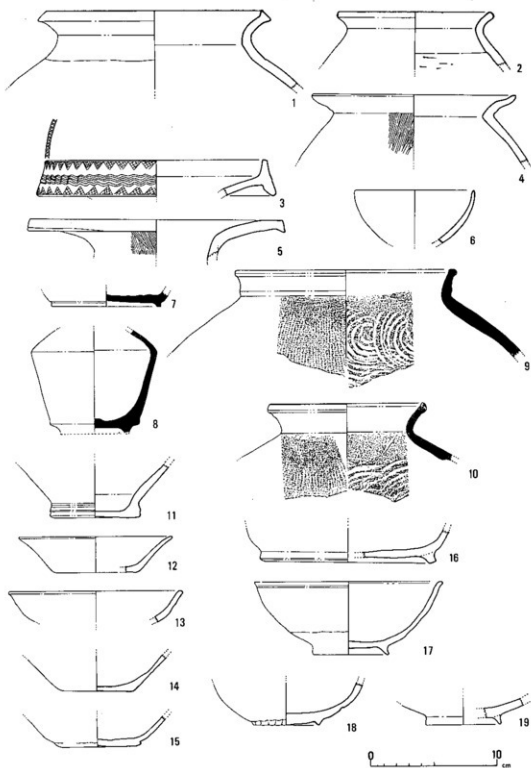
19も椀の底部である。先ぼりの外反する高台をもつ。黄白色を呈し、胎土は精緻で焼成は良好である。内面はていねいなナデ調整が施されている。

#### 土師質土器（小皿）

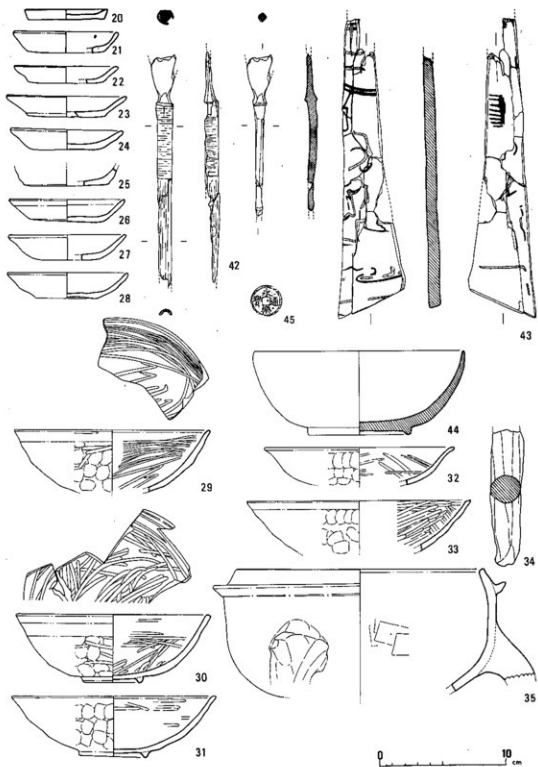
第18図20～28が小皿である。20が口縁部を少しだけつまみ上げて浅いつくりになっている。他は口縁部が外反気味に立ち上がり比較的深いものである。

20は推定口径6.6cm、器高0.8cmを計る。約半分が欠損している。口縁部は浅くつまみ上げ先を細く作ってある。底部はヘラ切りで内外面にはナデ調整が施されている。





第17图 SX8502 出土土器实测图(1)



第18图 SX8502 出土遗物实测图

24は推定口径8.8cm、器高1.6cmを計る。体部は、部分的に欠損している。底部は、おそらくヘラ切りであろうと思われるが、板目状圧痕が遺存するために明確ではない。胎土は微砂粒を多く含み粗い。

26は完形である。口径9cm、器高1.7cmを計る。煤が付着しているために全体が黒ずんでいる。体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を細く作っている。底部内面には指頭圧痕が残る。体部は内外面ともに、ていねいなヨコナデ調整がなされている。底部はヘラ切りである。

28は、24と同様に底部にはヘラ切りされた後に、板目状圧痕が遺存する。口縁部は、やや内彎しながら立ち上がる。推定口径9.5cm、器高2.1cmを計る。内外面ともにヨコナデ調整が施されている。

## 瓦器

29は底部が欠損した体部から口縁部の破片である。推定口径15.3cmを計る。外面の上半には、ヨコナデ調整ののち、ヘラミガキが施されている。下半部には、指頭圧痕が認められ、その上に部分的にヘラミガキがなされている。内面は口縁端部の内側に、凹線状のヨコナデが認められる。上半には、横方向のヘラミガキが、下半部には、幅3mm程度の太いヘラミガキが斜め方向に施されている。

30は推定口径14.8cm、器高5.5cmを計る椀である。色調は淡灰色で、他の瓦器と異なる。端部を丸く作っている貼り付け高台を持つ。体部は、内彎しながらゆるやかに立ち上がる。体部外面の上半にはヨコナデ調整を施し、下半部は指頭圧痕の上にヘラミガキを行なっている。内面にもヘラミガキが遺存するが不規則である。

31は、口径16cm、器高4.8cmを計る椀である。断面が三角形を呈する高台を貼り付けている。体部外面の上半部は、ヨコナデ調整が施され、それより下から底部外面にかけては、全面に指頭圧痕が施されている。内面には、密にヘラミガキがあると思われるが、磨滅が著しいために、十分によみとれない。

32・33はともにわずかな破片である。それぞれ推定口径が15.0cm、17.6cmを計る。体部はともに内彎しながら立ち上がるが、32は口縁がわずかに外反し、端部を丸くおさめている。33は口縁端部に弱い沈線をめぐらせている。内面には不規則なヘラミガキが多く遺存している。

## 土師質土器（土釜・他）

第18図34・35、第19図36～39が土師質土器の土釜である。これらの土器に関しては、「羽釜」「銅釜」「土鍋」といった名称があるが、ここでは全て「土釜」と称し、三足のものは「足釜」とする<sup>(81)</sup>。

34は足釜の脚部である。胴部貼り付け部分より欠損したもので完形の脚部ではなく、中央より折れたものである。手捏ねにより整形し、多少の篋削りを施している。

35は推定口径19.4cmを計る足釜である。体部は下半部が欠損しているが、半球形状になると思

われる。口縁部は内反する。体部上半部に幅狭の鈎を外反ぎみに貼り付けている。口縁部には内外面ともにヨコナデ調整を施し、体部内面は板ナデ、外面はナデ調整を施している。

第19図36は、口縁が内反する土釜である。推定口径21.8cmを計る。口縁部外面は、強いヨコナデが施され、内面にもヨコナデ調整が施されている。体部内面は4～5条/cmの刷毛目調整が行なわれている。幅狭の鈎を口縁が内反しはじめる部分に貼り付けているが鈎の下部は貼り付け後に篋状の工具で粘土を削り取ったために鋭く上方へ凹んでいる。

37は、口縁部より約2cm下に幅狭の鈎を貼り付けた土釜である。推定口径26cmを計る。口縁部は、内反し、ていねいなヨコナデ調整が施されている。体部上半部にもヨコナデ調整が施され、下半部は板ナデが行なわれている。体部外面上半部には指頭圧痕が認められる。下半部には、格子状叩目が施されている。

38は推定口径26cmを計る土釜である。口縁部は、やや内反する。端部から約1cm下に幅の広い鈎をほぼ水平に貼り付けている。体部の傾きより35～37より深いものであると思われる。胎土は約5mmの砂粒を多く含み、粗い。調整は内外面の磨減が著しいため十分にはよみとれない。

39は口縁端部を肥厚させて丸くおさめ、器壁を厚く作っている盤状の土器である。器壁外面はヨコナデ調整を施している。特に体部中央で強いヨコナデを施しているために幅の広い二条の凹線が認められる。内面は上半部にはヨコナデを施し、下半部にはヘラミガキが認められる。器壁外面には、使用時に付着したと思われる煤が部分的に認められる。推定口径は約20cmを計る。

#### 播 鉢

40・41はともに備前焼の播鉢である。40は推定口径30.6cm、器高11.2cmを計る。色調は暗褐色である。口縁内面はゆるやかな盛り上がりを持ち丁寧なナデ調整が施されている。口縁端部の下端は、やや外反するが、三角形に誇張されている。体部・底部の外面はともにナデ調整が施され、内面は全面にわたって条溝が施されている。

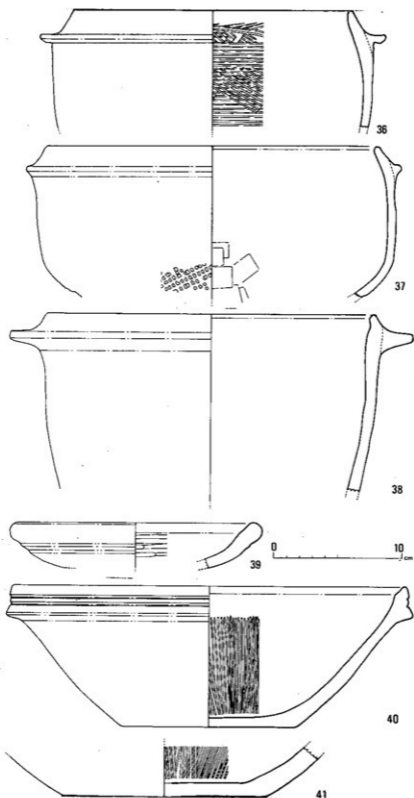
41は底部の一部である。赤褐色を呈する。器壁外面にはヨコナデ調整が施され、内面は全面に条溝が施されている。

#### 鉄 鉢

鉄鉢は茎の部分が竹製の鞘にさしこまれた状態（第18図42の左側の図）で出土した。竹製の鞘は数ヶ所で破損しているものの、原形は推察できる。現存長は14.3cmを計り、鞘の上半部には横方向の糸巻きの痕跡をとどめる。その上から漆を塗ったものと思われる。鞘の厚さは約2.5mmである。

鉄鉢は現存長12.6cmを計る。鉢身の上半部と茎の下半部がともに破損した状態であろう。鉢身と茎の境に棘状突起のある、いわゆる長頸鉢の一種である。鉢身の形状は破損のために断定できないが、おそらく柳葉式になると思われる。茎の断面は正方形をなす。

#### 木製品



第19图 SX8502 出土土器实测图(2)

SX8502からは、木製の加工品が数点出土している。ほとんどが、用途不明の板状の小さな木片であったために図化しなかった。そのうちの2点だけを図化した。

43は厚さ約8～9mmの板状の木片である。部分的に欠損しているが、表裏両面と側面はていねいに加工されている。表・裏ともに朱と墨書のあとが遺存する。朱は全面に塗布したのではなく、幅約2～3mmで帯状に各所に遺存する。墨書も確認できる範囲では、文字には見えず不規則に書かれている。

44は木製の漆塗りの椀である。約1/4が残存する。口径16.6cm、器高6.6cmを計る。体部は内彎しながら立ち上がり口縁にいくに従ってだんだん細くなる。内外面ともに黒漆が塗られている。内面はその上から赤漆を塗布している。遺存状態が悪いため実測できなかったが、体部外面下半部には、約0.5×1cm幅の整形時の工具痕が全面にわたり確認される。底部外面は粗雑な仕上げで、長さ約3cmの工具痕が数ヶ所遺存している。

### (3) SD8501出土遺物

出土遺物は極めて少なく、ほとんどが破片である。実測可能なものは、わずかに第20図1～3の3点だけであった。

#### 土師質土器

1は推定口径31.6cmを計る土師質の擂鉢である。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部で直立する。口縁端部は内面をわずかに肥厚させ、へら状の工具で沈線状の溝を造り出している。内外面ともに指で押さえたあとナデ調整を施しているが、口縁外面から器壁内面にわたっては、比較的丁寧にヨコナデが施されている。内面はヨコナデ調整の後、幅約3mmの3条の条痕を2～3cm程度の間隔を保ちながら施している。色調は赤褐色で胎土は1～2mmの微砂粒を多く含み粗い。

2は推定口径25.3cmを計る土釜の口縁部の破片である。体部上半から口縁部にかけて垂直に立ち上がる。口縁端部より約1cm下がったところに幅の狭い罫が水平に貼り付けられている。口縁は内外面ともにヨコナデが施され、体部は内外面ともにナデ調整が施されている。

#### 擂鉢

3は、備前焼の擂鉢の破片である。条溝は底部までいっばいにゆきとどいている。外面は丁寧にヨコナデが施されている。色調は赤茶色である。

### (4) SK8501出土遺物

#### 陶器

5は推定口径10.1cm、器高6.9cmを計る唐津系の刷毛目碗である。高台の端部をのぞいて全体に黒味がかかった茶色の釉と乳白色の釉が薄く施されている。18c前半～中葉。

#### 染付

4は碗の底部である。胎土は精緻で白色にややうすい灰色が混じる色調を呈する。釉は全体に少し灰色がかかった白色のものが、うすく施されている。呉須は黒ずんだ青色に発色している。肥

前系の土器である。

6は推定口径10.6cmを計る碗である。全体にわずかに青味を含む白色釉が施されている。体部外面には鳥の文様が付され、呉須は灰色気味に発色している。胎土は白色にうすい灰色が混じる。肥前の染付で18c前半～中葉。

7は小皿の底部である。うすい灰緑色の釉が施されている。高台および底部外面には砂が付着しており、この部分には釉がおよんでいない。内面見込み部分は蛇の目軸ハギされている。肥前の染付で17c末～18c中葉。

8は口径13.6cm、器高4.0cmを計る小皿である。内面見込み部分は蛇の目軸ハギされている。底部下半部から高台内面には釉はおよんでいない。体部外面には透明釉が、器壁内面には銅緑釉が施されている。嬉野内野山窯産の小皿で17c末～18c中葉。

9は碗の底部である。胎土は精緻でやや灰色がかった白色を呈する。釉はわずかに青味がかった白色のものが施されている。高台内面には「大明年製」のくずし字が付されており、呉須はやや黒ずんだ青色に発色している。

10は推定口径12cmを計る碗である。体部の器厚は約2.5mmで薄い。口縁内面に四方禪文を配している。体部外面は「福」「万」のくずし字が付されている。釉はわずかに青味を含む白色釉が施され光沢が強い。呉須は暗青色に発色している。肥前の染付で18c前半～中葉。

11・12はともに10の底部の破片である。釉は11が少し青みがかった灰色を呈し、12が灰色味をわずかに含む白緑色を呈する。12の内面見込み部分は蛇の目軸ハギされている。胎土の色調はともに灰色だが、12の方がわずかに明るい。呉須の発色はともに灰色ぎみのにぶい青色を呈する。

11・12ともに肥前の染付で11が17c末～18c中頃、12が18c前半～中葉。

#### (5) S X 8503出土遺物

S X 8503の出土土器は極めて少ない。陶器、染付、瓦が中心になるが、実測可能な土器はわずかに2点であった。

#### 土師質土器

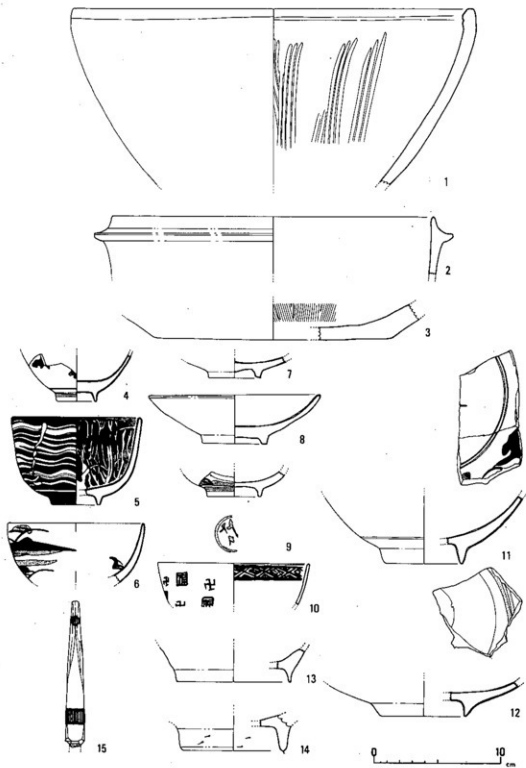
13は底部の破片である。細身の高い高台がつく。磨滅のため調整は不明である。

#### 陶器

14は底部のわずかな破片である。高台および、その内部には釉がかかっていない。外面は褐色味を帯びた灰緑色釉がかかり、内面は同じ釉だと思われるが、外面に比べると、釉のかかりは薄い。胎土は精良で灰色を呈する。

#### 木製品

木製の加工品は15の1点のみ出土した。ほぼ完形であると思われる。長さが11.6cmを計る棒状のものである。図の上方は断面形が円形で下方は長方形を呈する。全面が丁寧加工されたものであるが、用途は不明である。



第20图 SD8501, SK8501, SX8503出土遗物实测图



## (6) 包含層出土遺物

包含層の出土遺物は、S X 8501の稿で記述した縄文時代晩期の土器を含めて、須恵器、土師質土器、磁器、陶器、染付、石器など多種におよぶが量的には少ない。

### 須恵器

1は口縁外面に凸帯をもち、その下に櫛描きの波状文が施された壺か甕の口縁部の破片である。推定口径21cmを計る。胎土は精緻で、色調は赤灰色を呈する。2は杯の口縁部の破片である。3・4は杯の底部の破片である。3は断面が長方形の、4は三角形の高台をもつ。4の内面に灰緑色の自然釉が斑点状に付着している。2～4の胎土はともに精緻で、色調は2が淡灰色、3が灰色、4が白灰色を呈する。

### 土師質土器

5は外反する細身の高台をもつ碗の破片である。磨滅が著しく調整は不明である。6・7はともに静止糸切りの小皿である。6は復原して完形に近いものである。7は完形である。6は口径6.7cm、器高1.3cmを計る。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。器壁内外面ともに、ヨコナデ調整が施され丁寧に仕上げられている。胎土は0.3mm程度の微砂粒を多く含み、粗い。7は口径7.6cm、器高1.2cmを計る。体部は外反しながら立ち上がる。内外面ともに丁寧にヨコナデ調整が施されている。胎土は精緻である。

14・15は足釜の脚部である。15は磨滅が進んでいるために調整は不明であるが、15はへら削りによる整形の痕がうかがえる。14は白黄色、15は淡黄茶色を呈する。18は推定口径52cmを計る大型の盤状の土器である。口縁端部の外側を肥厚させて丸くつくり、器壁内外面ともにナデ調整を施している。器壁外面の色調は使用時の煤が付着しているために黒褐色を呈し、内面は黄茶色である。

### 磁器

8・9・10が青磁で、11が白磁である。8は底部の破片で、釉は緑色味の強い灰緑色を呈し、高台の内面までおよんでいる。内外面ともにカン入が顕著である。底部内面には文様が認められるが、詳細は不明である。胎土はやや粗く淡灰色を呈する。9は龍泉窯系の碗の破片である。細蓮弁文様が認められ、青みのかかった緑色釉が施されている。10は碗の底部の破片である。内面見込み部分には文様が認められる。胎土は精緻で白灰色を呈する。釉は青味を帯びた灰緑色である。11は、推定口径12.4cm、器高3.3cmを計る碗である。青色味をわずかに含む白色釉が施され、底部内面は蛇の目状に釉がかき取られている。胎土は精良で白色を呈する。

### 陶器

12は推定口径11.5cm、器高3.0cmを計る碗である。体部と底部の明瞭な区別はなく、体部はやや内彎しながら立ち上がる。釉は青色味をわずかに含む白色を呈する。内面見込み部分は蛇の目釉ハギされている。体部内面に鉄釉の文様が付されている。唐津系の陶器で17c～18c中葉。

13は推定口径20cmを計る碗の口縁部の破片である。体部は外反しながら立ち上がり、さらに口縁部で外側に屈曲する。釉の色調は褐色をベースに赤紫と黒紫色がまだらになっている。

### 攪鉢

16・17ともに備前焼である。16は推定口径28cmを計る。口縁端部は2条の凹線を有し内傾する。口縁部内面と器壁外面はヨコナデ調整が施されている。条溝は11条の単位で最上方で約7mmの間隔をもちながら全面に認められる。色調は暗紫色を呈する。17は推定口径35cmを計り、赤褐色を呈するものである。口縁端部にやはり2条の凹線を有するが、傾きは垂直である。口縁端部下方を肥厚させて三角形の断面を持つが顕著ではない。条溝は9条単位で全面に認められる。

### 簪

19は青銅製の簪で厚さは1mm、最大幅は1cmである。両端はともに欠損している。中央付近から先端に向けて、徐々に細くなっている。

### 石器

1～6はサヌカイト製の石鏃である。1・2は二等辺三角形鏃の基部が平基式のもので似かよった形態、つくりをしている。1は風化のため、やや白色化している。3は、両側辺とも調整が粗雑で、基部也未調整である。未製品だと考えられる。4は、基部がやや凹基状をなす二等辺三角形鏃である。一側辺の上半部が欠損しているが、刃部は細かい調整が両面より施されている。5・6は逆刺部が長く抉部が深い形状をなす鏃になると思われる。5は未製品で、6は逆刺部の一方が欠損しているものである。

7は両端に抉部をもつ石包丁で、一方の抉部を欠損している。刃部は一面より細かい調整がなされている。

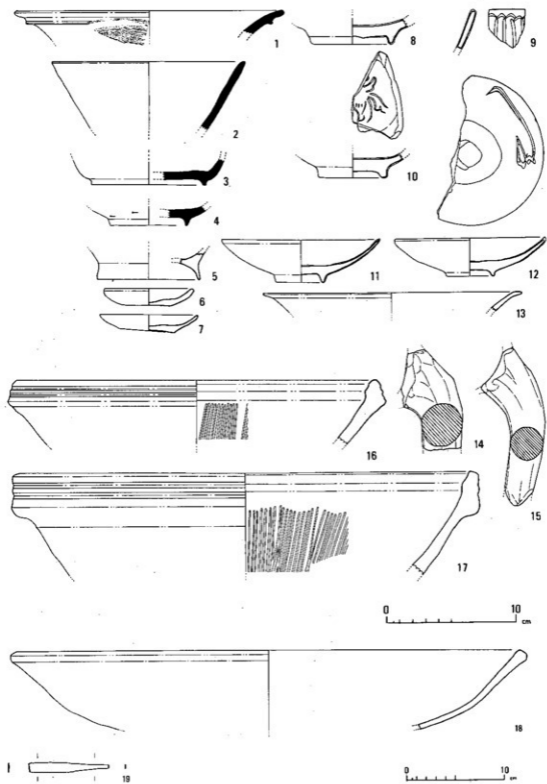
8・10～12はいずれも一辺だけに刃部を造り出しているスクレイパーである。12の刃部が内彎する以外は、直線あるいは、直線に近い刃部を有する。8は一面だけの調整であるが、細かい調整が施され、刃部は鋭い。11・12は両面から調整されている。10は一面に自然石の外形が残り、刃部の調整も粗雑である。

9は石斧の先端部だと思われる。欠損した面を除いて3側辺ともに、両面から比較的細かい調整が施されている。使用痕は認められない。

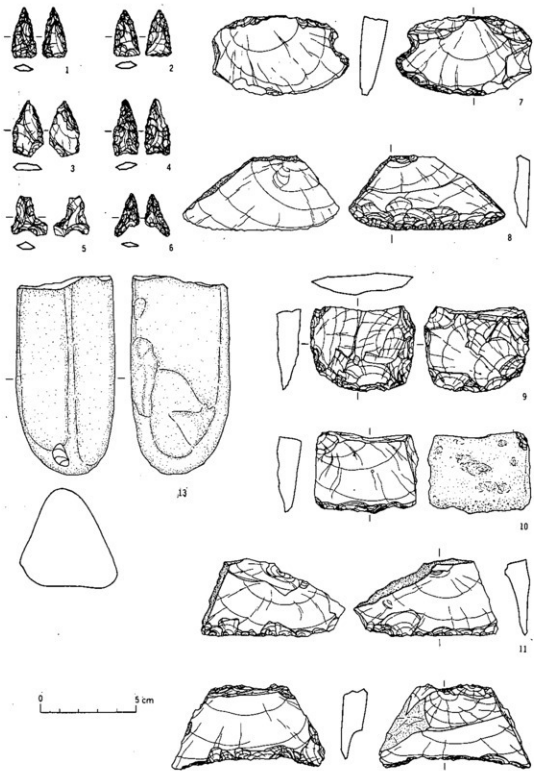
13は断面が三角形をなす砂岩の叩き石である。使用痕は明確ではない。

注1：菅原正明『畿内における土釜の製作と流通』

『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集，昭和58年。



第21图 包含层出土遗物实测图



第22图 包含层出土石器实测图

#### 4. ま と め

59年度に実施された予備調査では、中世のピット群の存在が確認され、東に隣接する中村遺跡で検出された室町時代の掘立柱建物群の延長の可能性が報告されていた。調査区内では、D-2、D-3区を中心に数個のピットを検出したが、ピットから良好な遺物の出土がなかったために、ピット群の明確な時期は言及できなかった。また不規則にピットが存在するだけで建物としての並びも認められなかった。したがって検出したピット群の性格も不明とせざるをえなかった。

また調査区の東端から中村遺跡の西端にかけては、南東から北西方向にむけて旧河道の跡と思われる地目の乱れが認められる。これは、日本道路公団のバラキ出水の資料の中の地下水脈の流れる方向と一致する。すなわち中村遺跡と乾遺跡の間には、かつて自然河川が存在したために、自然環境的に両遺跡は分断されていた可能性が強いと言わざるをえない。

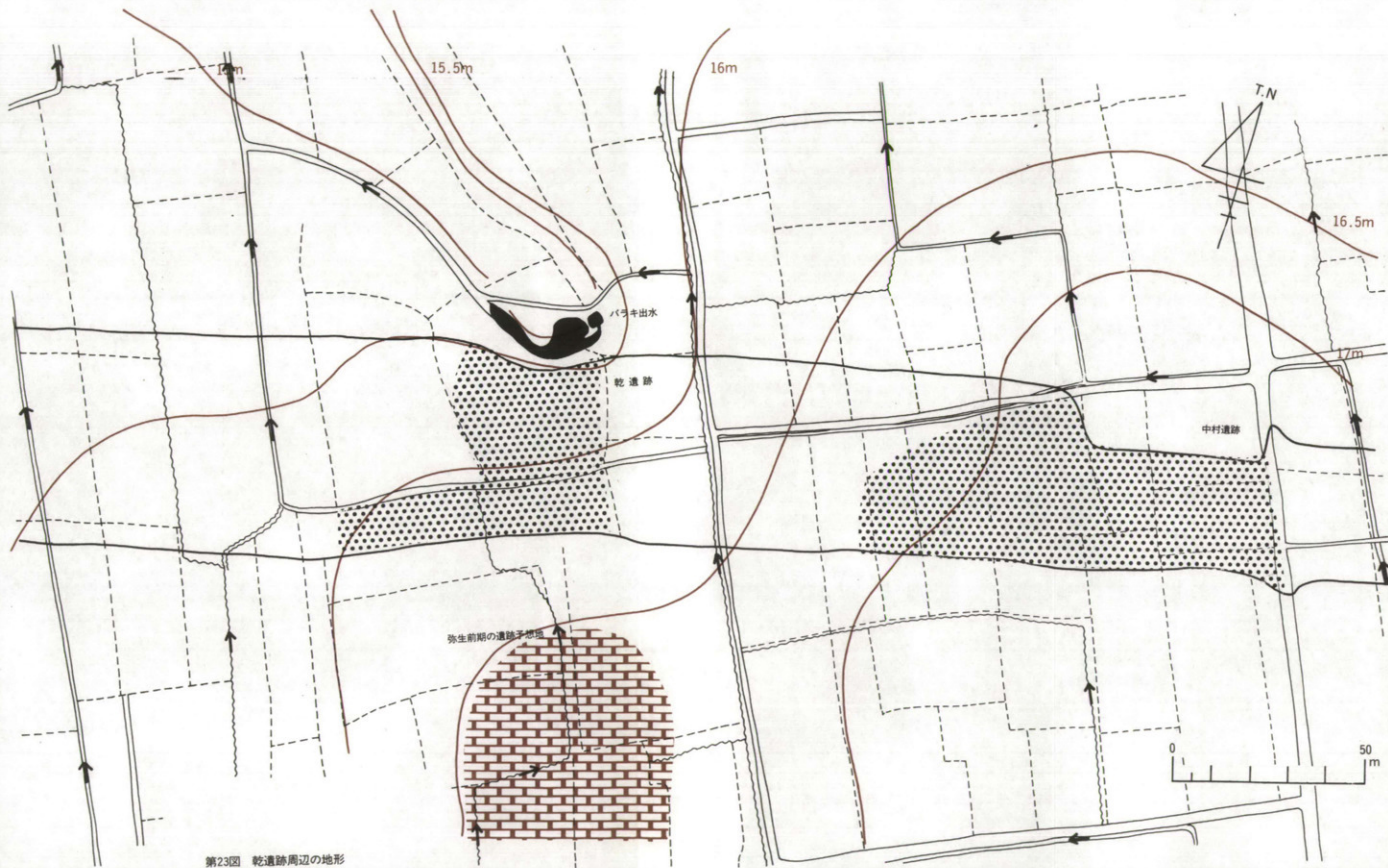
検出した遺構・遺物より乾遺跡の性格については言及しがたい。SX8501など調査区内で完結しない遺構が多く遺物量も少なかったためである。注目される遺物としては、SX8501から出土した弥生時代前期の完形の壺と、その下層より出土した木製鋸の未製品があげられる。いずれも調査区直近での人間活動を想像させる遺物であると考えられる。とりわけ木製鋸の未製品は、弥生時代前期からすでにこの地において農耕が行なわれていたことを裏づける貴重な資料と言えるだろう。

弥生時代前期の遺跡を想定する時、今回の調査区の範囲は、その縁辺部にあたるものと思われる。周辺地域の地形は、南東から北西方向にゆるやかな傾斜をもつ広い沖積平野であるが、等高線に注目した時、若干の地形の起伏が認められる。調査区はその谷筋部分に立地する。調査区の南約50m付近には、テラス状の等高線の張り出しがある。おそらくこの場所が、弥生時代前期の遺跡の中心地になるものと思われる。

また縄文時代晩期の土器が少量ながら出土している。出土土層は青灰色粘質土層で、調査区のほぼ全域で認められるものであるが、上層は当遺跡のベース面とした無遺物層の黄灰色粘質土層である。

横断道関連の遺跡も含めて善通寺市内の発掘調査では、今まで黄灰色粘質土層、あるいは、それに似かよった黄色系の粘質土層を遺構面のベースとし、地山と判断してきた。60年度より調査が開始された永井遺跡においては、当遺跡の黄灰色粘質土層と同一層ではないが、遺構面のベースとしている黄色系の粘質土層に縄文時代晩期の土器片が包含され、さらに下層の赤褐色砂質土層、青灰色砂礫土層より大量の縄文時代後期～晩期にかけての土器を出土している。隣接する中村遺跡においても弥生時代の溝が掘削されている黄色系の粘質土層より、石棒が出土している。

平野の形成された時期に関して、永井遺跡、中村遺跡と当遺跡の縄文土器などの出土状況より、善通寺平野全体に普遍化して言及するのは早計すぎるが、一つの仮説はたてることができる。す



第23回 乾道跡周辺の地形

なわち、普通寺平野の現在の地形の基礎となる黄色系の粘質土層は、縄文時代晩期に沖積作用により形成されたものである。弥生時代にはいつて人々が、この土の掘削をはじめ、活動の場としていったのであろう、ということである。

普通寺平野の形成時期が、この仮説通りであるとしたら、今後、普通寺平野での発掘調査は、今までと違った視点で行なう必要が出てくるだろう。61年度も調査継続中の永井遺跡、あるいは、その他普通寺市内での発掘調査の成果を待ちたい。

#### 一 発掘作業に従事した人々一

田村久雄	横田重子	多田サカエ
正嘉代子	見出トシ子	小野芳美
関宏	佐藤フジエ	我部山美江子
松原忠俊	西田井栄	北堀郁子
竹内文男	森江清美	山下君子
中村貞臣	真鍋ナツ	金森キヨ子
森岡光明	竹内ミツエ	福崎千代美
神原正則	香川キヨ子	多田久子
石村守	古川カオル	福崎ヨシノ
庄野義昭	構口綱子	
小田典生	山口ハルミ	
	林信子	(上一坊遺跡も同じ)

#### 一 整理作業に従事した人々一

北堀周子	尾崎直美	
武内ゆかり	川田裕加子	
香川真由美	石川ゆかり	(上一坊遺跡も同じ)





## IV 上一坊遺跡



## 1. 調査の経過

上一坊遺跡は、昭和59年11月29日～昭和59年12月25日に実施した予備調査により遺跡として確認された。予備調査では江戸時代の瓦・硯・陶磁器などの遺物が出土した溝・ピットなどが検出された。その成果を検討し2800㎡が調査対象面積となった。

本調査は昭和60年11月13日より開始した。予備調査が終わり本調査が始まるまでの間、道路公団との連絡調整が不十分であったために、横断道建設工事が発掘調査に先行するということがあった。そのために、発掘面積は2800㎡から1525㎡に縮小せざるをえなかった。この件以来、道路公団は、調査区の引き渡しなどで現地で立ち会いをした時には、打合せ簿を作成し確認印を押印する・会議の議事は双方で記録確認する、などの具体的な改善策を実施するようになった。以後、双方の連絡調整も密になり、スムーズになった。

昭和60年10月23日に道路公団・企業体の立ち会いのもと現地で発掘調査を開始するにあたり具体的な条件（盛土の除去の方法・プレハブの設置場所・排土置場・車の進入路等）を協議し、昭和60年11月13日より調査を開始することとなった。

グリッド設定にあたっては、20×20mを一調査区とし東西にアルファベットを南北にアラビア数字をつけて調査区の記号とした。調査グリッドの呼称は北西隅の記号でA-1、C-3のようになる。なおグリッドの主軸は国土座標により真北から振り出している。

調査が進行していく中で溝状遺構、ピット群が調査区から南・北面側へ広がっていることが確認できた。南側は横断道工事ですでにコンクリートブロックが築かれており、その外側約6mは側道の工事で耕作土より約70cmの深さまで掘り下げそこへ花崗土を客土していた。それに対して北側は、いく分拡張して掘れる余裕があったので、調査の途中、北側へ向かって約400㎡調査区を拡張した。南側は、遺構の破壊状況を確認する目的でトレンチを入れた。トレンチでの状況はピット・土器だまり等が確認されたが、遺構面は10cm程度削平されていた。

調査区内では中世のピット群・溝・井戸、近世後半の溝・井戸・土坑などを多数検出した。

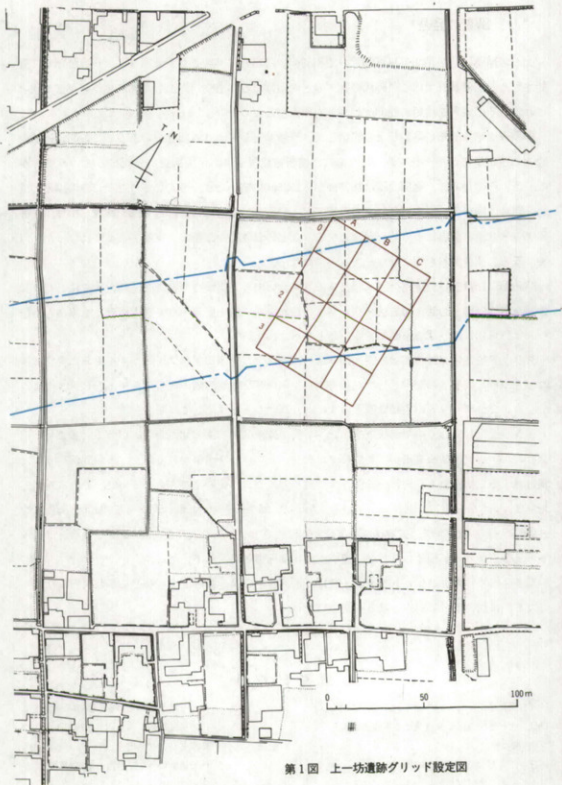
以下、日誌によって調査の動きを略述したい。

### 調査日誌抄

(11月)

- 13日 A-2・3区より重機による表土除去を開始する。
- 15日 作業員による発掘作業を開始する。グリッドの壁削りの後、A-2・3区より精査にはいる。ピット・溝・土坑などが

かなり検出されている。遺物は近世の染付・摺鉢以外にヘラ切りの小皿・土釜の脚などがかなり出土しているため江戸時代の遺構以外に、中世の遺構が存在する可能性もある。



第1図 上-坊遺跡グリッド設定図

22日 A-1・2区のピットをほぼ掘り上げる。復原して完形に近い土釜が出土するピットなどもあり、遺物の出土状況よりピット群は中世と思われる。A-2区のSD01より、巴瓦・摺鉢・染付などが出土している。

26日 A-2区の北壁の土層を実測する。終了後、北壁を除去する。

27日 A列、清掃後、写真撮影をする。(南・北より) B列の精査を開始する。銅銭(1枚)がのっている小皿を検出する。

29日 A-1・2・3区の平面実測を開始する。B-1区で銅銭がのっている小皿(3列目)を検出する。銅銭の1枚は淳化元宝、1枚は皇宋元宝か聖宋元宝、1枚は判読不明である。

(12月)

3日 B-2区、北西隅で井戸(SE01)を検出。平面プランは楕円形で掘り方の一部がSD03に切られている。井戸枠は石で構築している。埋土を約70cm掘り下げるとまわりの石が井戸の中におちている。

4日 A-1・2区の平面図終了。SE01の第6層に石が落ち込んでいるので平面図作成後、掘り下げを継続する。

10日 B-1区、南壁の土層実測。終了後、東10m部分を除去。A-1・2区のレベル測量。

11日 B-1区で上方部分に小さい河原石を投げ込んだ土坑は、掘り下げを継続すると井戸(SE02)となった。小さい河原石を除去すると直径約80cmの石組みの井戸側ができた。深さは約2.5mで石はほぼ垂直に構築されている。遺物は瓦の破片だけである。

12日 B-1・2区、清掃後写真撮影をする。(南・北より) C列の精査を開始する。

13日 B-1・2区東壁・C-1区南壁の土層実測をする。終了後、壁を除去する。B列の平面実測を開始する。

16日 C-2区の土坑(SK04)より円形の竹製の籠を検出する。同レベルに板状の木

片が数点残っている。

17日 北側に向かってA・B列を拡張する。A-0・1区、B-0・1区の精査を開始する。

19日 B-1区で井戸(SE03)を検出する。平面プランはSE02と同じで上方部分に小さい河原石が投げこまれていた。河原石の下より石組みの井戸側が出てくる。井戸側は直径約45cm、深さ70cmとSE02と比較すると小さい。

23日 コンクリートブロックの両側(S地区と呼称)に幅1m×長さ20mのトレンチを設定する。ピット・近世の土器溜りなどが検出される。平面図(1/50)を作成し、遺物の取り上げをする。SE03の平面実測を開始する。

24日 SE02、SK04の平面実測を開始する。

27日 A・B列、清掃後写真撮影。午後より発掘区の年末の整備をする。明日より1月5日まで年末・年始の休みになる。

(1月)

6日 本日より新年の作業を開始する。

9日 調査区全体を清掃し、写真撮影をする。(南・北・西より)

10日 土層観察用のトレンチを3本設定する。本日で、上一坊遺跡での作業員の発掘作業は終了する。13日より永井遺跡に合流する。

13日～24日 平面・土層実測、井戸・土坑などの断面の実測、レベル測量、遺物の取り上げを行なう。本日(24日)で上一坊遺跡における全ての作業を終了する。

## 2. 土層序と遺構

### (1) 土層序について

上一坊遺跡における基本的な層序は調査区全体でほぼ一定している。上層より攪乱土層→耕作土→床土→中・近世遺物包含層→無遺物層の順になる。

#### 攪乱土層

耕作土・床土を除去し、花崗土を客土したために作られた土層である。

#### 耕作土

工事の際に除去された箇所もあるが、一部残っている。

#### 床土

耕作土と同様に除去されている箇所がある。ほとんどが赤褐色を呈する土層だが、A-2東壁にみられるように、3層に分層され厚く堆積している部分もある。

#### 中・近世遺物包含層

床土と無遺物層の間の層である。遺物の包含は極めて少量であるが、近世後半の染付・瓦、中世の土釜・土師質の小皿などの遺物を包含する。調査区の北側にあたるB-0・南壁では15~20cmの厚さで堆積し3層に分れる。南辺にあたるB-2・南壁でも同じような状況である。この包含層が最も厚く堆積するのが、調査区の南東にあたるC-1・2区付近である。約40cmの厚さで堆積し、5層に分れる。各層の間の明確な時期差については、遺物の量が少なく、薄い堆積のために断言することはできない。上層部分は近世遺物を下層部分は中世遺物を包含する。

検出した溝・ピット・土坑は、ほとんど床土直下及び地山面から掘り込んでいる。B-0・1・2区南壁にみられるように無遺物層より一層上の上面より掘り込まれたピット・土坑も存在する。これらのピット・土坑は数は少ないが、出土遺物より中世後半の時期が与えられる。

#### 無遺物層

灰黄茶色粘質土層からが遺物を含まない層となる。灰黄茶色粘質土層は黒色粒を多く含む層と含まない層に2分される。土層図に見られるように、この層の上面から中世の遺構のほとんどが掘りこまれている。調査区ほぼ全体でこの層が遺構面となる。C列では灰黄茶色粘質土層は認められず、灰茶褐色砂礫混粘質土層、黒褐灰色砂礫土層が遺構面となる。C-1・2南壁の深掘り部分では砂礫を含む。この層が東から西へ向かってくだっている。A-1・2西壁の深掘り部分(耕作土上面より80cm・無遺物層上面より50cm)で砂礫層が認められないことより、旧地形は東から西へ下りの傾斜をもつものであったと考えられる。A・B列の遺構はゆるやかに傾斜する砂礫層の上に堆積した50cm以上の粘質土層に掘りこまれたものであるということが言える。



- 1. 暗灰黄褐色粘质粉质土 (泥质土)
- ロ. 灰黄色砂质土
- ハ. 暗灰褐色砂质土 (PH)

- 1. 耕作土
- 2. 赤褐色土層 (灰土)
- 3. 淡灰黄褐色土層
- 4. 赤褐色土層
- 5. 白腐灰褐色土層
- 6. 灰黄褐色粘质土層 (黑色粒を含む)
- 7. //

B-0 南壁



- ④ 暗灰黄褐色土
- ① 灰白褐色土
- ⑤ 暗灰黄褐色土 (PH)
- ② 暗灰黄褐色土
- ③ 暗灰黄褐色土
- ⑥ 灰黄色土

- 1. 耕作土・灰土・花崗土圧縮層
- 2. 灰褐色腐乱土層
- 3. 灰黄色粘砂質土層 (現在の堆積ともなう)
- 4. 灰黄褐色腐乱土層
- 5. 灰黄褐色粘质土層
- 6. 赤褐色土層

- 7. 暗灰褐色粘质土層
- 8. 灰黄色砂質土層
- 9. 灰黄褐色粘质土層 (黑色粒を多く含む)
- 10. //

- 4. 雜埋暗灰褐色腐乱土
- ロ. 赤褐色腐乱腐乱土
- ハ. 暗灰褐色粘质土
- ニ. 灰黄色粘质土
- ホ. 灰黄色粘砂質土
- ヘ. 黄灰色砂質土
- ① 灰黄色粘质土
- ② 白黄色粘质土
- ③ 灰黄色粘质土
- ④ 黄灰色粘质土
- ⑤ 黄灰色粘质土

SK02

SD04



- ① 灰黄褐色土 S D 03
- ② 暗灰白色土
- ③ 暗灰褐色粘质土
- ④ 暗灰褐色粘质土
- ⑤ 灰黄色粘质土
- ⑥ 灰黄色粘质土 S D 02

- 1. 花崗土・耕作土圧縮層
- 2. 灰褐色腐乱土層
- 3. 灰黄色砂質土層 (現在の堆積ともなう)
- 4. 灰黄褐色粘质土層
- 5. 灰黄褐色粘质土層
- 6. 白腐土層
- 7. 赤褐色土層
- 8. 淡黄白色土層

- 9. 灰黄褐色土層
- 10. 淡灰褐色土層
- 11. 暗灰黄褐色粘质土層 (黑色粒を多く含む)
- 12. 暗灰黄褐色粘质土層
- 13. 灰黄褐色粘质土層

0 2 m

A 2 東壁

第 2 図 土層実測図 (1)



1. 耕作土  
 2. 赤褐色土層 (床土)  
 3. 灰茶色砂質土層  
 4. 暗灰茶褐色土層  
 5. 暗灰褐色砂質土層  
 6. 暗灰茶褐色粘質土層  
 7. B (6より灰色)  
 8. 灰灰茶褐色土層  
 9. 暗灰茶褐色粘質土層  
 10. 茶褐色土層  
 11. 茶灰色土層  
 12. 黄茶褐色砂質土層



1. 花崗土・耕作土・床土互層粗粒土  
 2. 赤褐色土層 (床土)  
 3. 暗灰強茶褐色砂質土層  
 4. 暗灰強茶褐色砂質土層  
 5. 赤褐色砂質土層  
 6. 灰黄茶褐色粘質土層  
 7. 暗灰茶褐色粘質土層  
 8. 白褐色砂質暗灰褐色粘質土層  
 9. 灰茶褐色砂質粗粒土層  
 10. 黒褐色砂質砂礫層 (わずかに粘質土を含む)  
 11. 灰茶色粗粒砂礫土  
 12. 灰茶褐色粘質土層 (黒色粒を多く含む)  
 13. 暗灰黄茶褐色粘質土層  
 14. 暗灰黄茶褐色粘質土層

C-1, C-2 南壁



1. 花崗土・耕作土互層粗粒土  
 2. 耕作土  
 3. 灰褐色粗粒土層 (現在の地味にとりもなり)  
 4. 灰褐色粘質土層 (床土)  
 5. 赤褐色土層 (床土)  
 6. 赤褐色砂質土層  
 7. 灰茶褐色砂質土層  
 8. 灰茶褐色土層  
 9. 灰茶褐色土層  
 10. 白褐色砂質土層  
 11. 暗灰茶褐色粘質土層  
 12. 灰黄茶褐色粘質土層 (黒色粒を多く含む)  
 13. 暗灰黄茶褐色粘質土層  
 14. 暗灰黄茶褐色粘質土層

B-2 南壁



1. 黄白茶色と灰色の粗粒土  
 2. 暗灰明茶褐色土  
 3. 茶黄色湿暗灰粘質土  
 4. 灰茶褐色粘質土  
 5. 暗灰黄茶褐色土  
 6. 暗灰褐色土  
 7. 黄白褐色湿均灰褐色土 (P1)  
 8. 黄白褐色湿均灰褐色土 (P1)

第3図 土層実測図(2)



## (2) 遺構について

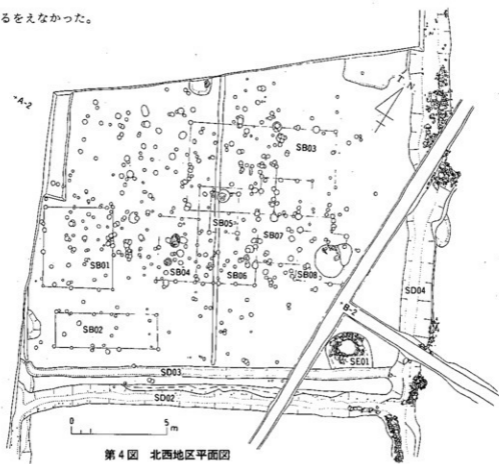
上一坊遺跡で検出した遺構は、建物遺構・ピット群・溝状遺構・井戸・土坑などである。出土遺物、遺構の掘り込み面より、これらの遺構は中世後半を近世後半の2時期にわけられる。中世後半の遺構は無遺物層の上面より掘りこまれている。ピットより土師質の小皿、土釜、土鍋などの遺物が出土する。近世後半の遺構は床土直下より掘りこまれている。溝状遺構・土坑より染付・溜鉢・陶器・瓦などの遺物が出土する。

調査にあたって遺構の検出は、無遺物層の上面でおこなった。以下中世後半、近世後半の順序で検出した遺構について記述していきたい。

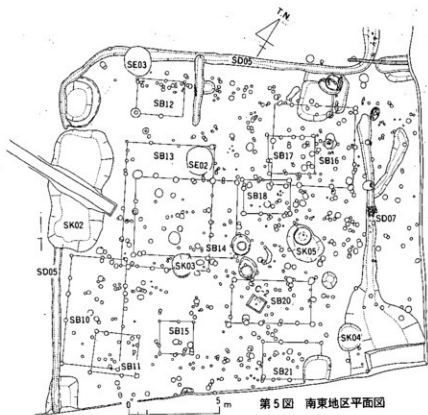
### 中世後半の遺構

#### ① 建物遺構・ピット群

調査区全体にわたって多数のピットを検出した。ほとんどが円形を呈するもので、大きさは直径20～30cmのものが多く、中には柱根や根石と思われる河原石をとこなうものもあり、建物の柱穴と判断できるピットもある。数か所で一直線上に並ぶピット列を確認することができたが、ほとんどが建物遺構とはならなかった。したがって多くのピットについては、その性格は不明とせざるをえなかった。



第4図 北西地区平面図



第5図 南東地区平面図

ピット群は、位置的に南東群・北西群に大きく2分される。両群とも細い溝に囲まれた状態で存在する。北西ピット群の南にはSD03があり、SD03はB-2区北西隅でSD04（近世後半の溝）によって切られている。SD04より東でSD03の延長が確認されていないことよりSD03は、B-2区北西隅で直角に曲がり北側に向かって北西ピット群の東側を囲むように存在していたことが予想される。

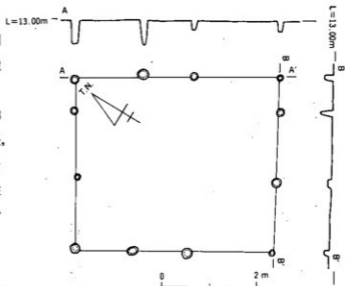
南東ピット群は西にSD05、北にSD05の延長、東にSD07によって囲まれている。溝状遺構・ピット群ともに調査区外に向かって伸びているので全様を明らかにすることはできなかった。溝状遺構はピット群と有機的なつながりを持ち、ピット群を限定するものであると考えられる。

ピット群の中から掘立柱建物遺構を24棟検出した。ピットが多数であるために発掘の途中で全ての建物遺構を確認することは困難であった。従って後に図面上で柱穴の並びを考えた。掘立柱建物遺構はN30°Wあるいは、それに直行する方向で主軸方位を持つという共通した特徴がある。それ以外は、建物の規模、柱穴の大きさ、柱間の長さなど全く統一性がない。

建物の中には、一つの柱穴の並びを共有するものがある。一方が建物でなくなるのか、あるいはもっと規模の大きい建物になるのか判断できないものもある。したがって建物遺構として報告しているものは図面上で考えられる可能性を示しているもので、明らかに建物が存在したというものではない。

### SB01

A-2区で検出した3間×3間の(368cm×428cm)の規模の建物遺構である。柱間長の最短は72cm, 最長は178cmで, 柱穴の最小は10.8cm, 最大は22.8cmとなり, 柱間長, 柱穴の規模に関しては統一性がない。しかし, 桁行, 梁間ともに柱間長がほぼ一定であるため建物であった可能性は高い。良好な残りの遺物は出土しなかった。



第6図 SB01 平・断面図

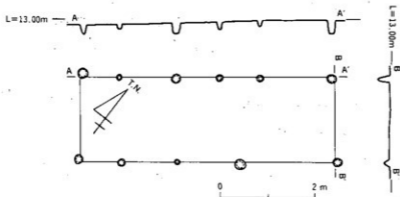
### SB02

A-2区中央付近で検出した。

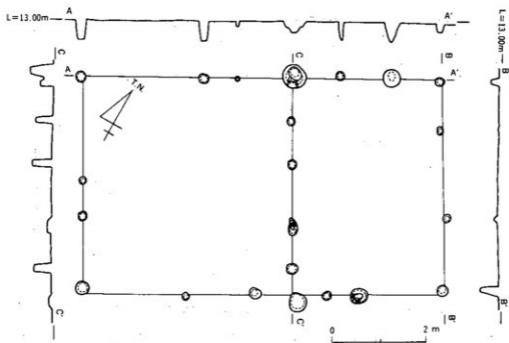
梁間が1間(180cm), 桁行の北側が5間, 南側が4間, (528cm)の規模を持つ。柱穴の大きさは最小が9.2cm, 最大が20.8cmを計り差が大きい。建物の四隅に位置する柱穴が, いずれも20cm程度で比較的大きいものである。柱間長の最長は南側の桁行で207cmとなりやや広すぎるが, 南側の柱穴はともに大きく深いものである。良好な残りの遺物は出土していない。

### SB03

A-1区で検出した梁間3間×桁行6間(432cm×768cm)の規模を持つ建物遺構である。桁行で東から4番目の柱穴を結び5間の規模の柱穴の並びが建物内に認められる。東側の梁間の内側の2穴が極端に浅いために, 東から3間の部分は建物に附設する建築物となる可能性もある。その場合, 建物の東端は5間の柱穴の並びの個所である。柱穴の規模・柱間長ともに統一性がみられないため, 建物遺構の可能性は薄いと云わざるをえない。良好な残りの遺物は出土していない。



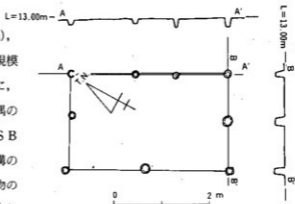
第7図 SB02 平・断面図



第8図 SB03 平・断面図

SB04

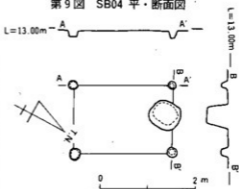
A-2区で検出した梁間2間(204cm)、桁行の東が3間、西が2間(330cm)の規模を持つ建物遺構である。柱穴の大きさに、大きな差はなくほぼ一定である。南西隅の柱穴が四角形状をなす。東側の桁行がSB06の西側の桁行と重なるため、建物遺構の規模よりSB04はSB06に附設する建物の可能性もある。良好な残りの遺物は出土していない。



第9図 SB04 平・断面図

SB05

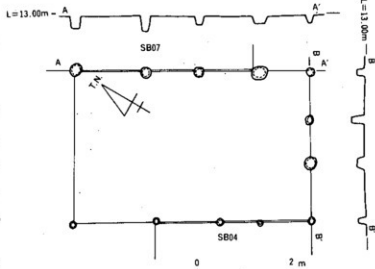
SB06の内部で確認された1間×1間(140cm×208cm)の規模を持つ建物遺構である。北側の柱穴の間に土坑が存在する。土坑は68cm×64cm、深さが46cmを計り、焼土を持つ。柱穴の並びと土坑の位置関係よりSB05にともなう土坑の可能性が高い。柱穴の大きさもほぼ一定である。良好な残りの遺物は出土していない。



第10図 SB05 平・断面図

### SB06

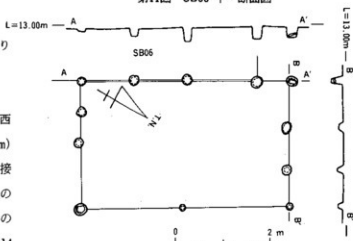
梁間の北側が1間，南側が3間（312cm），桁行が4間（498cm）の規模を持つ。東側の4つの柱穴がSB07と重なる。西側も4つの柱穴がSB04と重なる。柱穴の大きさは最小が10cm，最大が34cmとなり差が大きい。SB06がSB03, 04, 05, 07と同時に存在した建物遺構であるとする，かなり大きな規模の建物が存在していたことになる。良好な残りの遺物は出土していない。



第11図 SB06 平・断面図

### SB07

梁間3間（264cm），桁行の西側が4間，東側が2間（448cm）の規模を持つ。SB06の東に接する位置で検出された。単独の建物と考えた時，東側の桁行の中央の柱穴が直径12cm，深さ14cmと小規模である。214cmと228

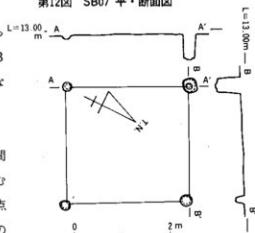


第12図 SB07 平・断面図

cmの柱間を支えるには安定していないと考えられる。したがってSB07はSB03あるいはSB06に附設する建物である可能性が高い。良好な残りの遺物は出土していない。

### SB08

A-2区の南東隅で検出された。1間×1間（244cm×256cm）の規模を持ち，SK06を囲むように存在する。SK06からは土釜の脚が数点出土している。それと同時期と思われる土釜の口縁部，土釜の脚を北東隅の柱穴より出土して

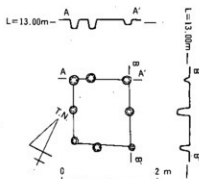


第13図 SB08 平・断面図

いる。SK06は検出面からの深さが3～4cm程度の極めて浅い土坑であるが、SB08はSK06にともなう建物である可能性が高い。

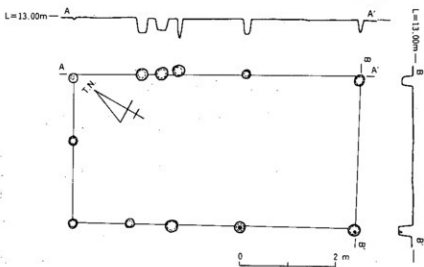
#### SB09

B-2区の南東、北西のピット群以外の場所で検出された。2間×2間(112cm×140cm)の小さい建物である。良好な残りの遺物は出土しなかった。



第14図 SB09 平・断面図

#### SB10

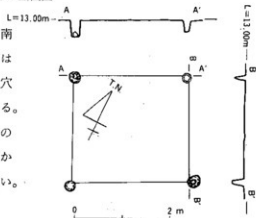


第15図 SB10 平・断面図

B-2区で検出された。梁間は北側が2間、南側が1間(320cm)である。桁行の東は5間、西は4間(610cm)となる。東側の北より3番目の柱穴を除くと、東西の桁行の柱間長がほぼ一定となる。SB10のすぐ西側にはSD05が並走する。西側の桁行の南から1・2番目の柱穴には柱根がわずかに遺存する。良好な残りの遺物は出土していない。

#### SB11

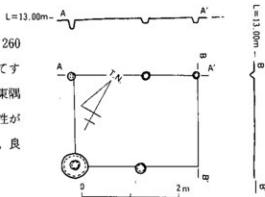
SB10と南東部分で重なり合う位置で検出された。1間×1間(220cm×238cm)の規模の建物遺構である。北西隅の柱穴には根石と思われる河原石が残る。良好な残りの遺物は出土していないが、南西隅の柱穴より柱根と思われる木片が検出された。



第16図 SB11 平・断面図

### SB12

B-1区で検出された1間×2間(192cm×260cm)の規模の建物遺構である。建物に平行してすぐ東にはSD05を切る細い溝が存在する。南東隅の柱穴は確認できなかったが削平された可能性がある。南西隅の柱穴は2段掘りになっている。良好な残りの遺物は出土しなかった。



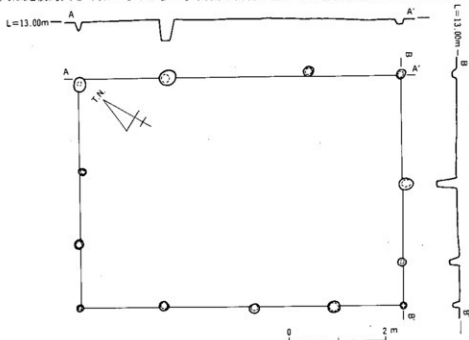
第17図 SB12 平・断面図

### SB13

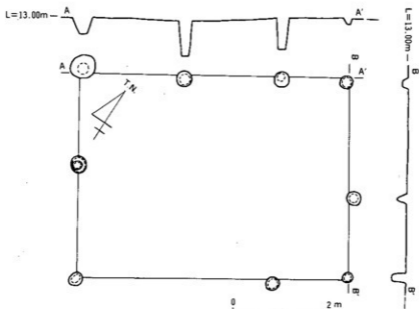
B-1区で検出された梁間が3間(488cm)、桁行(680cm)の東が3間、西が4間の規模の大きな建物遺構である。柱穴の大きさの最小は12cm, 最大は34cmと差が大きい。東側の柱穴の北より2番目と3番目の間から直径20cm深さ3cmを計るビットが検出された。そのビットより土師質小皿3点と銅銭が出土した。銅銭は最初の1字が判読不明であるが後の3字は「〇宋元宝」と読みとれる。小皿の1枚の中央に銅銭がおかれた状態で出土した。SB13にともなう地鎮などの祭祀の際に納められたものと思われる。

### SB14

建物の西側約3/4がSB13と重なり合う。梁間2間(408cm)、桁行3間(560cm)の規模をもち、柱穴は比較的大きく深いものが多い。南側の桁行の西から2番目の柱穴はSK03(近世土坑)に



第18図 SB13 平・断面図



第19図 SB14 平・断面図

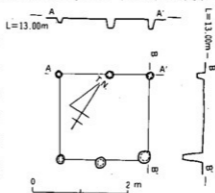
より切られているため消滅している。建物遺構のほとんどから良好な残りの遺物は出土しなかったがSB14からは良好な残りの遺物が多く出土した。西側の梁間のまん中の柱穴からは、土師質小皿2点と青磁片が、北側の柱穴の並びの西から2番目の柱穴からは土師質小皿2点、東側の並びの中央の柱穴からは土師質小皿1点が出土している。

#### SB15

B-2区の北東隅で検出された1間(170cm)×2間(192cm)の規模の建物である。柱穴の大きさの最小は12cm, 最大は25cmを計る。良好な残りの遺物は出土しなかった。

#### SB16

B-2区の東辺で検出した。北西隅の柱穴が確認できなかった。梁間(428cm)の東側が3間、西側が2間、桁行(452cm)の北側が3間、南側が4間の規模をもつ。北側の柱穴の並びにほぼ平行して浅い土坑(SK15)が存在し、北西隅より2番目の柱穴はSK15を完掘した後に確認された。柱間長の最短は80cm, 最大は216cmと差が大きい。すぐ東側をSD07が並走する。良好な残りの遺物は出土しなかった。東側の梁間の南から2番目の柱穴には柱根が認められた。



第20図 SB15 平・断面図



### SB17

建物のほぼ全体がSB16と重なり合っている。1間(208cm)×4間(256cm)の規模をもつ。梁間の柱間長が208cmと広いのに比較して、桁行の柱間長は42cmの箇所もあり南北ともに狭い。柱穴の大きさも最小が11cm, 最大が32cmと差が大きい。

### SB18

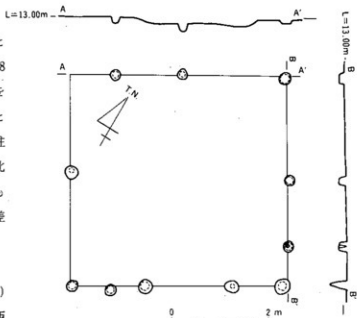
1間(188cm)×2間(262cm)の規模をもつ。SB16の南西隅と一部重なり合う位置で確認された。北側の桁行の中央の柱穴の大きさが14cmを計り比較的浅いことを除けば、柱穴は大きさ、深さともに安定している。南東隅の柱穴からは、土師質小皿1点、判読不明の銅銭1点が出土している。

### SB19

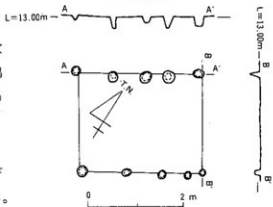
C-1区で検出された。東側の柱穴の並びはSB16の東側の柱穴とほぼ一直線上となる。それに平行してSD07が存在する。梁間2間(246cm)×桁行2間(308cm)の規模をもつ。南西隅の柱穴は、SK05(近世の土坑)に切られて消滅している。良好な残りの遺物は出土しなかった。

### SB20

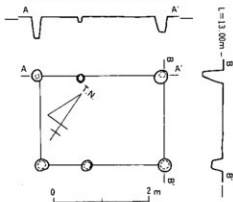
C-1区の南西隅付近で検出された。梁間(240cm)の東が2間で西が1間、桁行(432cm)の北が3間、南が5間の規模をもつ建物遺構である。良好な残りの遺物は出土していない。柱間長、柱穴の大きさともに一定して



第21図 SB16 平・断面図



第22図 SB17 平・断面図

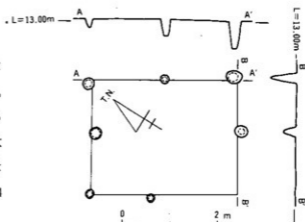


第23図 SB18 平・断面図

いない。

### SB21

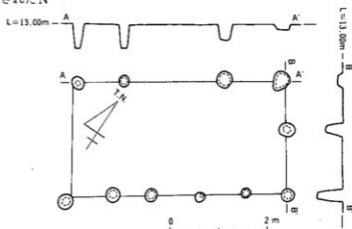
C-2区で検出された1間(204cm)×3間(326cm)の規模をもつ建物である。南東隅の柱穴は近世の土坑によって切られているために消滅している。柱穴の大きさは最小16cm,最大24cmと大きな差はないが,柱間長は最短は86cm,最長が204cmと差が大きい。



第24図 SB19 平・断面図

### SB22

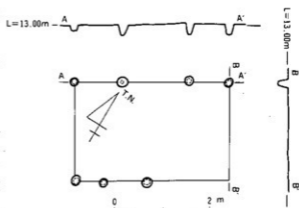
B-0区の調査区北辺で検出されたN30°W(調査区内で検出した建物遺構の主軸方位)に直交する方向で,3つの柱穴が一直線に並ぶために建物となる可能性が強いと思われる。調査区外に遺構がのびているために,建物の全容は明らかではない。良好な残りの遺物は出土しなかった。



第25図 SB20 平・断面図

### SB23

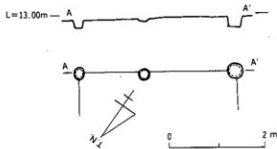
B-0区で検出された1間(312cm)×2間(408cm)の規模をもつ建物である。柱穴の大きさ,深さ,柱間ともにほぼ一定で,安定している。北東隅の柱穴より土鍋が1点出土している。



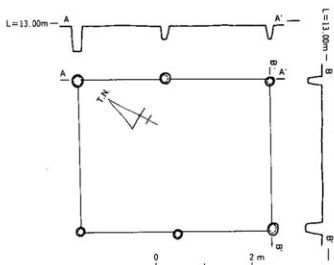
第26図 SB21 平・断面図

### SB24

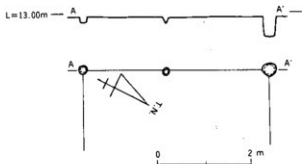
SB22と同様に3つの柱穴がN30°Wの方向で一直線上に並ぶために建物としての可能性が強い。遺構が調査区外の東側へ向かってのびているために,建物の全容は明らかでない。良好な残りの遺物は出土しなかった。



第27图 SB22 平·断面图



第28图 SB23 平·断面图



第29图 SB24 平·断面图

第1表 建物遺構一覧表 (1)

項目 遺構番号	規模 (梁間×桁行)	大きさ	柱 穴		柱 間		備 考
			最大	最小	最長	最短	
S B 01	3間×3間	368×428	22.8	10.8	178	72	
S B 02	5間(北) 1間× 4間(南)	180×528	20.8	9.2	207	78	北と南で桁行の間数が異なる。
S B 03	3間×6間	432×768	36.8	8	266	70	南北で著しく柱間長が異なる。 間に5間の梁がはいる。
S B 04	3間(東) 2間× 2間(西)	204×330	20	12	136	86	南西隅の柱穴が四角形状。 東の柱穴がS B 06の西側の柱穴と重なる。
S B 05	1間×1間	140×208	46	24	208	140	ピットの大きさもほぼ一定。 北側の柱穴の間に68×64-46の焼土を含む土坑がある。
S B 06	1間(北) ×4間 3間(南)	312×498	34	10	148	92	東側の柱穴の並びがS B 07と同一。 西側の柱穴がS B 04と同一。 北側1間分がS B 03の中にある。
S B 07	4間(西) 3間× 2間(東)	264×448	28	12	228	72	東2間の中の柱穴が径12、深14と安定してなく214、228を支える柱とは考えにくい。
S B 08	1間×1間	244×256	28	18	256	244	ピット2より土釜の口縁部。 土釜の脚を多数出土したS K 06を建物内にもつ。
S B 09	2間×2間	112×140	36	10	76	36	ピットがきちんと直角方向に並ばないが、小屋のような建物であると思われる。
S B 10	2間(北) 5間(東) × 1間(南) 4間(西)	320×610	26	16	320	36	Pit 9、10に柱根が残る。 S D 05が西側の柱穴にほぼ並行して走る。
S B 11	1間×1間	220×238	24	18	238	220	柱穴の大きさ、深きともに安定している。 Pit 1には礎石と思われる石。 Pit 4から柱のあとと思われる木片が検出。
S B 12	1間×2間	192×260	52	12	192	104	南東隅の柱穴が確認できなかった。他のピットの深さがそんなに深くないために削平された可能性がある。 東側の柱の並びにそって細溝が走る。

第2表 建物遺構一覧表 (2)

項目 遺構番号	規模 (梁間×桁行)	大きさ	柱 穴		柱 間		備 考
			最大	最小	最長	最短	
S B 13	3間(東) × 3間 4間(西)	488×680	34	12	300	92	
S B 14	2間×3間	408×560	52	22	416	140	柱穴の大きさ、深さともに安定している。 Pit 2より土師質小皿2点、しのぎ蓮弁文のある甕磁底部1点。 Pit 4より土師質小皿2点。 Pit 7より土師質小皿1点。
S B 15	1間×2間	170×192	25	12	170	86	
S B 16	3間(東) 3間(北) × 2間(西) 4間(南)	428×452	30	20	216	80	北西隅のPitがない。 Pit 5に柱根が残る。 東側の柱穴に平行してS D07がある。
S B 17	1間×4間	208×256	32	11	208	42	桁行の柱間が狭い。
S B 18	1間×2間	188×262	26	14	188	92	Pit 4より土師質小皿、銅鏡、焼石出土。
S B 19	2間×2間	246×308	34	14	162	114	南西隅のビットがS K05に切られて消滅している。 東側の柱穴の並びに平行してS D07、S B16の東側の柱穴とほぼ一直線となる。
S B 20	2間(東) 3間(北) × 1間(西) 5間(南)	240×432	34	18	212	98	
S B 21	1間×3間	204×326	24	16	204	86	南東隅のビットが近世の土坑によって切られている。 南側の柱穴の並びで土坑に切られたビットが2つとしたら南の桁行は4間となる。
S B 22							N-30°-W(調査区内で検出した建物の主軸方位)に直交する方向でビットが一直線上に並ぶので建物となる可能性が高い。 梁間の規模は不明。
S B 23	1間×2間	312×408	24	18	312	184	Pit 2より土師質の鍋が出土している。
S B 24							N-30°-Wの方向でビットがほぼ一直線に並ぶので建物となる可能性が高い。 梁間の規模は不明。

## ② 溝状遺構

### S D03

A-2区からB-2区にかけて総延長約20mにわたって検出した。幅約70cm、深さ約25cmを計り、断面形は、ゆるやかなU字形を呈する細い溝である。溝の主軸方位はN30°Wに直交する方向である。ほぼ一直線に西から東に走る。埋土は第2図、A-2区東壁の土層実測図にみられるように上層の灰茶褐色土と下層の暗灰白色土の2層に分れる。遺物の出土は極めて少なく中世後半と思われる。土釜片、土鍋片などが出土している。

S D03の東端は、B-2区の北西隅付近でS D04（近世後半の溝）によって切られている。S D04より東でS D03の延長が認められないことより、S D03はこの付近で消滅したか、直角に曲がって北側へ向かってS D04と同じ方向で延びていたかのどちらかの可能性が考えられる。前述したように、北西ピット群との関連で考えた時S D03はピット群を何かの目的で規制する溝と考えられる。北西ピット群の東側を囲むように存在し、後にS D04によって切られた可能性が高い。

### S D05

B-1区からB-2区にかけて総延長約40mにわたって検出した。幅約50cm、深さ約25cmの細い溝である。断面形はS D03と同様にゆるやかなU字形を呈する。遺物の出土は皆無に近く、2～4cm程度の器種不明の土器片が4点出土しただけである。1点は須恵器で他の3点は中世土器と思われる胎土をしている。第3図、B-2区南壁の土層実測図にみられるように埋土は暗灰微茶色土の単一層である。

S D05の時期決定については、南東ピット群との位置関係および埋土の色調などより中世後半の時期を比定した。

S D05は、先にのべた建物群の主軸方位と同様N30°Wの方向で、調査区を南から南東ピット群の西辺を囲むように北側へ向かって延びる。B-1区の南西隅で弧を描きながらほぼ直角に曲がり東ピット群の北側を囲むように東へ向かってのびている。S D03と同様に、ピット群を何かの目的で規制する細い溝と考えられる。ピット群と同時期に機能していた可能性が高い。また暗灰微茶色土の埋土は、ピット群の埋土と非常によく似かよっている。したがってS D05は建物群、ピット群と同様の中世後半の時期が与えられる。

### S D07

C-1・2区で約10mにわたり検出した。溝の幅は約40cmである。深さは削平された可能性が高く、場所によるとわずかに2cm程度しか残されていない所もある。主軸方位はN30°Wで、やはり建物群・ピット群を規制する目的の溝と考えられる。S D03・05と比較すると遺物はやや多く出土している。土釜片、土釜の脚片、土師質小皿片などで、中世後半の時期の遺物である。

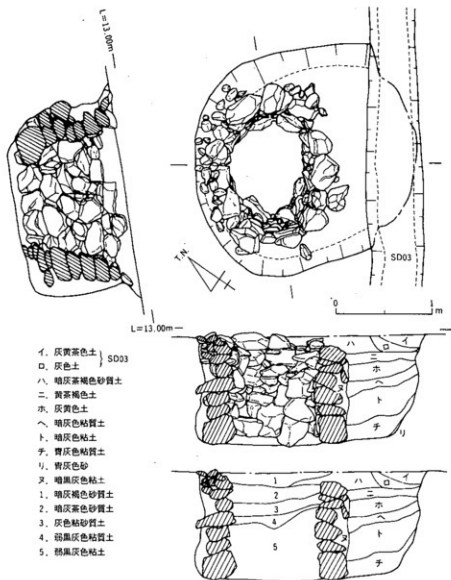
C-1区の南側で溝はだんだん円形状に広がっていく。調査区内で確認できた最大径は約4mとなるが、最も広がった場所でも深さは20cm程度と浅いものであった。S D07は広がり途中で

調査区外となるために、全容は明らかにできなかった。

### ③ 井戸

#### SE01

B-2区北西隅で検出された。掘り方の形状は、やや不整形な楕円形を呈し、南東の一部上面が、SD03によって切られている。長径約2.5m、短径約2.3mを計る。掘り方の北西側に片寄って石組の井戸側がある。井戸側の上面形も楕円形を呈し、長径約1.4m、短径約1mとなり、深さは約1.2mを計る。北西-南東の断面形は、ほぼ直立に石組みがなされているが、北東-南西の断面形は上方が広がり下方が狭くなる槽鉢状をなしている。



第30図 SE01 平・断面図

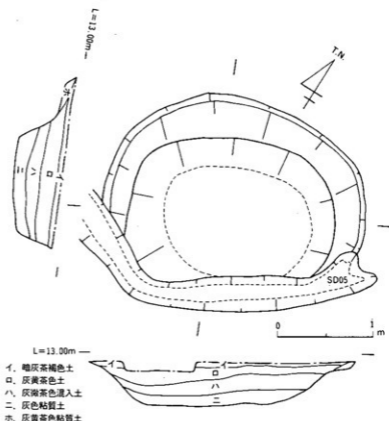
井戸の底には水溜は確認されず、青灰色砂礫層の平坦な底となっている。

石組みの中の埋土は5層に細分されるが、砂質系の上層と粘質系の下層に大きく2分される。遺物は極めて少量であったが、上層のみに集中し、土釜の体部片、脚片、土師質小皿などが出土した。また掘り方の埋土（第30図・ヌ）の石と石にはさまるよう鉄釜が1点出土している。

#### ④ 土坑

##### SK11

B-1区南西隅で検出した楕円形の掘り方を持つ土坑である。南側の一部上面は、SD05によって切られている。長径約2.7m、短径約2.2m、深さ約0.5mを計る。掘り方の断面形は2段掘りに近い形状をなしている。埋土は5層に分層される。遺物の量は少ないが、土釜、土鍋、土師質の小皿などの中世遺物の破片が出土している。



#### 近世後半の遺構

##### ① 溝状遺構

##### SD01・02・04・06

近世後半の溝として検出したものは、SD01・02・04・06の4条である。総延長約85mにわたって検出した。遺構配置図でみる通り、SD01・04はN30°Wの方向で主軸方位を持つ。SD02は、SD01およびSD04にA-2区、B-2区、で直交する方向で合流する。SD06はSD04とB-1区で合流する。溝の規模、埋土、作り、出土遺物より、これらの4本の溝は近世後半の同時期に機能していたものと言える。

検出した面での幅は約1～2m、深さは約50cmを計る。断面形の形状はゆるやかなV字形をなすが、場所によってはU字形を呈する所もある。SD01・02・04はほぼ一定の幅と深さを持つがSD06は、SD04から分岐する場所より東へ向かって約15mの地点で極端に規模が小さくなり、

第31図 SK11 平・断面図



幅は約40cm、深さは約12cmとなる。

これらの溝は、全て現在の畦畔の下より検出された。従って土層図（第2図B-1南壁、A-2東壁土層実測図、第3図B-2南壁土層実測図）にみる通り溝の上半部は畦畔を作る際に削られて、畦畔にともなうやや攪乱をうけた土が堆積している。溝の埋土は、上層が灰色粘砂質土層で下層が灰色粘質土層である。中間に白黄色の砂が混じる箇所もあるが、ほぼ同一の埋土である。

SD02部分に特に顕著にみられるが、両肩にそって杭列が確認される部分がある。杭の規模は直径約5~7cm、長さ約50~70cmでほぼ垂直に打ちこまれている。杭が続く場所では杭列に沿って攪乱を受けた土の堆積が確認されることにより、溝の補修にともない土が盛られ杭列は土止めのために打ちこまれたものであることが想像される。

また構造上のもう一つの特徴として溝が屈曲する部分（B-2区のSD02とSD04の合流点、B-1区のSD04とSD06の合流点）には溝の側壁にいいいな石組みがみられる。水流による側壁の崩れを防止する目的で構築されたものと思われる。

これらの溝より近世後半の染付、陶器、瓦などが多く出土している。

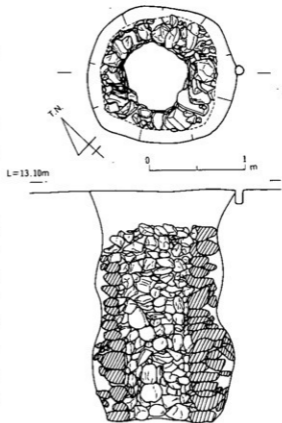
## ② 井戸

### SE02

B-1区で検出された。掘り方の上面形はほぼ円形を呈し直径約1.5mを計る。深さは約2.4mで掘り方の側面には2ヶ所のくびれが認められる。くびれの部分で掘り方の土層が変わり、上層より粘土層、砂質層、砂礫層となる。井戸の底には水溜めはなく砂礫層の平らな底となっている。

検出した際の上面は、小さな河原石が無作為に投げ込まれた状態で、その河原石を約40cm掘り下げると石組みの井戸側が検出された。井戸側は、ほぼ正円形に組まれており、その内径は約70cmを計る。中世後半のSE01の石組みが、上方が開く擂鉢状をなしているのに対してSE02の石組みはほぼ直立に生まれ、内側にむかって石面も同一面に整えられている。

SE02からは良好な残りの遺物は出土していない。瓦片、染付片が数点出土してい



第32図 SE02 平・断面図

るだけで明確な時期は言及できないが、近世後半の時期が与えられる。

### SE03

SE02より北西方向へ約6mの位置で検出された。上面での形状は北西-南東軸が長い楕円形を呈する。長軸約1.6m, 短軸約1.4mを計る。深さは、底に水溜めと思われる直径約50cm, 深さ10cm程度の凹みがあり、凹みの底までが約1.3mとなる。掘り方の形状は上面が広がり底が狭くなる播鉢状をなしている。検出した際の上面の状況はSE02と同様で、小さな河原石を投げ込んだような状態であった。その河原石を約50cm掘り下げるとSE02と同じように、石組みの井戸側が検出された。井戸側の内径は約40cm, 高さは約70cmと極めて小規模のものである。石組みは直立に組まれておらず、中央がややふくらみ、上下がそれよりも狭くなっている。

出土遺物は、極めて少なく良好な残りの遺物はなかったが、染付片より近世後半の時期が与えられる。

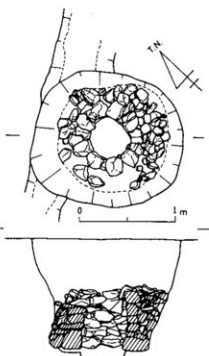
### ③ 土坑

調査区内で検出した近世後半の土坑と考えられるものは、全部で13を数える。掘り方の上面での形状は円形のものか隅丸の長方形のものが多い。大きさ、深さともに一定ではなく、その機能についても不明なものが多い。

### SK02

B-1区からB-2区にかけて検出した隅丸長方形の大きな土坑である。たて約6.6m, 横約3m, 深さ約1.3mを計る。掘り方の断面形は上方がやや開き、底が広いゆるやかなU字形を呈する。土層(第2図, B-1南壁, 土層実測図)はほぼ水平な堆積で上層より礫混暗灰茶褐色攪乱土→弱黒灰褐色混礫攪乱土→暗灰色粘砂質土→灰色粘砂質土→青灰色砂質土の5層に大別される。

暗灰色粘砂質土より以下の層で遺物が多く出土した。出土遺物は、染付、播鉢、瓦、土師質の鉢、鍋などの土器類と、木製の漆碗が出土している。



第33図 SE03 平・断面図



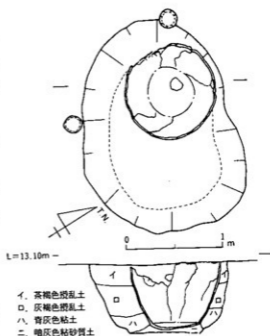
### SK12

B-1区の北西隅で検出した。約2.6m×1.6mの隅丸の長方形の掘り方を持つ。深さは約30cmを計る。埋土は、ほぼ平行な堆積を示すが、口層（灰茶褐色粘質攪乱土）、二層（灰白茶色攪乱土）などの攪乱層が中間で認められるところが他の土坑の埋土の状況と異なる。

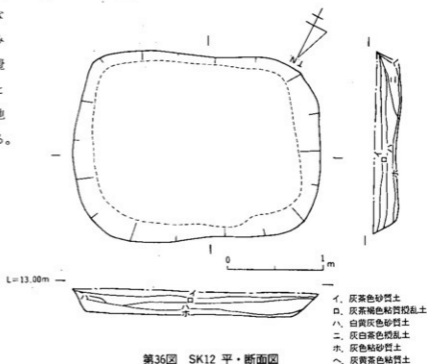
遺物は中世土器片が少しと染付、土師質の土器、瓦片などが出土している。他に底面にふせられたように、漆塗りの木製椀が1点出土した。

### SK13・SK14

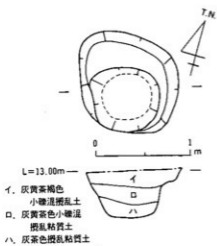
B-1区南東隅で検出された。ともに2段掘りに近い掘り方を持つ。SK13は直径約1.1mの不整形な円形で深さは約50cmを計る。SK14は直径約1.1mのほぼ円形状をなし深さは約55cmとなる。ともに上層に小礫を含む攪乱土が認められる。遺物はほとんど出土していない。SK13-SK14にみられるような、上層に攪乱土があり、遺物がほとんど出土しない土坑が他にも数個検出されている。



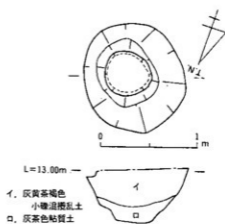
第35図 SK05 平・断面図



第36図 SK12 平・断面図



第37図 SK13 平・断面図



第38図 SK14 平・断面図

### 3. 遺物について

上一坊遺跡から出土した遺物はコンテナで約60杯となる。出土遺物の時期は中世から近世に集中し、それ以前の遺物は石器類が少量出土しただけで須恵器、土師器、弥生土器などは全く出土しなかった。

中世遺物は土師質小皿・土釜・土鍋・土師質の甕などの土器類と、銅銭、鉄釜などが出土しており、瓦器は1点も出土しなかった。また近世遺物は、染付、陶器、播鉢、瓦などの土器類と鉄製品、キセル、漆塗りの木製碗、木製加工品などが出土している。

出土遺物の時期については、中世遺物が、瓦器が入らないことより、中世後半の時期が与えられる。近世遺物は、溝から出土した染付のほとんどが18世紀～19世紀初頭のものであることより、近世後半の時期が与えられる。

本稿では、土師質土器・磁器・陶器、備前焼播鉢、瓦、近世陶磁器、木製品、鉄器類、石器類と小節を設けて、この順序に従って記述していきたい。

#### (1) 土師質土器・磁器・陶器

##### 建物遺構・ピット出土土器

第39図が建物遺構の柱穴より出土した土器である。

1は土鍋の口縁部である。1/8程度の破片であるため口径は推定44.2cmを計る。口縁部は体部より屈曲し外側に向かって開き、やや内彎しながら立ち上がる。器壁内面は、ていねいなヨコナデ調整がなされているが、器壁外面には屈曲部分を中心に指頭圧痕が残り粗雑な仕上げとなっている。器壁外面には全体に煤が付着している。

2は淡黄色を呈する土釜の破片である。ほぼ口縁部に近い所に幅狭の鈎を作りだしている。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部でさらに内傾する。器壁内面および、外面の鈎にかけての範囲は、ていねいにヨコナデがなされている。鈎より下方は、指頭圧痕が残り、その上をナデ調整している。胎土は1～4mm程度の砂粒がわずかに認められる。

3, 4, 5がSB13の1つの柱穴より出土した。3が1/4程度の破片、4が1/2程度の破片で5はほぼ完形である。3点とも色調、胎土、整形の手法ともに、ほぼ同一である。色調は淡赤白色を呈し、胎土は比較的緻密である。器壁内面の見込み部分には渦巻状の粘土の盛り上がりが顕著に認められ、器壁内面および体部外面はヨコナデで調整されている。底部外面はヘラ切りで、その上に板目状圧痕が遺存する。口径、器高は3点ともにほぼ同一で5は口径8.5cm、器高1.5cmを計る。

6～11はSB14出土の遺物である。6と9、7と8と11がそれぞれ同一の柱穴から出土した。小皿は8が1/3程度の残りではそれ以下の小片である。色調は6が赤白色、7が淡赤白色、8・9が淡黄色、10が灰赤白色、10が灰赤褐色を呈する。胎土はいずれも比較的緻密である。いずれ

も底部外面以外の面はヨコナデで調整されている。底部は、全てヘラ切りであるが、8には板目状圧痕が残り、10はヘラ切りの後、ていねいにナデ調整が施されており、平坦な面が作り出されている。8は推定口径7.6cm、器高は1.5cm、9は推定口径8cm、器高1.6cm、10は推定口径8cm、器高1.3cmを計る。

11は蓮弁文を有する青磁碗の破片である。文様は片切り彫り手法で施されたものである。高台はまっすぐにたち先端の外側部分を斜めに切りとっている。器壁内外面ともに灰緑色の釉が施されているが、高台の先端部、底部外面の見込み部分には釉がおよんでいない。中国元代のものである。

12はSB18より出土した。口縁部および底部の大半が破損している。器壁内外面ともにヨコナデが施されているが、体部下半部は斜め方向のナデ調整がなされている。底部と体部の境目でわずかな段が作り出されており、底部には静止糸切りの痕が遺存している。色調は白灰色で、胎土は緻密である。

第40図1～28がピットより出土した土師質の小皿である。上一坊遺跡で出土する小皿は、胎土、色調にはいくつかの種類があるが、成形、調整には統一性が認められる。すなわち底部と体部の区別が明瞭で、体部は外反しながら立ち上がり、比較的深い。器壁内面および体部外面にはヨコナデ調整が施されて、底部はヘラ切りである。ヘラ切りの後、板目状の圧痕をとどめるものも多い。口径は8cm前後に集中する。

これらの特徴にあてはまらないものが1、2である。1は1/4、2は1/2程度の破片である。体部と底部の境界部分で内面側が肥厚しているために、外面でははっきりとわかる体部と底部の区別が内面では不明瞭となっている。すなわち、底部内面の中心から口縁部にかけて、わずかに内彎しながら体部は立ち上がっている。2の口径は5.8cmを計る。他と比較して小型で底部は静止糸切りである。

色調は赤褐色、淡赤褐色、淡黄色、白赤色の4種類にわけられる。赤白色を呈するものは、2・3・22・26、淡赤白色を呈するものは、8・9・10・11・12・14・15・18・19・20・21・24・25・28、淡黄色を呈するものが1・6・27、白赤色を呈するものが4・5・7・13・16・17となる。また胎土に微砂粒を多く含むものは1・3・9・16・17・18・28で、6・21の胎土は比較的緻密である。

底部は2以外は全てヘラ切りであるが、ヘラ切りの後に板目状の圧痕をとどめるものは5・6・11・12・13・16・17・22・23・26・27となる。22は1/4程度の破片であるが、わずかに片口を作り出していると思われる。

完形あるいは、完形に近いものについてのみ口径・器高を記す。5 (8.8, 1.3cm) 10 (7.8, 1.2cm) 11 (8.2, 1.3cm) 12 (7.9, 1.1cm) 13 (8.1, 1.4cm) 14 (7.7, 1.3cm) 15 (8.4, 1.7cm) 19 (8.0, 1.8cm) 24 (8.0, 1.4cm) 25 (8.2, 1.3cm) 26 (8.5, 1.3cm)。

29～32は土師器の椀か杯であろう。31・32は同一のピットからの出土である。29は底部の1/3程度が残る破片である。器壁内面・体部外面はヨコナデが施され、底部は静止糸切りである。体部の下半部で削り出しにより約2mmの直立する面を作っているために、底部は低い高台状をなしている。体部がやや内彎しながら立ち上がるために、椀の可能性が高い。色調は白赤色で胎土は細かい。

30は29と同様に椀の可能性が高い底部片で色調は白味の強い白赤色を呈し胎土は比較的緻密である。約3mmの高さの高台状の平坦な底を持つ。器壁内面、体部外面はヨコナデが施されている。底部は静止糸切りである。

31は口径8.6cm、器高3.5cmを計る杯である。器壁内外面ともにヨコナデが施されている。体部は内彎しながら立ち上がり、中位よりやや外反する。底部のほとんどが欠損している。

32は完形の杯である。口径8.9cm、器高3.3cmを計る。色調は白赤色で胎土は比較的緻密である。器壁内面、体部外面はヨコナデ調整が施されており底部はヘラ切りである。31と同様に体部は内彎しながら立ち上がり、中位よりやや外反する。口縁端部は丸くおさめてある。

33は青磁の高台付皿の底部片である。やや緑色を帯びた淡灰色の釉が施されている。体部下半部および高台部分には釉がおよんでいない。内面見込み部分は釉のカキ取りがおこなわれている。体部内外面はヨコナデ調整が施されている。

34は青磁の皿の口縁部片である。内外面ともに灰緑色の釉がかかり、カン入が認められる。体部は外半しながら立ち上がり口縁部でほぼ水平に横に広がり、口縁端部をやや肥厚させて丸くおさめている。

35は陶器の椀の底部片である。灰緑色味を含んだ淡灰色釉が施されているが、体部下半、高台部分、内面見込み部分にはおよんでいない。内面見込み部分には釉着防止の砂の跡が残っている。高台は逆台形状の幅の広いしっかりしたものがつけられている。体部外面下半部および高台部分にはケズリ調整が、内面見込み部分はナデ調整が施されている。

第41図36は約1/4の破片の土師質の壺である。体部上半部で最大復径を持ち、体部は球形に近い形をしている。口縁部は体部との境からほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部に平坦面を作り出している。推定口径13cmを計る。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部内面および体部外面はナデ調整が施されている。体部内面の中央部には荒いハケ目が横方向に認められ、体部内外面はともに指頭圧痕が残る。色調は白黄色を呈するが、体部の下半部は内外面ともに煤が付着しているために黒ずんでいる。胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含む粗い。

37は暗黄褐色を呈する鉢の口縁部である。約1/4が残存する。推定口径は20.8cmを計る。体部はやや内彎しながらほぼ垂直に立ち上がる器形になると思われる。口縁端部は内側を肥厚させて丸くおさめている。器壁外面にはナデ調整が施されている。

38は壺か甕の底部であろう。器壁内外面ともに磨滅が著しく調整はほとんど不明であるが、内



面には、かすかにヨコ方向のハケ目が認められる。体部の下半部の方が底部よりも厚く作られている。底部外面は煤が付着して黒ずんでいるが、色調は灰黄赤色を呈する。1～4mm程度の砂粒を多く含む胎土は粗い。

39は土鍋の約1/8程度の破片である。推定口径42.2cmを計る。口縁部は外反しながら横方向に開くが、端部より約1cm下方の位置には凹線状の浅い溝が認められる。口縁部の外面はヨコナデにより、体部外面および内面下方部にはナデにより、器壁内面の上半部はヨコナデによりそれぞれ調整が施され、比較的ていねいな作りとなっている。色調は暗黄褐色を呈するが外面は煤が付着しているために黒ずんでいる。

40は暗灰茶色を呈する土釜の1/8程度の破片である。推定口径は19cmを計る。口縁部に近い所に幅の狭い鈎を持つ。鈎の下方部にはへら状の工具により抉りをいれた痕が認められる。体部はやや内彎しながら立ち上がるが、鈎より約4cm下方で内側へ向かってゆるやかな凹みがある。その部分に指頭圧痕がはっきりと残っていることより、押さえこんだためにできた凹みであると思われる。口縁部は鈎より上方から内反しながら立ち上がる。器壁内面から口縁部の外面にかけてはヨコナデ調整が、それより下方はナデ調整が施されている。

41～44は土釜の脚である。42は体部の一部がついている。脚がつく位置の体部内面には明瞭な指頭圧痕が遺存するために、脚を貼り付ける際に内側から強く押さえ込んだ様子がうかがえる。外面の一部にナデ調整が残る。43は上下が欠損している脚部である。成形時には細長い面を作り出しその上にナデ調整を施している。41、44は赤褐色を呈し42、43は淡黄白色を呈する。

第42図45～48は土坑状の大きいピットより出土した一括の遺物である。

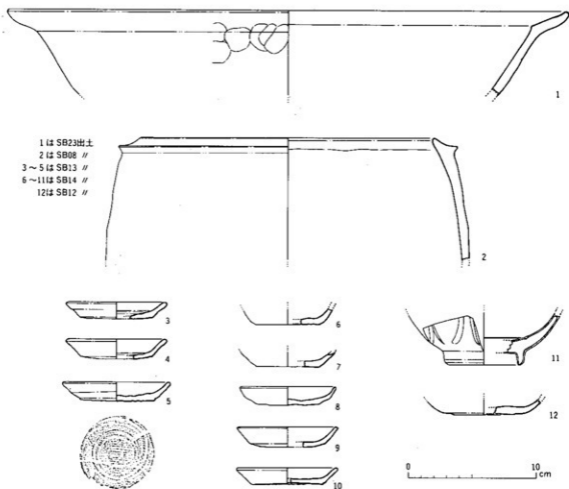
45は備前焼の甕である。口縁部で約1/3程度が残存し、推定口径は36cmを計る。口頭部はやや「ハ」字状に開き、体部上半部は強く内彎する器形である。口縁部は粘土を貼りつけることによって外側を肥厚させている。口縁端部から口縁部の外面および体部の外面にかけては淡灰色（部分的に黒っぽい緑）の釉がかけられている。口頭部の内外面はヨコナデ調整が、体部外面には横方向のナデが施されている。体部内面は板ナデが施されているが、頸部の屈曲部分から約3cm下方の位置には、板ナデを施したと思われる板状の原体の圧痕がほぼ水平に連続してつけられている。胎土は1～5mmの砂粒を多く含む粗い。

46、47は土師質の擂鉢である。ともに1/3程度の破片で色調は淡黄白色を呈し、胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含む粗い。推定口径は46が25.9cm、47が36.8cmを計る。器形・調整ともにほとんど同じである。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部を内方に肥厚させてその先は丸くおさめている。口縁端部にはヨコナデを施している。体部外面には全体に指頭圧痕が残り、その上にナデを施している。内面は横方向のナデを施したのちに幅2.3cmで8条単位の条溝を、46は等間隔に、47は不規則でつけている。47には約6cmの大きさの片口を作り出している。

48は土鍋の1/4程度の破片である。推定口径は44.0cmを計る。口縁部外面はヨコナデが施され、

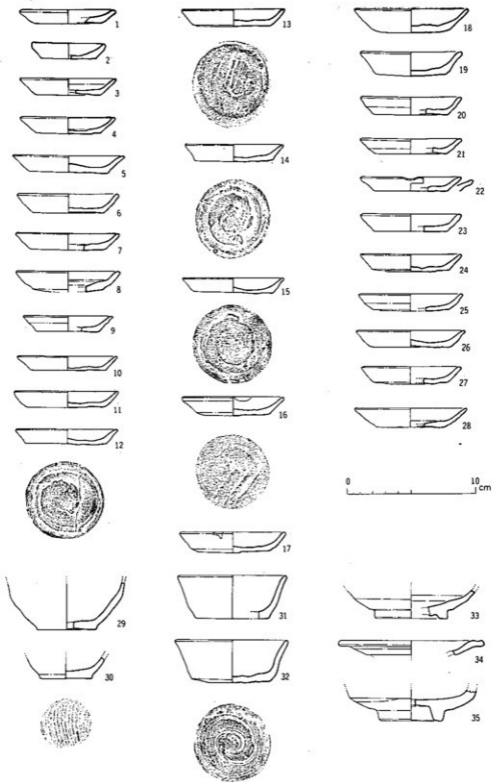
体部外面は指頭圧痕の上にナデを施している。器壁内面は太いハケ目でていねいに整形されており、ハケ目が口縁部の先にまでおよんでいる。内外面ともに煤が付着して黒ずんでいる部分が多いが、色調は淡赤褐色を呈する。

第43図1は、胴部の一部が欠損しているが、ほぼ完形の土師質の甕である。口径29.3cm、器高34.7cmを計る。最大復径は胴部の上半である。底部と体部はほぼ同じ厚さで、口縁部をやや厚く作っている。器壁外面の底部・体部はナデにより調整されていると思われるが、全体に磨滅が著しいために、細かな調整はよみとれない。色調は黄褐色を呈し胎土は3～5mm程度の砂粒を多く含み粗い。ピットに埋め込まれた状態で出土した。

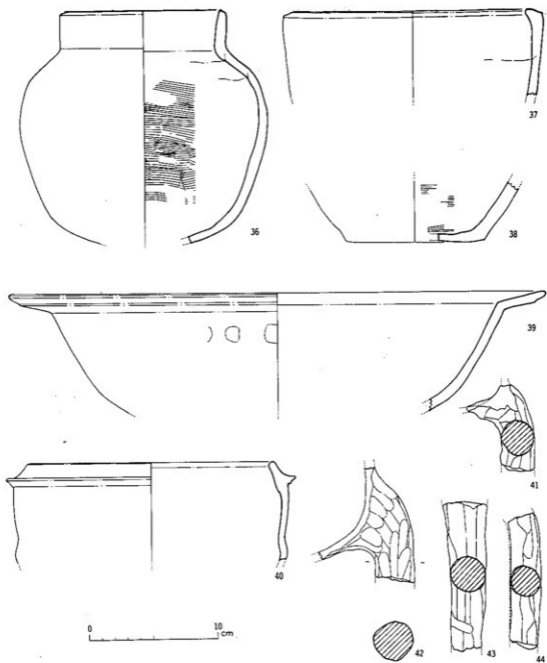


- 1はSB23出土
- 2はSB08 //
- 3～5はSB13 //
- 6～11はSB14 //
- 12はSB12 //

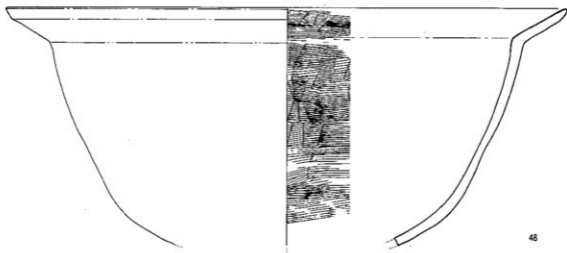
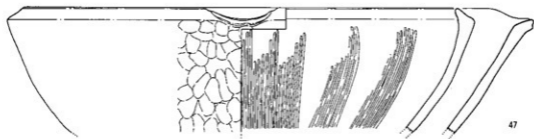
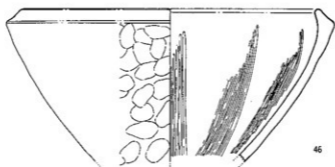
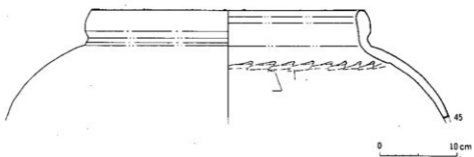
第39図 建物遺構出土土器実測図



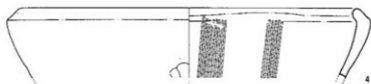
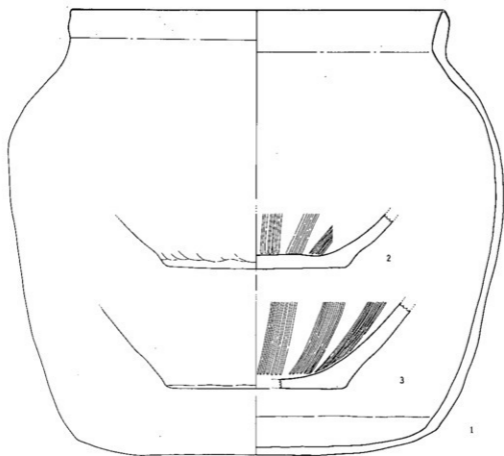
第40図 ビット出土土器実測図



第41図 ビット出土土器実測図



第42図 ビット出土土器実測図



0 10 cm

1はビット出土、  
2はSD04 //  
3~5はSD06 //

第43図 ビット・清出土土器実測図

### 溝・土坑・井戸出土土器

第43図2～4は土師質の擂鉢である。2・3は底部片で4は1/8程度の口縁部片である。色調はそれぞれ暗黄褐色、黄白色、淡黄白色を呈す。胎土はともに1mm以下の微砂粒を多く含み粗い。2・3ともに底部と体部の境でヘラまたは指によるおさえの痕跡が認められるが、器壁内外面ともに磨滅が著しく調整は不明である。体部内面には、2は1単位6条の、3は7条の条溝が施されている。4の推定口径は28.5cmを計る。口縁端部は内側に粘土を貼り付けて丸く肥厚させ、ヨコナデを施している。内面には1単位8条の条溝が施されている。

5は土師質の鉢の1/4程度の破片である。推定口径28cm、器高9.3cmを計る。色調は淡黄茶色を呈し、胎土は1mm以下の砂粒を多く含み粗い。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は内外両側に肥厚している。体部内面は横方向のナデ、口縁部はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕の上にナデ調整を施している。

第44図6・8～10は土師質の小皿、7は土師質の皿である。全て1/8～1/4程度の破片である。小皿の推定口径・器高は6(8.0cm, 1.4cm), 8(8.4cm, 1.4cm), 9(8.0cm, 1.6cm), 10(7.6cm, 1.5cm)となり、上一坊遺跡の標準的の小皿の特徴を持つ。すなわち口径が8cm前後で比較的深い体部を有する器形である。6のみが体部と底部の境の内面が肥厚する器形を持つ。底部はいずれもヘラ切りで、9は板目状の圧痕をとどめる。色調は6, 10は白赤色、8が淡赤褐色、9は内面が黒灰色、外面が淡赤褐色を呈する。

7は淡黄白色を呈し、胎土は精緻である。底部の側面を削り出して低い高台を作っている。器壁内外面ともにヨコナデが施され、底部は静止糸切りである。

11は体部外面の剥落が著しい土釜である。約1/8程度が残存する。推定口径20.5cm、推定器高12.0cmを計り、胴部は半球状をなす。体部はやや外彎しながら立ち上がり口縁部付近に幅狭の鈎がつく。鈎より上方は強く内傾する。口縁部に楕円形状の穴の把手がつくと思われるが、破片のために明らかではない。器壁内外面ともに調整は不明瞭であるが、体部内面の下半部には横方向のハケ目が認められる。口縁部の内外面はともにヨコナデが施されている。色調は白黄色を呈するが、器壁外面は煤が付着しているために黒ずんでいる部分が多い。胎土は1～5mm程度の砂粒を多く含み粗い。

12～17は土釜の口縁部で、いずれも1/8～1/4程度の破片である。12～15・17は土師質のもので器形・整形ともに似かよっている。すなわち口縁端部より約1cm下方に幅狭の鈎を持つ。特に17は鈎よりも凸帯に近く、わずかな盛り上がりを持つ程度である。鈎より上方から口縁部内面にかけてはヨコナデが施されており、鈎より下方は指押さえとナデが施されている。体部の上方は内彎しながら口縁部に続くが、口縁部はさらに強く内傾している。推定口径は12(24.2cm), 13(24.8cm), 14(32.0cm), 15(31.6cm), 17(20.0cm)となる。色調は淡黄色を呈するものが12・14・17で、13・15は黄褐色を呈する。胎土はいずれも1～2mm程度の砂粒を多く含み粗い。

16は色調が黒灰色を呈する瓦質の土釜である。推定口径23.0cmを計る。体部は外反しながら立ち上がり、その上方に比較的幅の広い鈎をほぼ水平に貼りつけている。鈎より上方は内傾する。調整は鈎の上下両面ともにヨコナデが施され、ていねいに仕上げている。口縁部外面の下方には、ヘラ状の工具によるナデの跡がある。それより上方から内面にかけてはヨコナデが施されているが、口縁部内面はその上に指押さえの痕が認められる。体部内外面はともに磨滅のために調整は不明である。胎土は1mm以下の砂粒をわずかに含むが比較的緻密である。

第45図18は土師質の鍋状の土器である。口縁部の破片で約1/8が残存する。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部との境でわずかに外側に向かって屈曲し、その位置から口縁部はやや彎曲しながらまっすぐに立ち上がる。口縁端部は上方へやや拡張している。器壁内面および、口縁部外面の上方はヨコナデが施されている。体部外面には指頭圧痕があり、その上をナデ調整している。色調は黒灰色を呈する。

19～21は盤状の土師質土器の口縁部片である。残存度、推定口径はそれぞれ19(1/4, 42.4cm), 20(1/8, 48.2cm), 21(1/4, 52.4cm)となる。色調はともに器壁の内面と外面で異なる。内面は暗黄褐色で外面は黒褐色となる。19は特に体部上方および口縁部に煤の付着が著しい。19は口縁部の外側に幅約2cmのゆるやかな凹みを作り出し、口縁部をくびれさせている。口縁端部・器壁内面上方部にはヨコナデを施し、それより下には横方向のナデを施している。器壁外面は煤が付着しているために調整が不明であるが、口縁部の凹み部分にヨコナデが施されている。20は口縁部の内外面にはヨコナデを体部内面にはナデ、体部外面は指頭圧痕の上にナデ調整をそれぞれ施している。21の器壁内面および口縁部外面はヨコナデを施しているが、口縁部の外面から体部上半にかけては、その上からハケ状の工具で雑にナデたあとが認められる。体部外面の上方部には指頭圧痕が残り下方は横方向のナデが施されている。19ほど顕著ではないが、口縁部の外側にわずかな凹みが認められる。

22は土師質の壺か壺の底部である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は1～3mm程度の砂粒を多く含む粗い。器壁内面はナデおよびハケ目で整形しているが、外面は磨滅が著しいために調整は不明である。

第46図23～33は土釜の脚部である。色調は白黄色を呈すもの(22, 24, 27, 32, 34)淡赤褐色を呈すもの(25, 30)茶褐色を呈すもの(28, 29)にわかれ、26は黄白色、31は暗灰茶色となる。形は指、ヘラによって調整されており表面はナデまたはヘラによるナデによって調整されている。

34～36は土釜の口縁部の破片である。色調はいずれも白黄色を呈し、口縁部は幅狭の鈎をもち、強く内傾する。34は推定口径23.6cmを計る。口縁部内外面にはヨコナデを施し、体部内面には横方向の強いナデを、外面は、指頭圧痕の上からナデ調整を施している。35・36の体部が内彎気味に立ち上がるのに対して、34の体部はまっすぐに立ち上がっている。35は約1/8の破片で、推定口



径25.0cmを計る。口縁部の内外面はヨコナデを、体部内外面はナデ調整を施している。36は1/16程度の破片であるため、径は不明瞭であるが、推定口径は28.0cmを計る。調整は35と全く同じで、ヨコナデ、ナデが施されている。

第47図37～40は土師質の鉢である。37は1/8程度の破片で、推定口径22.5cmを計る。暗褐色を呈し、胎土は2～5mm程度の砂粒を多く含み粗い。器壁内面および口縁部外面にヨコナデを、それより下方は指頭圧痕の上にナデ調整を施している。口縁端部は外側に丸く肥厚させている。

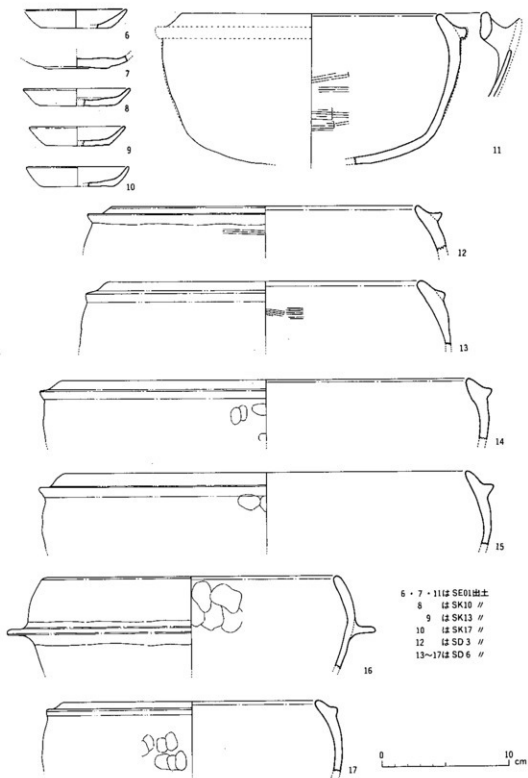
38は口径22.0cm、器高14.1cmを計る。体部は内彎しながら立ち上がり口縁端部の内側を横方向に拡張させている。口縁端部はヨコナデを施し、体部内面は横方向のナデを施している。体部外面にはいちめん指頭圧痕が認められる。色調は白赤色を呈する。

39は口径34.5cm、器高9.9cmを計る。体部は外反しながら立ち上がり口縁部付近で、やや内側に屈曲する。口縁端部は内外両側にわずかに肥厚させている。口縁部の内側の肥厚した部分を削り取ることによって幅約3.5cmの片口を作り出している。器壁内外面ともに横方向のナデにより調整している。体部の外面には、全体に指頭圧痕が残る。色調は淡黄褐色を呈する。

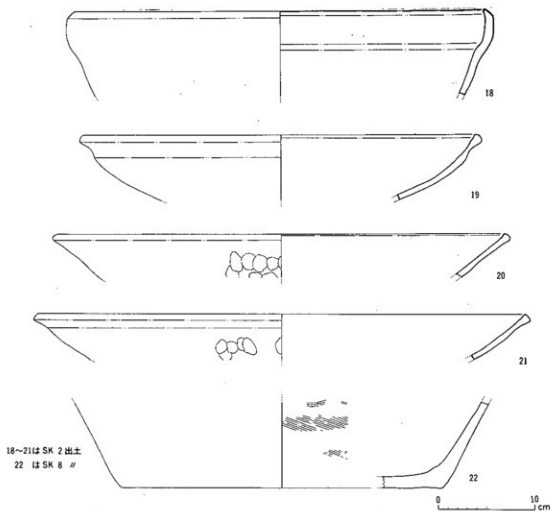
40は口縁部、体部の1部を欠損するが、ほぼ完形に近いもので、口径23.6cm、器高14.3cmを計る。体部はやや内彎気味に立ち上がり口縁部に続く。口縁端部は内側を丸く肥厚させている。39と同様に口縁部の内側に片口を持つが、39の片口が肥厚部分を削り取ったのに対して、40は肥厚部分を下方へ押さえつけることによって作り出している。体部内面は板ナデを施し、それ以外の器壁はナデ調整を施している。体部外面はいちめん指頭圧痕が残る。色調は淡赤白色を呈する。

41は土師質の甕の1/4程度の破片である。推定口径22.1cmを計る。体部から直立する口縁は端部に近づくに従って内側が幅広くなる。口縁端部は特に内側を丸く肥厚させている。器壁内面は横方向のナデが施されているが、その上から指で押さえつけた痕が明瞭に残っている。口縁端部にはヨコナデを器壁外面は横方向のナデを施している。色調は暗黄褐色を呈する。

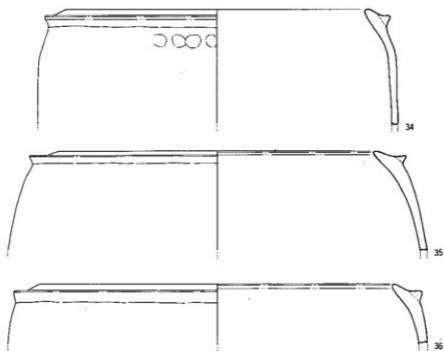
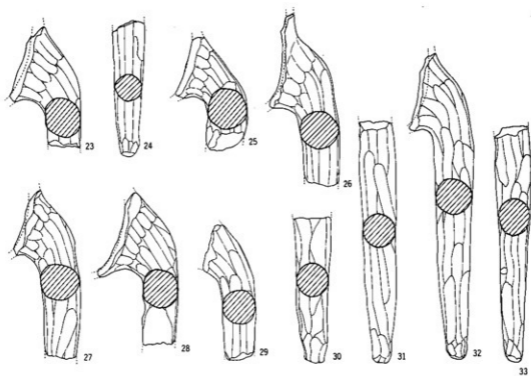
42は器種、大きさともに不明の土師質の土器である。色調は赤褐色を呈し、胎土は1～2mmの砂粒を多く含み粗い。器壁は内外面ともにいいいにナデ調整が施されている。器壁内面の底部および側壁に墨の跡が残る。L字状を呈する断面は、何かで切りとった痕がうかがえる。



第44图 井戸・土坑・溝出土土器実測図



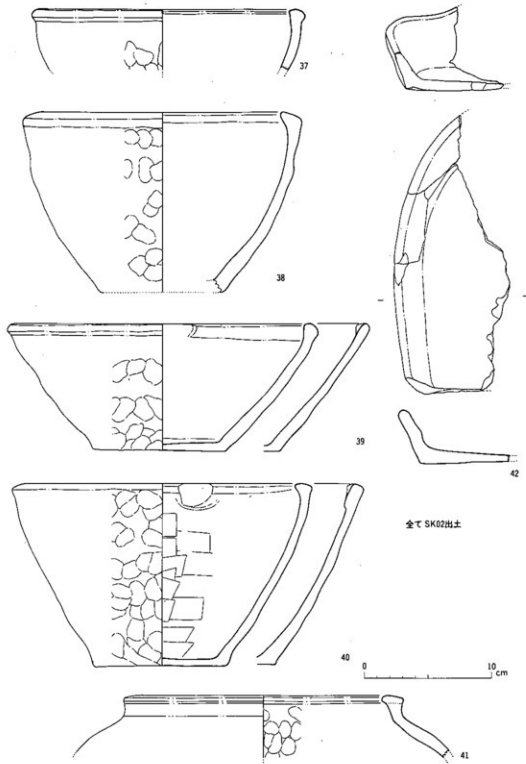
第45図 土坑出土土器実測図



23・24は SE01出土 28・29は SD06出土 31 は SK07出土 35・36は SK11出土  
 25~27は SD04 // 30 は SD07 // 32~34は SK06 //

0 10 cm

第46図 井戸・土坑・溝出土土器実測図



第47図 土坑出土土器実測図

## (2) 備前焼播鉢

第48図1～7, 第49図8～10, 第50図1・2が備前焼の播鉢である。基本的なつくり・調整・色調ともに個体によりわずかな違いがあるものの、ほぼ共通性が認められる。口縁端部の外面の下方を拡張して三角形の張り出しを作り、口縁部は内外面ともにヨコナデを施している。体部内面は全面に条溝があり、外面は削り調整を行っている。色調は赤褐色系のものが多い。

三角形の張り出しは、ほとんどが角ばるが、第48図3, 第49図9, 第50図1は丸味を帯びている。また口縁部のヨコナデにより内外面ともに凹線状の明瞭な溝がつけられているものが多いが、第48図3, 第49図9・10, 第50図1は凹線が明瞭でない。色調でやや紫がかかるものは、第48図1・4・5, 第49図9, 第50図2である。第48図4は内外面ともに暗褐色の釉がかかっている。

底部が遺存するものは第49図8・10, 第50図2の3点である。第49図は放射状に条溝がつけられているが他の2点は規則性がないように思われる。第49図8・10は底部の中心の器壁が薄くなりやや上げ底となっている。第48図2・第49図9は片口を有する。

推定口径, および器高は, それぞれ以下の通りである。第48図1-28.4cm, 2-29.6cm, 3-28.5cm, 4-34.7cm, 5-33.6cm, 6-35.2cm, 7-36.4cm, 第49図8-推定口径23.0cm器高7.4cm, 10-推定口径32.0cm器高12.3cm, 第50図1-29.4cm。

## (3) 瓦

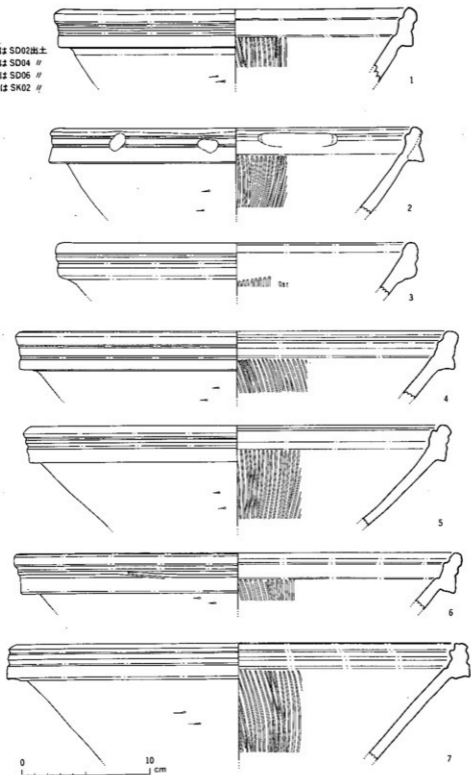
溝・土坑・井戸・包含層より多数の瓦が出土した。ほとんどが破片であった。瓦当の文様が遺存するものを12点図化した。文様より判断して18世紀の半ばから、明治初期にかけてのものが多いと思われる。

第50図3～8は三ツ巴文と連珠文の組み合わせの軒丸瓦である。8の巴文は不明であるが、4が右巻きの巴文である以外は、全て左巻きの巴文である。瓦当径が解るものは3・4で、3は瓦当径12.5cmで外区に10個の珠文を配する。4は瓦当径13.0cmで外区に9個の珠文を配する。3・6が淡灰色の強い色調で光沢がないのに比べて4・5・7・8は黒灰色系で光沢が強い。この差は焼成技法上の違いであり時期差を反映していると考えられる。すなわち光沢を出す焼成技法が新しいものと思われる。5は表面の磨減が著しいが光沢が認められるために、後者にいれたが、おそらく前者と後者の中間に位置するものと思われる。

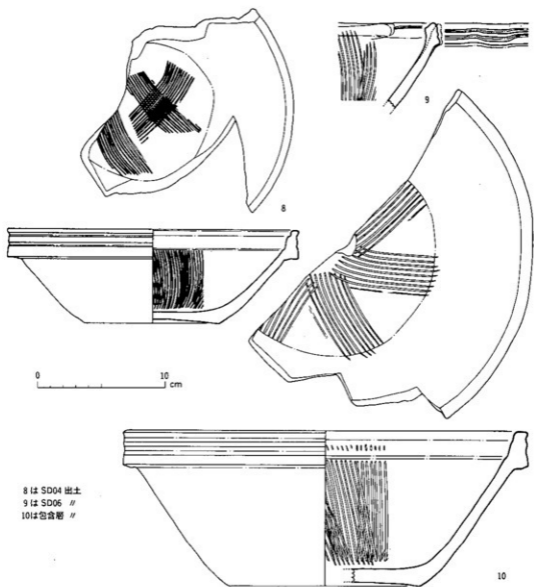
全体的にみて巴文は頭が大きく尾は太く短い。連珠文は大きく上方に肥厚するという傾向を持つが、前者と後者と比較した時、前者の方が巴文の尾は長く、連珠文の上方への肥厚も少ないということがいえる。

9～14は、軒平瓦であるが、瓦当全部が遺存するものはなかった。瓦当文様は全て均整唐草文であるが、9はそれが変形したものと思われる。軒丸瓦と同じく光沢のあるなしで区別すると9・13は光沢が強く10・11・12・14には光沢がない。

- 1・3はSD02出土  
 2・4はSD04 #  
 5・6はSD06 #  
 7はSK02 #

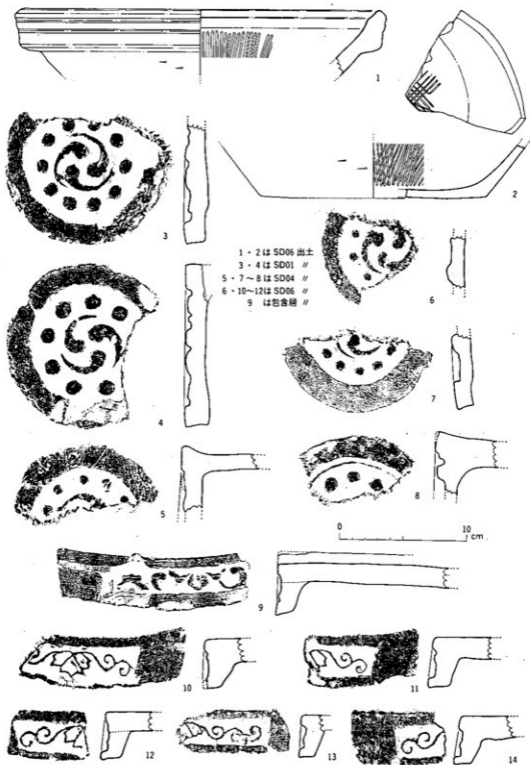


第48図 満・土坑出土土器実測図



第49図 溝・包含層出土土器実測図





第50图 溝・包含層出土土器・瓦実測図

#### (4) 近世陶磁器

上一坊遺跡から出土した近世陶磁器には、陶器の壺・甕、肥前の染付・陶器、瀬戸・美濃系の染付・陶器、関西系の染付・陶器、灯明皿、紅皿などがある。中でも肥前の染付・陶器が多くを占める。以下、陶器、溝出土遺物、土坑出土遺物、包含層出土遺物の順に記述していきたい。

##### 陶器

第51図1は陶器の甕の口縁部である。推定口径20.3cmを計る。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部で内側にゆるく屈曲し、口縁端部は外側に折れ曲がる。器壁内面はヨコナデ調整が施されている。軸は口縁部内面の上方から器壁外面に及んでいる。口縁端部から口縁外面の上方にかけては青白色の釉が、それ以外の部分には茶色に緑色・暗青色が混じる釉が施されている。

2は肥前系の甕である。口径16.5cm、器高16.2cmを計る。器壁内外面ともにヨコナデを施し、ていねいに仕上げている。体部外面の上半部には平行の直線文が認められる。色調は暗茶色で、胎土は堅緻である。

3・4・5は備前焼の灯明皿である。成形手法は同一で底部を回転糸切りした後、体部外面を回転ヘラ削りによって曲線状に整えている。その後、口縁部の外面から器壁内面にかけてヨコナデを施している。その際に3・5はヘラ削りをした上から部分的にヨコナデを施した痕がうかがえる。

3は口径9.8cm、器高1.6cmを計り色調は茶色である。口縁の一部分に煤の付着が認められる。

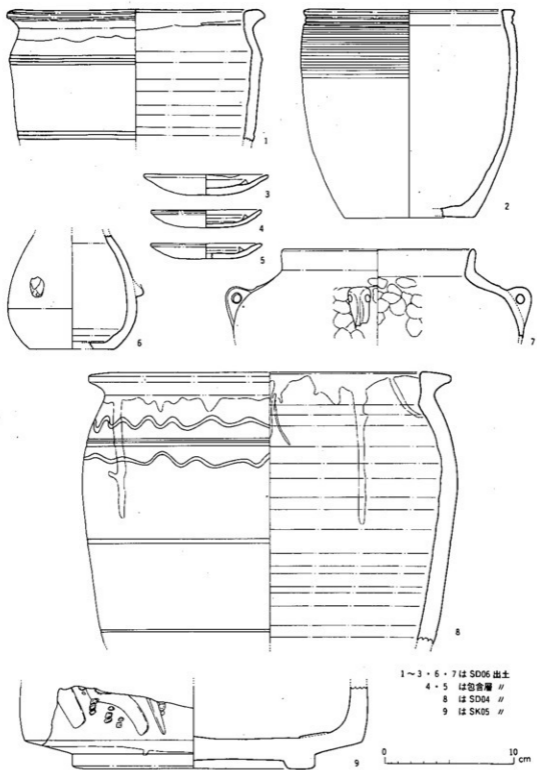
4は口径8.7cm、器高1.4cmを計る。色調は暗茶色である。5は1/4程度の破片で推定口径8.8cm、器高1.2cmを計り、色調は明茶色である。胎土・焼成はいずれも堅緻で良好である。

6は瓶形を呈するが破損部分が多いため器種不明の土器である。体部外面には貼り付けの小突起が1箇所認められるが、小突起の全体の数は不明である。器壁内外面ともにヨコナデ調整が施されて、ていねいに仕上げられている。色調は内面が茶色、外面は暗茶色であるが、体部外面は上方から最大径を持つ位置まで緑色にやや茶色が混じる釉がかかっている。胎土は堅緻で焼成は良好である。

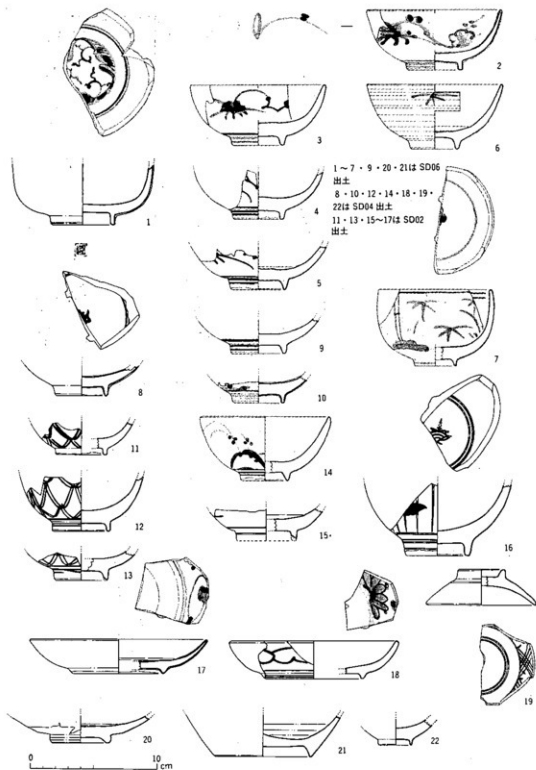
7は推定口径15.4cmを計る壺の口縁部片である。体部上半部は強く内彎しながら立ち上がり、口縁部との境で上方に屈曲し口縁部は直立方向に立ち上がる。体部の上半部には直径約7mmの穿孔のあるつまみが残るが、全体の個数は不明である。口縁部内外面にはヨコナデ調整を施し体部内外面は指頭圧痕が遺存する。胎土は1mm以下の砂粒を多く含む粗い。色調は暗茶褐色を呈する。

8は口径28.6cmを計る甕である。体部下半部は外反しながら上半部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立する。口縁端部の外側を拡張し、平坦面を造り出している。体部外面には凹線状の直線文や波状文が認められる。器壁内外面には茶色と茶色に黒褐色が混じる釉がかかっている。胎土は堅緻で焼成は良好である。

9は底部に幅の広い高台を持つ瀬戸・美濃系の陶器である。色調は淡黄白色を呈し胎土は微砂



第51图 清・土坑・包含層出土陶磁器実測図



第52图 清出土陶磁器实测图

粒をわずかに含み、やや粗い。内面見込み部分には、軸着防止のための砂目が残る。体部外面下半部にはタクキによる文様が認められる。底部は高台も含めて回転削りにより仕上げられている。器壁内面および体部外面・底部の屈曲部から高台にいたる間に緑色を含んだ乳白色の釉が施されている。18世紀～幕末の時期のものと思われる。

#### 溝出土遺物

##### 染付碗

第52図1は青磁染付である。体部は下半部ではほぼ直角に屈曲しやや外反気味に直立しながら立ち上がる。高台は比較的薄い。体部外面から高台の外側面にかけては青味を含んだ淡緑色釉が、高台内面および器壁内面には青味を含んだ白色釉が施されている。高台端部には釉がおよんでいない。内面見込み部分には二本の圏線と文様があり、高台内部には、「満福」の銘が印されている。呉須は青色に発色している。

2・3・4・5・6・9・15は内面見込み部分が蛇の目軸ハギされている碗である。体部は、ほとんどが外彎気味に立ち上がり、底部には比較的幅の広いしっかりした高台が垂直につけられている。2は青味を含んだ白色の釉がかかる。高台端部には釉がおよんでいない。体部外面には梅樹と雪持笹の文様が付されている。呉須の発色は青色を呈する。肥前の染付で18世紀。

3は2と同じく体部外面には雪持笹と梅樹が付されている。呉須の発色は暗青色を呈する。器壁内外面には青味を含んだ灰白色釉が施されているが高台端部にはおよんでいない。肥前の染付で18世紀。

4は内面の釉ハギ部分に砂粒の付着が著しいものである。青味を含んだ灰色釉がかかるが高台端部にはおよんでいない。体部外面の文様は破片であるために不明である。呉須は青色に発色している。肥前の染付で18世紀。

5は緑色を含んだ白色釉が施されている。体部上半部が欠損しているために体部外面の文様の全容は不明であるが、2・3と同じく梅樹と雪持笹が付されていたものと思われる。呉須の発色は緑を含んだ青色である。破損面の一面は茶色を呈し漆継の痕が遺存する。肥前の染付で18世紀。

6は他の碗と比べて体部がやや薄い碗である。体部外面に多く遺存する稜線は回転ヘラ削りのあとと思われる。わずかに緑を含む白色釉がかかるが高台端部にはおよんでいない。体部外面には笹の文様が付されており、呉須の発色は暗緑色を呈する。肥前の染付で18世紀。

9はわずかに茶色を含んだ緑色釉が施されている。高台端部には釉はおよんでいない。体部下半から高台外側面にかけて三本の圏線が付されており、呉須の発色は黒味がかかる緑色を呈している。肥前の染付で18世紀。

15は高台の先端部が破損する。釉は淡灰色を呈し、呉須の発色は悪く灰色味をおびた暗青色を呈する。肥前の染付で18世紀。

7・8は内面見込み部分に五弁花のコンニャク印判のある碗である。7の体部は下半部ではほぼ

直角に彎曲し、やや内彎しながら垂直方向に立ち上がる。高台は比較的薄く小さい。高台端部を除いて器壁内外面には青味を含んだ淡緑色の釉が施されている。体部外面には竹の文様が付されており、呉須は暗青色に発色しているが、五弁花の印判は黒味を帯びた緑色を呈している。肥前の染付で18世紀末。

8は青磁染付である。体部外面から高台外側面にかけては緑色の釉が、高台内面は淡緑色味のかかった白色釉が、器壁内面は青味のかかった白色釉がそれぞれ施されている。内面見込み部分の圏線・五弁花の呉須の発色は暗青色を呈する。肥前の染付で18世紀後半。

10は青味のかかった白色釉が施されている。器壁外面に三本の圏線と文様が付されているが呉須の発色は悪く暗青色を呈する。肥前の染付で18世紀。

11・12・13は二重網目文の碗である。いずれも青味を帯びた白色釉がかかるが高台端部には釉はおよんでいなく、その部分に灰白色の砂粒が多く付着している。呉須の発色ははよく暗青色を呈する。肥前の染付で18世紀。

14は外反しながら立ち上がる体部を持つ碗である。高台端部以外には、わずかに緑のかかった淡灰色の釉が施されている。器壁外面に圏線および文様が付されている。呉須の発色は緑青色の部分と灰色を含んだ青色の部分とがある。肥前の染付で18世紀～1780年代。

16は他の碗と比較して背の高いしっかりした高台を持つ。高台の先端部には釉がおよんでいないが、内・外両側面に砂の付着が著しい。釉の色はわずかに青味がかかった乳白色を呈する。内面見込み部分の文様は、虫を表現したもので、18世紀に特に多い。呉須はわずかに灰色がかかった青色に発色している。肥前の染付で18世紀後半。

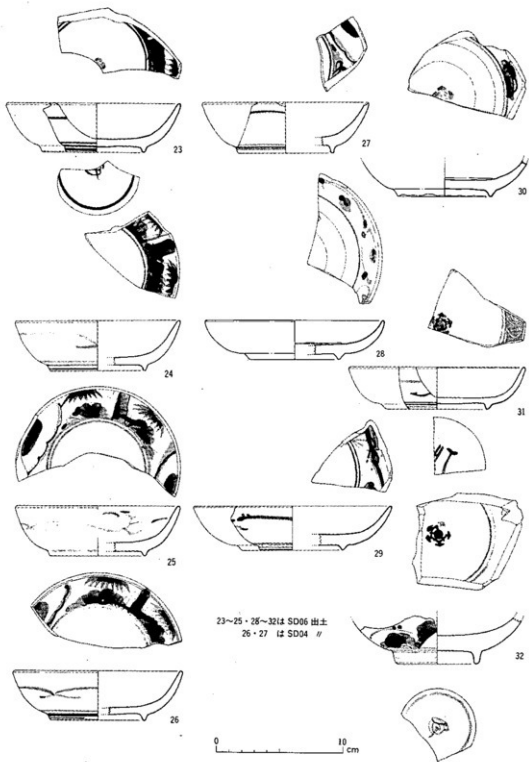
#### 染付皿・その他

第52図17は体部内面に、18は体部外面に蔓草文を持つ皿である。体部はともにやや内彎しながら立ち上がる。17の高台は端部の外側を斜めに削っている。わずかに緑を帯びた白色釉がかかっているが、内面見込み部分は蛇の目軸ハギが行われている。呉須の発色は暗青色を呈する。18はわずかに緑がかかった淡灰色の釉が施されている。呉須は内面が暗青色に外面が緑青色に発色している。ともに肥前の染付で18世紀～1780年代。

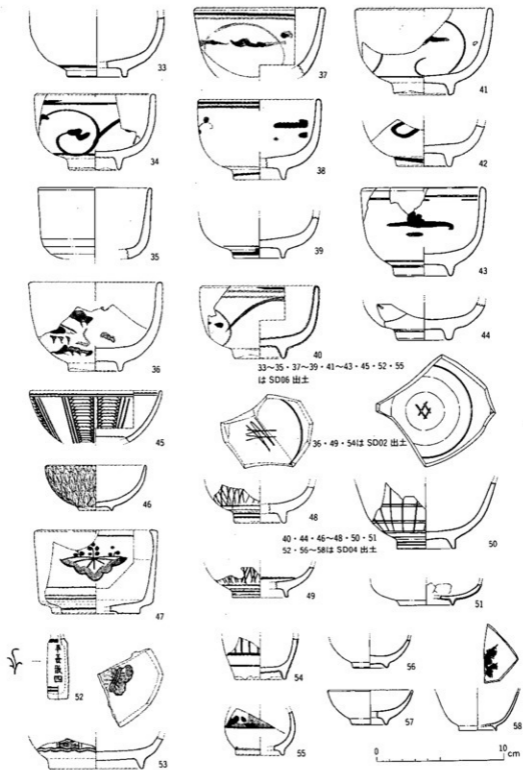
19は青磁染付の蓋である。体部外面および高台外側面には緑色を帯びた灰色釉が、高台内面および器壁内面には淡灰色釉が施されている。内面には二本の圏線と四方禪文が付されているが呉須の発色は悪く、うすい緑青色を呈する。肥前の染付で18世紀。

20は内面見込み部分が蛇の目軸ハギされている小皿である。わずかに青味を含んだ白色釉が施されているが、高台、高台内面には釉がおよんでいない。高台端部から底部と体部の境にかけては、回転削りがなされている。破片であるため白磁か染付であるかは断定できないが白磁の可能性が高い。肥前産で18世紀前半～中葉。

21は高台外側面が体部へと連なる青磁の瓶である。高台端部および器壁内面は無釉であるが器



第53图 清出土陶磁器実測図



第54図 溝出土陶磁器実測図



壁外面には灰色味を帯びた緑色釉がかっている。器壁内面はヨコナデ調整が施されている。肥前産で17世紀後半～18世紀。

22は高台端部以外の部分に灰白色の釉が施されているが、焼成不良のため釉薬はとけていない。体部上半が欠損しているために器種も不明とせざるをえないが、小碗となる可能性もある。肥前産で18世紀。

第53図23～27はいずれも体部内面に竹と雪輪の文様が付されている皿である。器形、釉の色、呉須の発色ともにほぼ同一である。すなわち器形は底部に先細りの高台を付け高台径は広い。体部はやや内彎しながら立ち上がる。釉は高台端部以外の部分に、わずかに緑のかかった淡灰色の釉が施されている。呉須は、おおむね青味を含んだ暗緑色に発色している。

23は内面見込み部分にコンニャク印判による五弁花が、高台内部には「過福」の銘が印されている。23以外は、いずれも底部の中央部分が欠損しているために印判および銘の有無は不明である。肥前の染付で18世紀中葉～後半。

28は高台の断面形がほぼ三角形を呈し、器高が比較的低い皿である。体部は内彎しながら立ち上がる。内面見込み部分は蛇の目軸ハギがおこなわれている。体部内面には蔓草文が付されており呉須は青色に発色している。釉は青味を含んだ白色を呈する。肥前の染付で18世紀～1780年代。

29は28と同様に高台の断面は三角形を呈する。体部内面の文様は扇面が表現されており呉須は暗青色に発色している。釉は高台端部以外に施されており青味を含んだ白色を呈する。高台端部は砂粒の付着が著しい。肥前の染付で18世紀。

30～32はいずれも内面見込み部分に五弁花のコンニャク印判が付されている。30は内面見込み部分が蛇の目軸ハギされ青味を含んだ白色釉が施されている。呉須の発色は五弁花の部分は青色、体部内面の文様は暗青色を呈する。肥前の染付で18世紀～1780年代。

31は他の皿と比較して器壁の薄いものである。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は外反する。内面見込み部分にはコンニャク印判の五弁花が、高台内面には「大明年製」のくずれ銘が付されている。呉須の発色は五弁花および器壁外面のものは暗青色を、体部内面は青色を呈する。釉はわずかに青味を含んだ白色釉が施されている。肥前の染付で18世紀～1780年代。

#### 陶胎染付碗

第54図33～44は肥前産の碗である。磁石が入手しにくいところで染付を意識して作った陶器であるが、胎土は染付にならない、いわゆる陶胎染付である。体部は下半部でほぼ直角に彎曲し、上半部は直立方向もしくは、直立からやや外反気味に立ち上がる。高台端部以外には灰色系の釉が施されカン入が著しい、などの共通の特色を持つ。

釉の色調は大きく三種類にわけられる。灰色釉(33・37) 青味を含んだ灰色釉(34・36・38・39・41・42・44) 緑味を含んだ灰色釉(35・40・43)となる。体部外面には唐草文(34・40・41・44) 山水文(36)などが施されている。呉須の発色は悪いものが多く、暗青色を呈するもの(33・

34・36・38・39・40・44) 灰緑色を呈するもの(37) 緑青色を呈するもの(42・43) 黒味がかった緑青色を呈するもの(41)にわかれる。いずれも18世紀前半～中葉。

#### 染付碗・その他

45は器壁内外面に青味を含んだ白色釉が施された碗である。釉の光沢が強い。破損面の二面には漆継の痕が遺存する。呉須は青色に発色している。肥前の染付で18世紀末～19世紀前半。

46は背の低い細身の高台を持つ小碗である。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部へ向かって器壁は徐々に薄くなる。体部外面の文様は上絵付技法、いわゆる赤絵であるが、絵付された部分の色は遺存せず、文様だけが残っている。白色の釉が高台端部以外に施されている。肥前産で18世紀後半～19世紀前半。

47は蛇の目凹型高台の火入れである。体部は、ほぼ直立に立ち上がり、口縁端部の内側を内方に肥厚させている。器壁外面および体部内面の上方から約2cmの範囲に緑がかった淡灰白色釉が施されている。また底部内面の円周に沿って幅約1.3cmで乳白色の釉がうすく付着している。体部外面には桐の文様が付され、呉須は暗緑青色に発色している。肥前の染付で18世紀中葉～19世紀初頭。

48・49は体部外面に格子状の文様が付された碗である。49は48と比べて細身の高台で、器壁も薄い。ともに青味を帯びた白色釉が施され、呉須は青色に発色している。48の内面見込み部分の文様は、体部外面の格子状の文様の一部を入れたものである。肥前の染付で19世紀初頭～幕末。50は外側にややふんばる高台を持つ碗である。体部は内彎しながら立ち上がるが体部上半から口縁部にかけては、ゆるく外彎する端返り型の碗であると思われる。内面見込み部分は蛇の目軸ハギが行われ、高台端部以外には、わずかに緑がかった灰白色の釉が施されている。体部外面には格子文様が内面見込み部分にはその一部が付されている。呉須の発色は外面が緑青色、内面が青緑色を呈する。

51は器壁外面には、わずかに緑色味をもった釉が施されているが、内面は無釉で全体に指頭圧痕が残るものである。饅頭成形でなく型で作る変形の水滴である可能性が高い。上下別々に作って接合したものであるが接合面ではがれたと思われる。肥前の染付か白磁。

52は用途(器種)不明である。器壁外面には青味がかった白色釉が施されるが、底部には及んでいない。文様は「〇〇散四」の四字と草文が施されており、呉須は藍色に発色している。中国産で18世紀～19世紀前半。

53は鉢の底部である。内面見込み部分および体部外面に文様が施されており、呉須の発色は青色である。高台端部以外には、わずかに青味がかった白色釉が施されており、光沢が強い。肥前の染付で18世紀末～幕末。

54・55は小瓶である。54は高台外側面が体部につながる器形であるが、55は体部が強く彎曲するため高台と体部の区別が明瞭である。ともに器壁内面には釉はおよんでなく丁寧なヨコナ

デ調整が施されている。54は青味をおびた灰白色の釉が55は青味を帯びた白色の釉がかかっている。呉須の発色は54が青色、55が藍色を呈す。肥前の染付で18世紀後半～19世紀前半。

56・57は紅皿のような用途を持つ小碗状の白磁である。56はわずかに緑色味をもった白色釉が、57は乳白色釉が施されている。肥前産で18世紀後半～幕末。

58は器壁が極めて薄い小杯である。内面見込み部分には水草文様が付されており呉須は青色に発色している。釉は白色を呈する。肥前の染付で18世紀後半～幕末。

## 陶器

陶器は唐津系のもの美濃・瀬戸系のもの関西系のもので出土している。この順序に従って記述していきたい。器種は碗、皿、鉢などである。

第55図59・62は唐津系刷毛目の中皿で、内面見込み部分はともに蛇の目釉ハギが行なわれている。高台および高台内面、体部下下部には釉は施されていない、回転ヘラ削りの痕をとどめる。色調は59は淡緑黄色、60は淡黄色を呈する。59は体部がやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は横方向に屈曲する。口縁部の一部を下方に押さえることにより片口を作り出していると思われる。底部は中心にいくにしたがって器壁は薄くなる。やや内傾する背の高い、逆台形状の高台を持つ。高台の端部付近には、灰白色の細い砂粒が帯状に付着している。体部外面の上半から、器壁内面の釉は鈍い褐色と淡灰緑色を呈し、体部外面の下半部の釉は緑色味をわずかに含んだ褐色を呈する。18世紀前半～中葉。

62は体部がゆるやかに内彎しながら立ち上がり口縁部でやや外反する。細身で背の高い高台が直立についている。体部外面および体部内面下半部は褐色混じりの灰緑色釉が、体部内面上半部はわずかに青味を含んだ淡灰緑色釉が施されている。18世紀前半～中葉。

60は唐津系の刷毛目の碗である。体部は下半部で強く彎曲し上半部は直立に立ち上がる器形であると思われる。ほぼ直立で先細りの高台を持つ。高台端部以外に、暗灰緑色と乳白色を呈する釉が施されている。18世紀前半～中葉。

61は唐津系の刷毛目の鉢であろう。内面見込み部分は蛇の目釉ハギが行なわれているが、不十分なために同心円状の刷毛目の痕が認められる。内面見込み部分および高台端部の両側面には黄灰色の細い砂が帯状に付着している。体部下下部から高台の内面にかけては釉はおよんでいなく回転ヘラ削りの痕をとどめる。色調は暗赤色を呈する。体部外面下半部には暗灰茶褐色の釉が、器壁内面は鈍い暗灰茶褐色と茶色がかかった乳白色の釉が施されている。18世紀。

63は唐津系刷毛目の片口の鉢か水甕状をなすものの底部である。逆台形状の高台を持ち、高台内面から体部下下部にかけては釉がおよんでいなく回転ヘラ削りの痕が認められる。色調は、わずかに灰色を含む茶褐色を呈する。内面見込み部分には乳白色と灰褐色の釉が渦巻状に施されている。体部内面の釉は灰緑色を体部外面下半部の釉は暗灰褐色を呈する。18世紀。

64～66は美濃・瀬戸系の碗である。背の低いやや外にふんばる高台を持つ。底部は下半部で強

く内彎し直立気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめられている。体部外面中央部には凹線状の溝が64は5条、65・66は4条施されている。高台端部以外に釉がかかるが、凹線状の溝が境となり釉色が異なっている。64は器壁内面から体部上半部にかけては、緑色味のある灰白色の釉が、それより下半部は黒緑色と淡緑色を呈する釉が施されている。65は黄緑色気味の白色釉が上半部に、黄緑色釉とやや黒味を帯びた緑色釉が下半部に施されている。66はやや茶色を帯びた灰白色釉が上半部に、緑を帯びた黒色釉と明茶色釉が下半部に施されている。18世紀頃。

第56図67は美濃・瀬戸系の馬の目皿である。幅の広い低い高台を持ち体部は内彎しながら立ち上がる。内面見込み部分には釉着防止の粘土が遺存する。高台内面から体部下半部にかけては釉はおよんでいない。釉色は文様の部分が暗灰緑色と茶褐色を呈し、それ以外は乳白色を呈する。18世紀。

68は美濃・瀬戸系の呉須絵の陶磁器碗である。体部外面には圏線および文様が呉須により付されているが、明瞭ではない。呉須は青色に発色している。高台端部以外には、緑のかかった乳白色釉が施されている。18世紀～19世紀初頭。

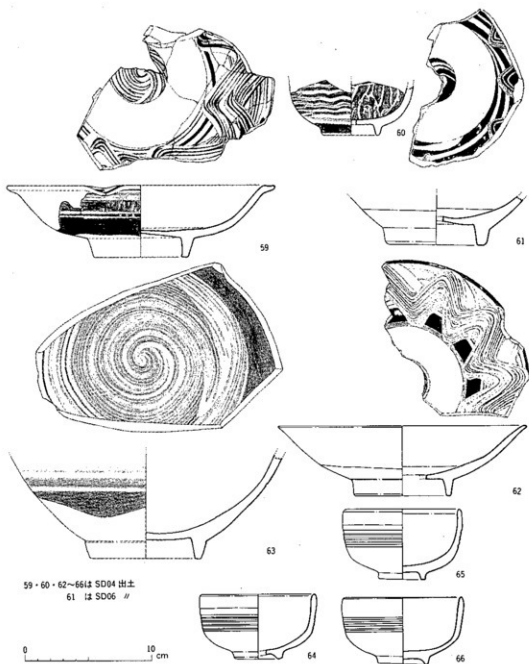
69～76は関西系の陶磁器の碗である。いずれも、低く小さい高台を持ち、高台および高台内面には釉はおよんでいない。70・71の体部外面には鉄絵が施されている。69は高台から底部と体部の境界にかけて平坦な面を削り出している。72は焼成不良のため釉が十分にとけていないと思われる。文様の部分はうすい緑と赤色をした部分がわずかに残るが、上絵付された部分のほとんどが、剥落したものと思われる。釉の色は黄色系のもの(69・72・73・74)、灰緑黄色系のもの(70・71)、灰青色系のもの(75・76)に大別される。69は18世紀中葉～19世紀前半、70～76は18世紀頃。

81は関西系の土鍋の蓋であろう。口縁部は横方向に強く拡張され、端部に平坦面を作り出しヨコナデを施している。体部外面には濃い茶色と薄い茶色の釉が刷毛により施されておりその上から白色の文様が上絵付されている。体部内面には部分的に青味がかかる黄緑色の釉が施されている。18世紀頃。

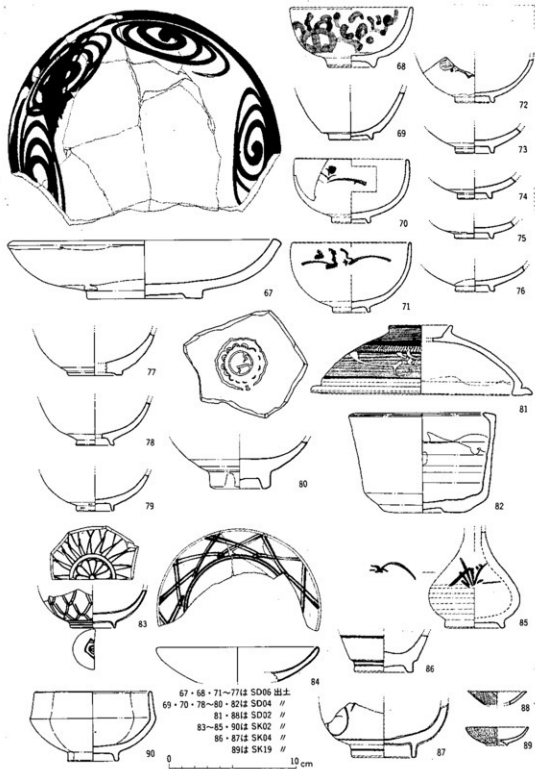
77～80は産地・時期ともに不明瞭な碗である。77は背の低い外にふんばる高台を持つ。器壁内面にはやや青味がかかる灰色釉が施されているが、体部外面下半部まではおよんでいない。胎土は黄灰褐色を呈し、やや粗い。

78～80は青磁碗の底部である。78・79は細身に小さい高台を持ち、高台内面から体部下半にかけては釉はおよんでいない。ともに淡灰緑色の釉が施されている。高台のつき方、釉のかかり方からおそらく関西系のもので、時期も18世紀頃になるとと思われる。80は断面長方形のしっかりした高台がつく。灰色がかかった緑色の釉が施されているが、高台の端部、内面には釉はおよんでいない。内面見込み部分には文様が認められる。

82は肥前系の青磁の火入れだと思われる。蛇の目凹形高台を持ち口縁端部は内側に強く拡張さ



第55图 清出土陶磁器实测图



第56图 清·土坑出土陶磁器实测图

れている。内面見込み部分には、蛇の目状に砂粒の付着が認められる。おそらく小さい製品をいれて同時に焼いたものと考えられる。淡灰緑色の釉が施されているが、体部内面は上半部までしかおよんでいない。18世紀中葉～19世紀初頭頃。

#### 土坑出土遺物

第56図83は染付の碗である。細身の高台を持つ。体部外面には二重網目文が、器壁内面にも圏線と文様が付されている。高台内部には「渦福」の銘が付されており、呉須はやや灰色を帯びた青色に発色している。高台端部以外には、わずかに青味を帯びた白色釉が施されている。肥前の染付で18世紀～1780年代。

84は染付の皿である。体部内面には二重線の格子状の文様が付されており呉須の発色は灰青緑色を呈する。釉は青味のかかった白色釉が施されている。肥前の染付で18世紀。

85は高台付の瓶である。高台端部以外の器壁外面には、わずかに緑を帯びた白色釉が施されている。器壁内面には釉がおよんでいない。体部上半部に文様が付されており呉須は灰色気味の暗青色に発色している。肥前の染付で18世紀～19世紀前半。

86は瓶の底部である。長方形のしっかりした高台を持つ。高台からは体部と底部の境にかけて狭い平坦面を作り出している。器壁外面には、青味を帯びた白色の釉が施されているが高台端部は無釉である。高台外側面および体部下半部には圏線が付されており呉須は暗青色に発色している。肥前の染付で17世紀末～18世紀中葉。

87は陶胎染付の碗である。背の高い長方形の高台がほぼ直立につく。体部は下半部で強く彎曲し垂直に立ち上がる。釉は高台端部以外に施され灰色気味の淡褐色釉とわずかに緑を含む淡灰色釉がまだらに施されている。器壁外面には圏線と文様が付されており呉須は茶色に発色している。肥前産で18世紀前半～中葉。

88・89は紅皿の破片である。ともに口縁端部を平坦に作っているが、88は外側に向かって平坦面を拡張させている。器壁外面は無釉である。器壁内面には88が薄い緑を含む白色釉が、89は白色釉がそれぞれ施されている。

90は陶器の碗である。内彎する体部が中央部で屈曲し上方に向かってわずかに内傾しながら立ち上がる。高台端部以外の器壁内外面の半分には茶色の釉が施され、半分には緑のかかった透明の釉が施されている。おそらく美濃・瀬戸系のもので18世紀以降と思われる。

#### 包含層出土遺物

第57図1は青磁染付の碗である。器壁外面には、淡緑色を含む白色釉が、内面には青味を帯びた白色釉が施されている。高台端部は無釉である。内面見込み部分にはコンニャク印判による五弁花および圏線が付されている。呉須は暗青色に発色している。肥前の染付で18世紀中葉～後半。

2は、皿の底部であろう。器壁内外面ともにわずかに緑色を帯びた灰白色釉が施されている。内面にはコンニャク印判による五弁花が外面には「渦福」の銘が付されている。呉須の発色は暗

緑色を呈する。肥前の染付で18世紀中葉～後半。

3は蛇の目凹形高台の皿である。釉ハギがなされた部分には、細い砂粒の付着が認められる。体部外面および、器壁内面に文様および圏線が付されており呉須の発色はおおむね青色を呈するが、部分的には黒味を帯びた青色を呈する個所もある。肥前の染付で18世紀中葉～後半。

4は蓋付鉢の口縁部片である。口縁端部には釉がおよんでいない。器壁内外面ともにわずかに青味を含んだ白色釉が施されている。体部外面には圏線および文様が付されており、呉須は青色に発色している。肥前の染付で18世紀～19世紀前半。

5は碗の底部である。内面見込み部分には「寿」のくずし字が体部外面には圏線および文様が付されている。内面の「寿」字の呉須は暗青色に、外面の文様は暗青色と緑青色に発色している。釉は高台端部以外に施され、やや青味を帯びた白色を呈する。肥前の染付で18世紀末～幕末。

6は小杯である。高台の外側面が体部につながる器形を有する。高台端部は無釉で器壁内外面にはわずかに青味がかつた白色釉が施されている。肥前産で18世紀後半～幕末。

7は碗の底部片と思われる。内面見込み部分には船と思われる文様が施され、呉須は藍色に発色している。器壁内外面ともに、わずかに青味がかる白色釉が施されている。肥前の染付で明治時代。

8は碗の口縁部片である。体部外面にはコンニャク印判による文様が施されており、呉須は灰緑色に発色している。器壁内外面ともに淡灰色釉が施されている。肥前の染付で18世紀前半～中葉。

9は口縁部が端返り型を呈する碗の底部片である。体部外面および内面見込み部分に圏線・文様が付されており呉須は青色に発色している。高台端部以外にわずかに青味を帯びた白色釉が施されている。肥前の染付で19世紀初頭～幕末。

10は碗の底部片である。細身でやや外にふんばる高台を持つ。高台端部以外にはわずかに青味を含んだ白色釉が施されている。器壁内外面に圏線・文様が付され、呉須の発色は青色を呈する。美濃・瀬戸系の染付で幕末～明治時代。

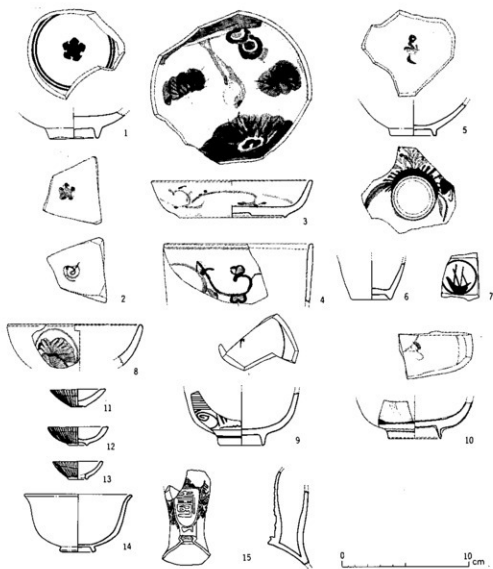
11～13は紅皿である。いずれも小さい高台を持ち、口縁端部に平端面を作り出し体部外面に糸溝を施している。釉は器壁内面から体部上半部に施されている。釉色は11・13が、わずかに緑色味を帯びた白色を呈し、12が白灰色を呈する。

14は陶器の碗である。断面が長形状の外にふんばる高台を持つ。器壁は薄く作っている。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部付近で屈曲し外反する。釉は高台および高台内面、体部下半部にはおよんでいない。淡黄緑色の釉が施されているが、カン入部分は暗青色を呈している。関西系で18世紀以降。

15は蓋付の鍋の口縁部片に把手がついたものである。鍋の内面には灰青緑色の釉が施され口縁部には釉がおよんでいない。把手の上半部には「寿」の字と文様が造り出されているが全体的な



調整は指でおさえた程度で粗雑な造りである。色調は赤茶色を呈する。関西系で18世紀以降。



第57図 包含層出土陶磁器実測図

## (5) 木製品

上一坊遺跡から出土した木製品は、柱根・木製椀・用途不明の木片などである。柱根が中世のビットより出土した以外は、いずれも近世の溝・土坑より出土したものである。用途不明の木片は細片が多かったため図化しなかった。

### 柱 根

取り上げることのできた柱根は、わずかに1例だけであった。第58図1は現存長22.8cm、断面の最大幅は9.7cmを計る。腐食が著しいために断面形の正確な形状、表面の調整などは不明とせざるを得ない。

### 木製椀

2～5は漆塗りされた木製品である。2～4はSD04より、5はSK02より出土した。2は断面が三角形状で外にふんばる高台を持つ。内面には赤漆だけが施されているが、体部外面から高台外側面にかけては黒漆を塗った上から赤漆を施している。高台内面は黒漆だけが施されている。

3は高台の先端部が欠損している。体部外面の下半部には面を整形した際の調整痕がわずかに遺存する。内外面ともに黒漆の上に赤漆が施されている。

4・5はともに高台を欠損するが、器形、大きさともにほぼ同一と思われる椀である。体部は下半部で強く彎曲し口縁部は直立方向に立ち上がる。内面は黒漆の上に赤漆が施されており外面は黒漆だけが施されている。

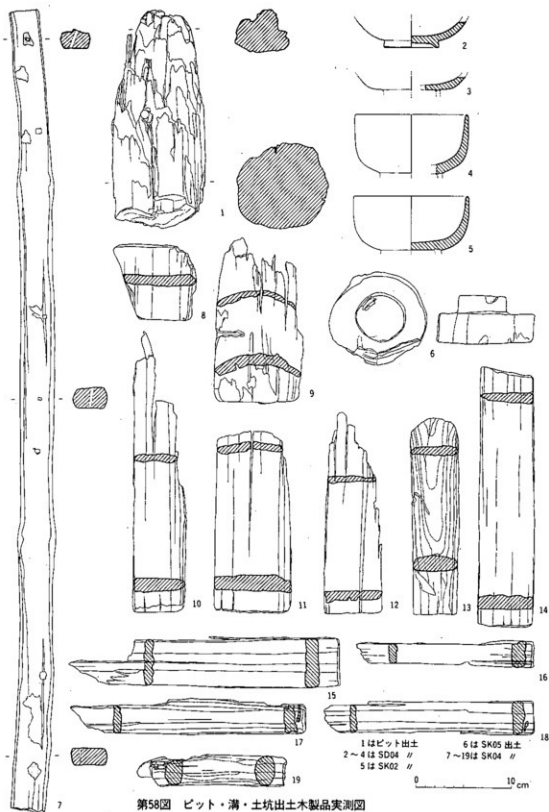
### 用途不明木製品

6は断面形が凸字形を呈する。上段部の直径が5.0cm、下段部の直径が10.2cmを計る円形をした木片である。高さは5.2cmを計る。下段の外周に自然木の外形をとどめる以外は、すべて加工面である。下段の斜面部には、ノミ状の工具痕が遺存することより、下段部をさらに加工して製品を作る過程の未製品であると思われる。SK05より出土した。

7～19はSK04より出土した木製加工品である。SK04からは竹製の箍が検出されていることより桶の一部分を構成するもので、つかい棒と側板であると思われる。

7はつかい棒と思われるもので長さ84.6cm、幅3.5cm、厚さ2.3cmを計る。上下両面に鉄製の釘および釘がうたれた痕が7か所認められる。

8～19は側板と思われる木製加工品である。ほとんどが長方形に加工されている。もっとも広い幅を持つものが9で9.1cm、狭い幅のものが16で2.5cmを計る。もっとも厚みのあるものが19で2.2cm、うすいものが12で0.5cmとなる。いずれも腐食が進んでいるために整形時の調整などは不明とせざるをえない。



第58図 ビット・溝・土坑出土木製品実測図

## (6) 石器

石器は、サヌカイト製の石鏃、石包丁、スクレイパー、調整痕のある剥片が出土しているが調査区全域で8点と極めて少ない。これ以外に砥石、凹み石などが出土している。砥石、凹み石が中世のピットより検出されたものが多いのに対して、サヌカイト製の石器は中・近世の遺物包含層から検出されたものが多い。

### 石 鏃

第59図2～5はサヌカイト製の石鏃である。2は、ロケット状を呈し凹基式の石鏃である。一面の中央部には剝離面が残るが側辺部は両面ともに細かい調整が施されている。長さ3.5cm、幅1.1cm、厚さ3.5mmを計る。

3・4は二等辺三角形状を呈する平基式の石鏃である。ともに先端部をわずかに欠損する。3は現存長は2.4cm、幅1.9cm、厚さ5.0mmを計る。側辺部は両面ともに細かい調整が施されている。

4は長さ1.4cm、幅1.3cm、厚さ2.5mmを計る。1側辺と基部は両面より細かい調整を施しているが、1側辺の調整は比較的複雑である。1面中央部には剝離面が大きく残る。

5は基部が深い抉りをもつ二等辺三角形状の石鏃である。逆刺部の一方と先端部を欠損する。逆刺が欠損している側辺の刃部の調整は粗い。現存長は1.3cm、幅1.2cm、厚さ2.2mmを計る。

### 石包丁

第60図8・9は側辺に抉りを持つ石包丁である。ともに中央部に剝離面を残し刃部は両面より調整を施している。側辺は抉りの部分のみ調整を行なっている。8は現存長7.7cm、幅5.9cm、厚さ10.0mm、9は現存長4.3cm、幅5.6cm、厚さ9.0mmを計る。

### スクレイパー

第61図12～14はスクレイパーである。12は一面に自然石の外形をとどめる。長側辺の二辺が刃部として造り出されているが、調整は比較的粗い。長さ5.1cm、幅3.2cm、厚さ9.0mmを計る。

13は、1側面に折れた痕跡が認められる。彎曲する側辺を刃部としている。刃部は一面よりの調整は細かいが一面の調整は粗い。現存長3.4cm、幅4.5cm、厚さ11.0mmを計る。

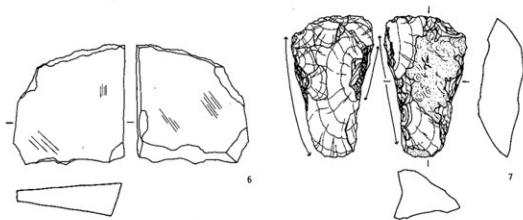
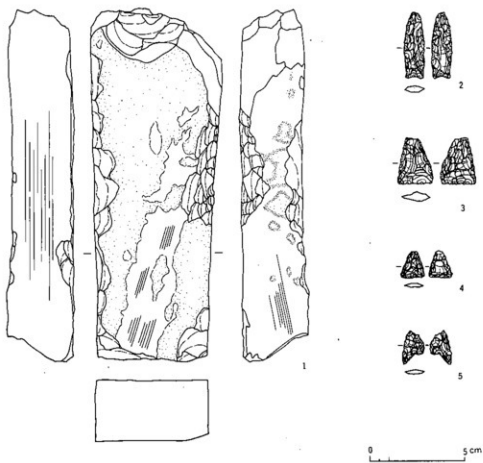
14は2側辺に両面より調整を施して刃部としているスクレイパーである。刃部は鋭く造り出されている。長さ6.5cm、幅4.5cm、厚さ16.5mmを計る。

### 調整痕のある剥片

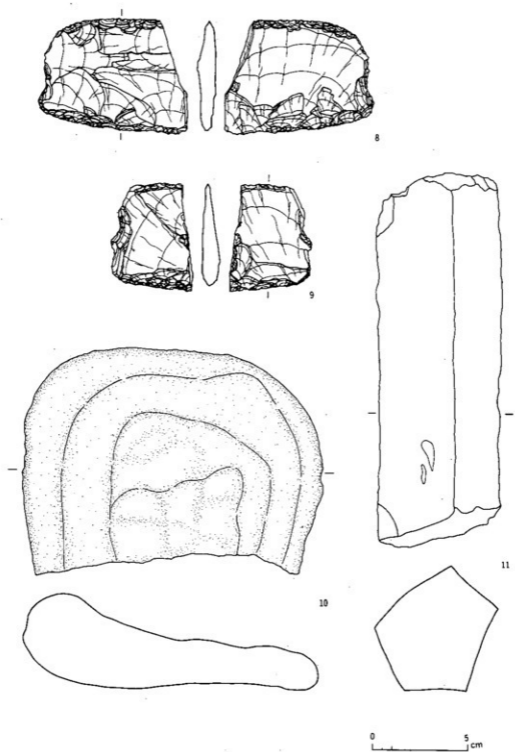
第59図7は長さ7.5cm、幅4.4cm、厚さ26.5mmを計る剥片である。一面には自然石の外形をとどめ、どの面にも剝離面が広く残る。長側辺の3辺に調整を施している。3辺ともにエッジがつぶれていることより、刃部として使用した可能性もある。

### 砥 石

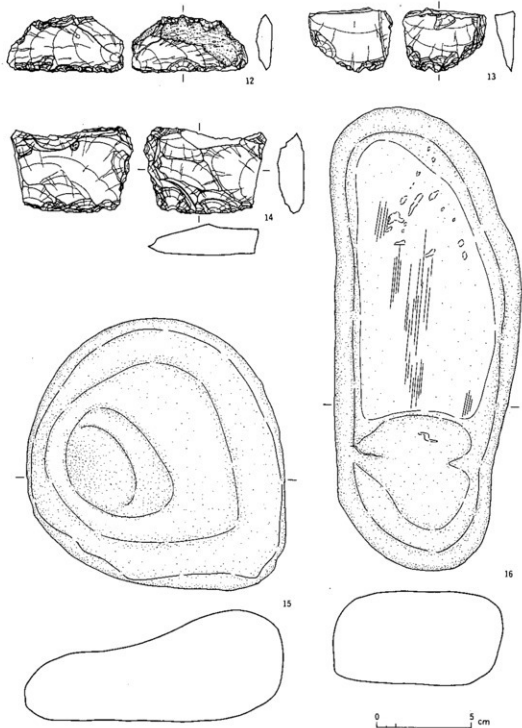
第59図1・6と第61図16は砥石である。1は断面が長方形状を呈する。2側面を砥石として使用している痕がうかがえる。材質は安山岩である。6は上下両面および1側面を砥石として使用



第59图 石器实测图(1)



第60图 石器 实测图(2)



第61图 石器 实测图 (3)

している。軟質の花崗岩であると思われる。16は火をうけたためか全面が煤のために黒灰色を呈する砂岩である。一面および1側面を砥石として使用している。

#### 凹み石・その他

第60図10、第61図15は一面に広い凹みが認められる。ともに砂岩である。煤が付着しているために10は黒色を15は黒灰色を呈している。10は凹み面およびその裏側の面に石の表面が剝離している痕が多く認められる。15は裏面だけに表面剝離の痕がわずかに残る。

第60図11は断面が五角形状を呈する。5側面ともに直線状に切られた可能性が高い。材質は凝灰岩と思われる。

#### (7) 鉄器・キセル

鉄器は鉄斧、鉄先、鉄釘、用途不明の鉄器などである。量は少ないが井戸・ピット・溝・包含層からそれぞれ出土している。キセルは近世の溝から2点出土した。

##### 鉄斧

第62図1は鉄斧である。全面にわたって錆化が進行しているために表面の剝落が著しいが原形は明瞭である。長さ19.0cm、頭部幅3.3cmを計る。頭部に近い所に4.3cm×1.8cmの大きさの秘穴が穿たれている。

##### 鉄先

2は鉄先だと思われる。欠損している部分が多いため原形はとどめないが推定幅13.0cmを計る。厚さは約2mmで薄く加工されている。下面を平端に上面は刃先からゆるやかに彎曲させている。

##### 鉄釘

5～7は鉄釘である。いずれも断面形は方形を呈する。頭部を片方だけ、約90°折り曲げることにより平端面を作り出し先端部は欠損しているものの鋭角に作り出しているものと思われる。現存長は5-6.4cm、6-3.0cm、7-5.8cmを計る。

##### 用途不明鉄器

3は10.0cm×5.7cm大の長方形の鉄器である。幅は5.0mmと薄い。中央に直径1.5cmの円孔が穿たれている。

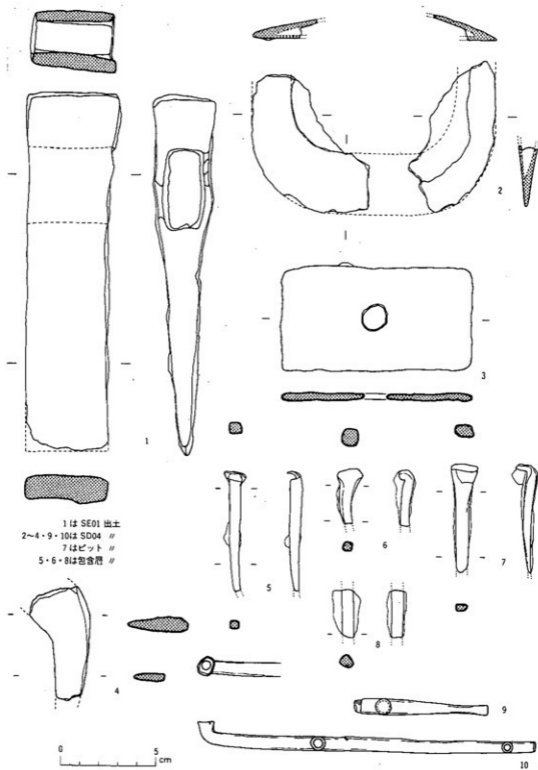
4は現存長6.1cmを計る。上下両方ともに欠損しているので原形は不明とせざるをえない。断面形は一方を鋭角に一方を平坦に作り出している。刃部を持つ鉄器であると思われる。

8は現存長2.5cmを計る。錆の付着が著しいために原形は不明である。鉄釘の上下が欠損したものであると思われるが断定はできない。

##### キセル

9はキセルの吸口である。接合部には木製の管の破片が遺存する。肩部からゆるやかに彎曲しながら細くなり吸口先端でやや拡張する。1枚の銅板を加工して作られている。





第62図 鉄製品・キセル実測図

10は火皿から吸口先端まで1枚の銅板で作られているキセルである。火皿は逆台形状を呈する。首部から吸口にかけてやや細くなる程度でほぼ同じ太さである。長さ17.9cm、断面の最大幅7.5mmを計る。

(8) 銅 銭

銅銭は全部で8点出土した。そのうち四字とも判読できるものは第63図1の「淳化元寶」1点だけであった。2は「○宋元寶」、3は「元豐○○」、4は「嘉○通○」、6は「○○○寶」と部分的に判読できる。5・7は判読不明である。1点は細片であるために、拓本はとれなかった。



第63図 銅銭拓影

#### 4. ま と め

上一坊遺跡で検出した遺構では、中世のピット群、建物群が目される。これらの遺構は出土遺物より中世後半の時期が与えられる。本文では24棟の建物遺構について記述したが、建物遺構のほとんどが、発掘の途中で確認したのではなく、後に図面上で柱穴の並びを考えたものである。中世後半の住居の形態については、不明な部分が多い。図面上で建物を復原するにあたっては、直線上に柱穴が位置する、直交する方向に対応する柱穴の並びがあるかどうかを念頭においた。

24棟の建物遺構は、建物の規模、柱穴の大きさ、柱間の長さなどについては、ほとんど共通性がない。1棟の建物の内でも梁間、桁行の間数が同じでないものや、柱間の長さに大きな差があるものが多い。また同じ柱穴の並びを共有する建物もある。本文中でも記述したように24棟の建物遺構は、建物となる可能性があるということで、中世後半の時期に存在した建物と同一でないということを再度確認しておきたい。

これらの建物遺構の共通した特色としては2点あげられる。①主軸方位がほぼN30°Wを示す。②細い溝に限定された建物である。の2点である。N30°Wの方位についてであるが、丸亀・普通寺平野に遺存すると言われる条里制の方位に一致する。建物遺構の主軸方位にとどまらず、上一坊遺跡で検出した溝（近世の溝状遺構も含む）は全てほぼN30°W、あるいは、それに直交する主軸方位を持つ。溝状遺構は、集落を画するもの、1棟の建物遺構を画するもの、雨落ち溝、排水溝などの可能性が考えられる。また、柱穴・ピットから出土する遺物は、土師質の小皿・土釜・土鍋・土鍋・摺鉢などの日用雑器が多い。そのことにより建物群は一般民衆の住居址であると考えられる。

ここで普通寺市内で中世後半の一般民衆の集落址と思われる遺構が検出されている遺跡に目を向けてみたい。矢ノ塚遺跡と中村遺跡が上げられる。

矢ノ塚遺跡は上一坊遺跡から西へ約500mに位置する。59年度に調査された南部地区からは菜掘りの井戸2基、建物の柱穴と考えられる多数のピット群、建物遺構を限定すると思われる浅い溝状遺構などを検出している。出土した土器は、土師質の小皿・土釜・土鍋などの日用雑器類が中心で、磁器類・瓦器類は殆んど含まれていない。

上一坊遺跡と同様に多数のピットが検出されたために発掘の途中で確認した建物遺構は3棟だけである。現在整理中であるために、建物遺構の総数は不明であるが、検出されたピットの数からして、かなりの建物遺構が存在した可能性が高い。

ピット群の中をほぼN30°Wの主軸方位を持つ数条の細い溝が縦横無尽に走る。確認されている3棟の建物遺構の主軸方位はほぼN30°Wであり、ピットの並びもおおむねこの方位で直線上に並ぶ。溝状遺構と建物遺構・ピット群の関係は強いと言える。

中村遺跡は上一坊遺跡より東へ約1kmの位置にある。検出された遺構・遺物は上一坊遺跡・矢ノ塚遺跡とほぼ同様と考えてよい。

上一坊遺跡を含めて列挙した3遺跡の共通点より中世後半の集落址を掘る際の大きな目安的なものを上げることができる。①条里の方向に注目する。(普通寺・丸亀平野ではN30°W)②細い溝と建物の関連に注目する。ということであろう。3遺跡の発掘成果から言えるこの2点をプラス面とすると、3遺跡の発掘成果を併わせても解明できないマイナス面の方がはるかに多いと言える。今後解決していかなければならない課題として列挙しておきたい。

① 建物を構成する柱穴よりも、はるかに数が多いピットをどう理解するか。

棚列状遺構などで解決できるピットはある。それ以外のピットは建て替えということと通常理解してきた。建て替えてあれば当然、建物遺構の数は増えるので、ピットの数はず減るはずである。

② 1棟の建物は通常どの程度の規模を持つか。

③ 建物の間取りは通常どうなるのか。

建物の規模が拡大すれば当然、建物を支える柱が増えるはずである。どの程度の規模に拡大した時、支えの柱が必要となるのか。

④ 住居には、どのような附属の建築物があり、その規模はどの程度か。

一般民衆の家屋には、道具小屋とか家畜の小屋があったと考えられる。それがどの程度の規模を持つのか。これらの小屋的な建物は必ずしも家屋としての建物と同一の主軸方位を持つ必要はないと考える。そうすると①にあげたことは、ある程度は解決できる。

①～④までをここでは中世後半の一般民衆の集落を発掘する際の課題としておきたい。必ずしも考古学だけで解決できるものとは考えないが、今後、平野部の発掘がさらに増えていく過程で研究されていかなければならないことであろう。

次に上一坊遺跡の成果として近世後半の溝条遺構を中心として出土した近世陶磁器が上げられる。出土した遺物は肥前系の陶磁器が多かった。時期は18世紀代のものが中心となる。蛇の目釉ハギの皿・鉢が多いことより大量生産された製品である。

香川県内においては、今までに近世の陶磁器がまとまって報告された例はない。肥前系の陶磁器の流通を知る上でも貴重な資料と言えるだろう。

また最近では高松城の調査、一の谷遺跡群などでまとまった近世陶磁器が出土している。今後平野部の発掘が増えるにともなって近世陶磁器の出土も増えていくことが予想される。県内における近世陶磁器の研究を進めていく上での一つの指標になればと考える。

圖 版





善通寺地区航空写真

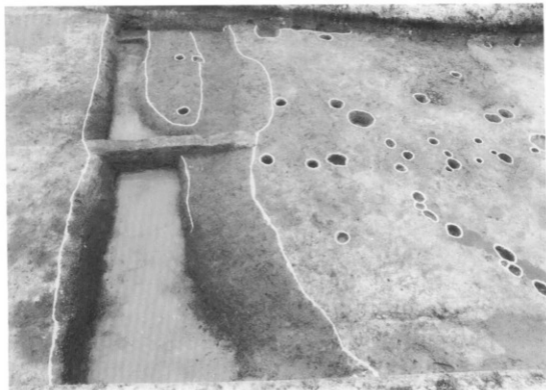


(1) 自然河川 (北から)



(2) 自然河川堆積状況 (南壁)





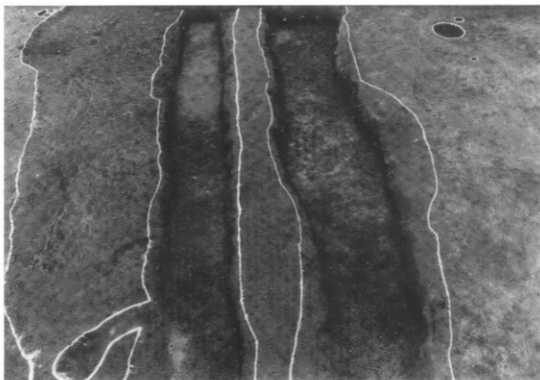
(1) SD01南区全景 (北から)



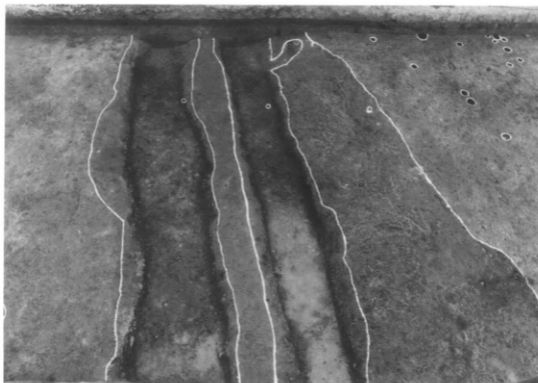
(2) SD01南区全景 (南から)



(1) S D01北区礫検出状況 (南から)



(2) S D01北区全景 (南から)



(1) S D01北区全景 (北から)



(2) S D01堆積状況 (南壁)



(1) S D01堆積狀況近景 (南壁)



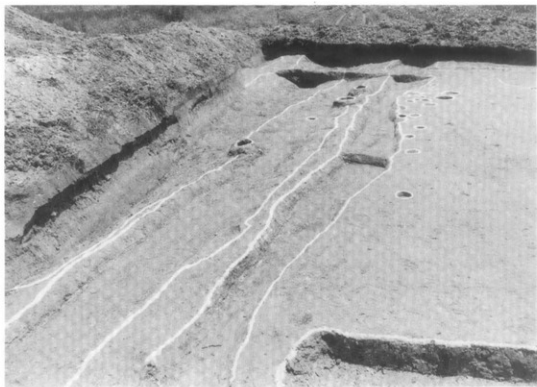
(2) S D01堆積狀況近景 (南壁)



(1) S D02全景 (北から)



(2) S D02近景 (南から)



(1) S D02近景 (北から)



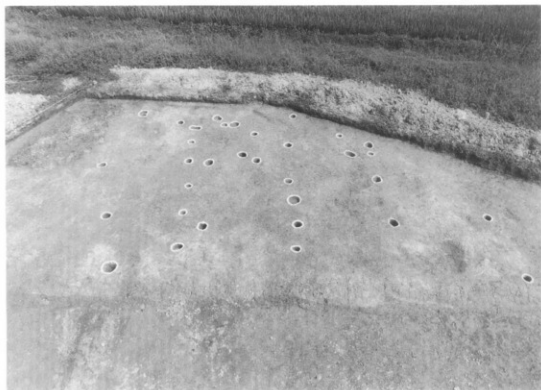
(2) 銅印出土状況



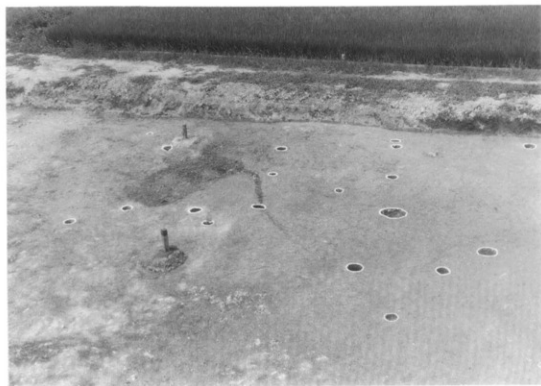
(1) C・D-4区全景 (西から)



(2) C・D-5区全景 (東から)

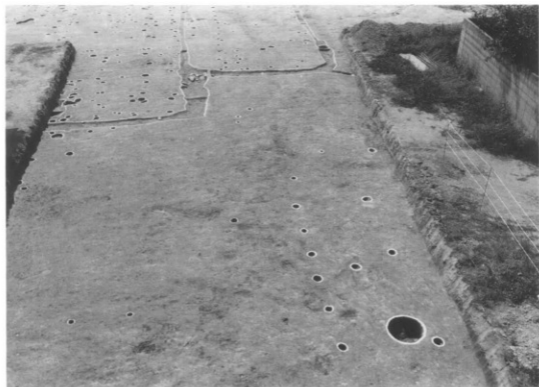


(1) SB01全景 (北から)



(2) SB02全景 (南から)





(1) SB03全景 (東から)



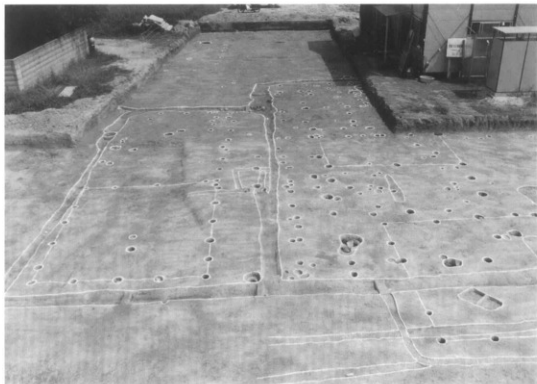
(2) SB03全景 (南から)



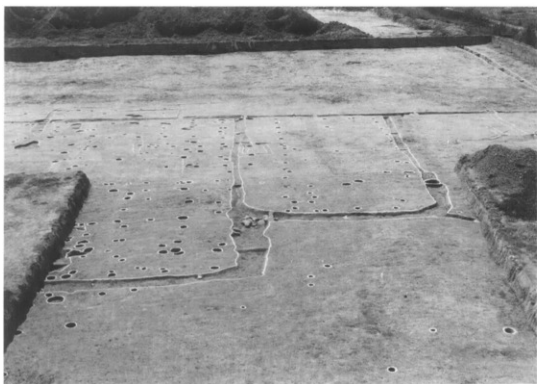
(1) SB04全景 (南東から)



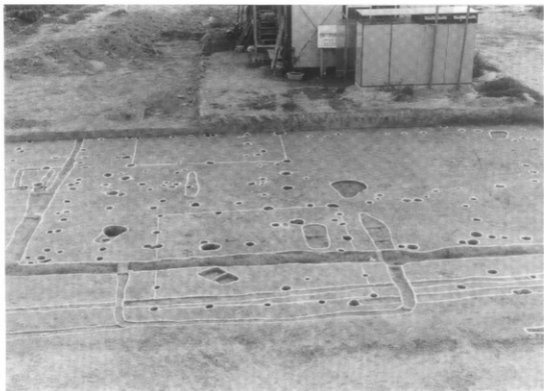
(2) SB04全景 (東から)



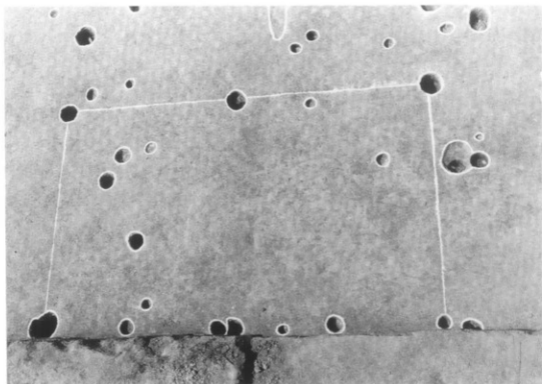
(1) 中央部建物群全景（西から）



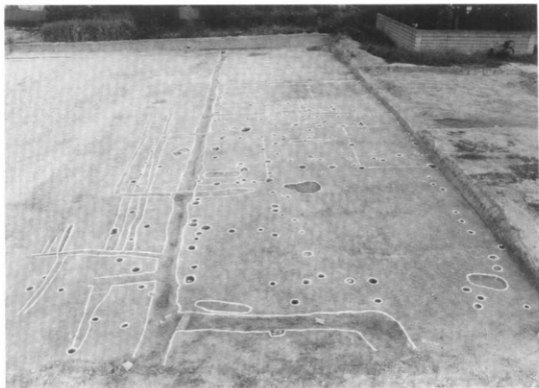
(2) 中央部建物群全景（東から）



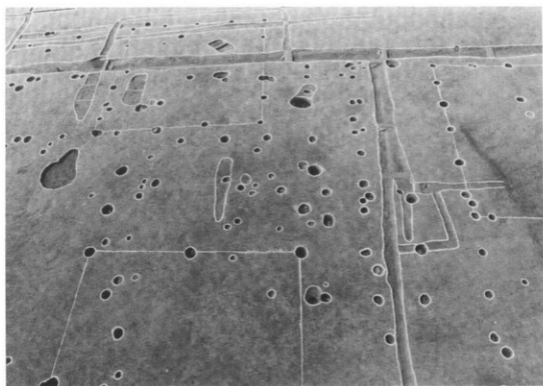
(1) SB07全景 (西から)



(2) SB06全景 (東から)



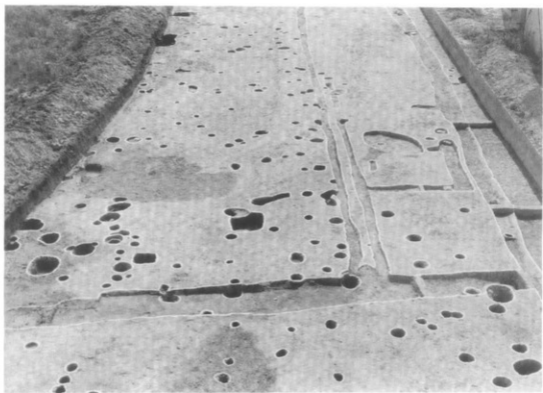
(1) 中央部建物群全景 (南から)



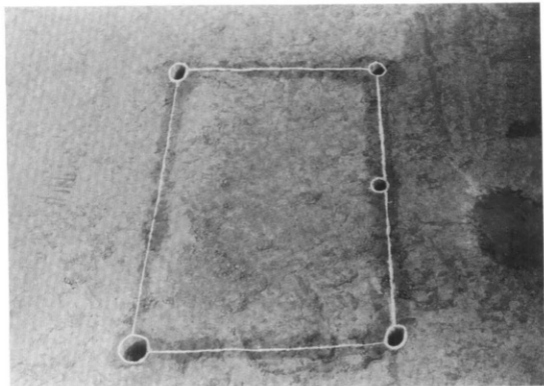
(2) 中央部建物群全景 (東から)



(1) S B08全景 (東から)



(2) S B08近景 (東から)



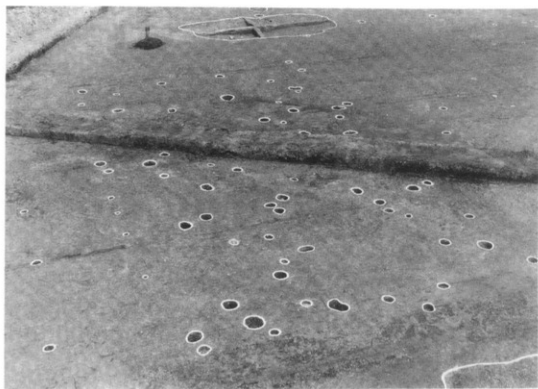
(1) SB09全景 (北から)



(2) 調査区西部全景 (東から)



(1) SB11全景 (西から)

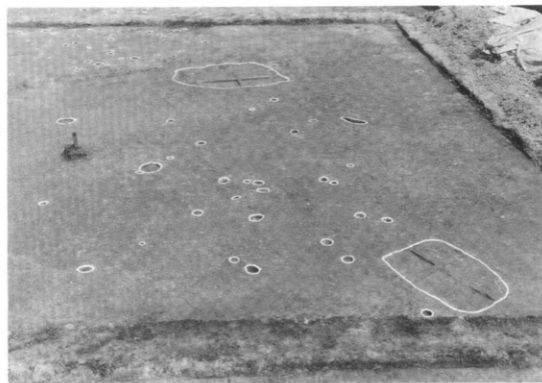


(2) SB11近景 (西から)





(1) SB12全景 (西から)



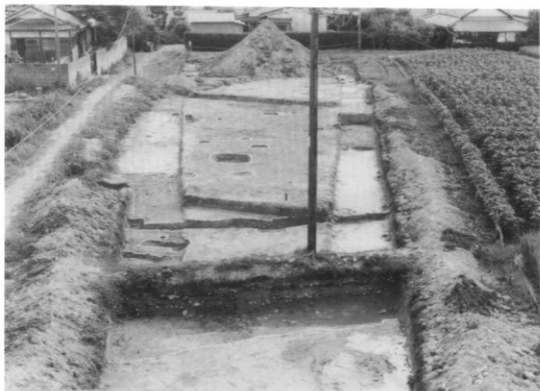
(2) SB12近景 (西から)



(1) S B13・14全景 (東から)



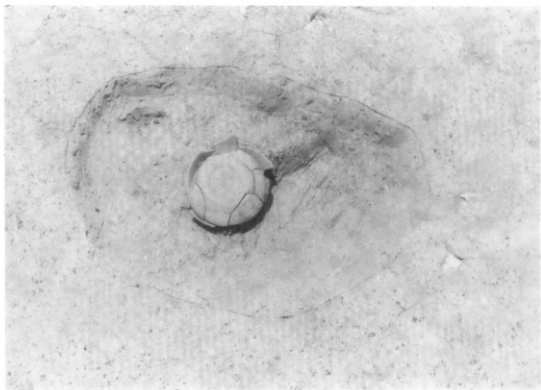
(2) S K04全景 (北から)



(1) D-12・13区全景 (東から)



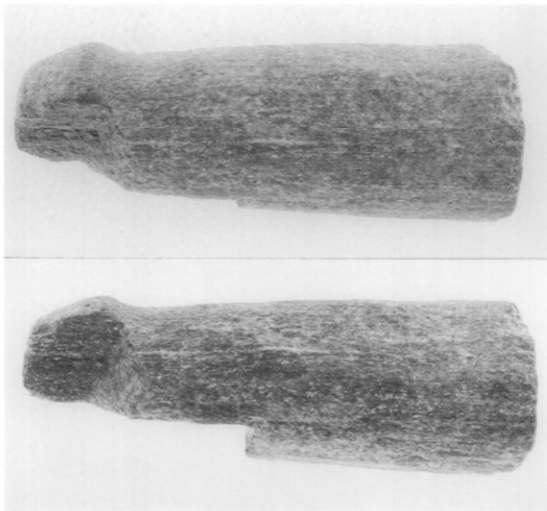
(2) 柱痕検出状況 (Pit No.11)



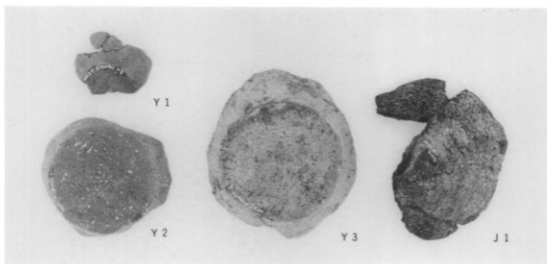
(1) 土師質小皿検出状況 (Pit No. 4)



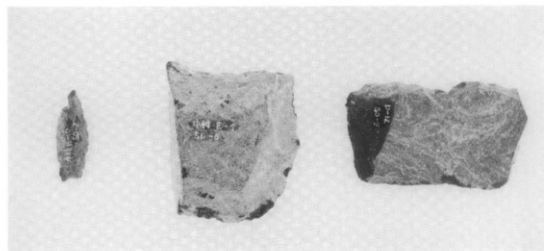
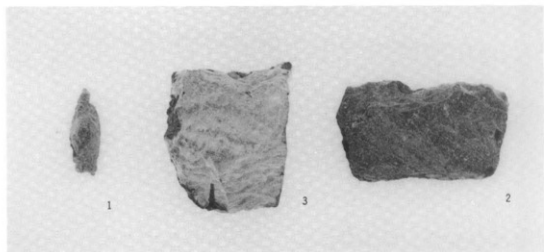
(2) 土師質小皿検出状況 (Pit No. 4)



(1) 石 棒



(2) N R01出土土器

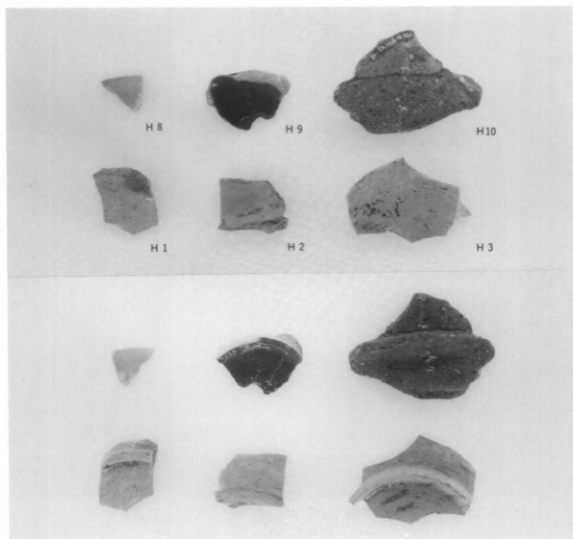


石 器



SD01 H1~H3

SD02 H5~H10



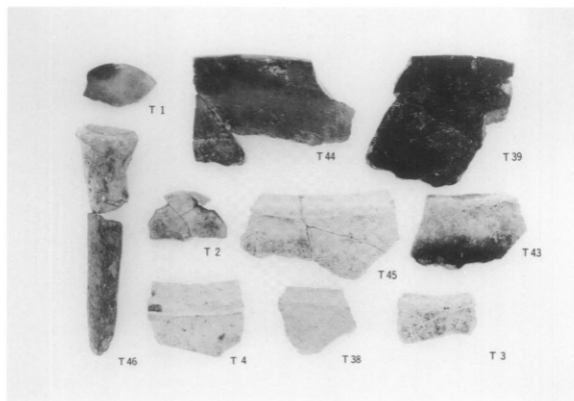


(1) 蒂金具

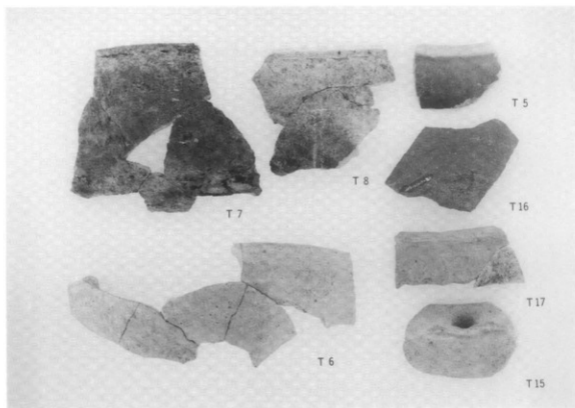


(2) 銅印

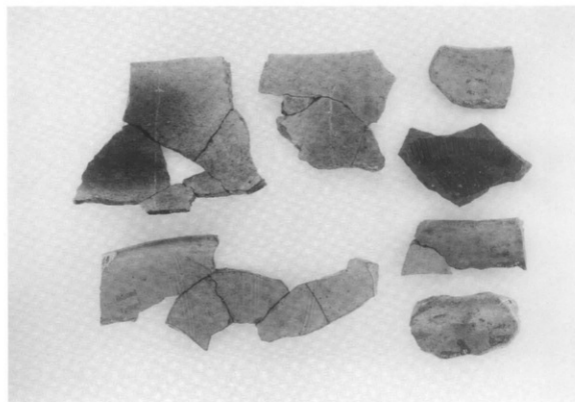




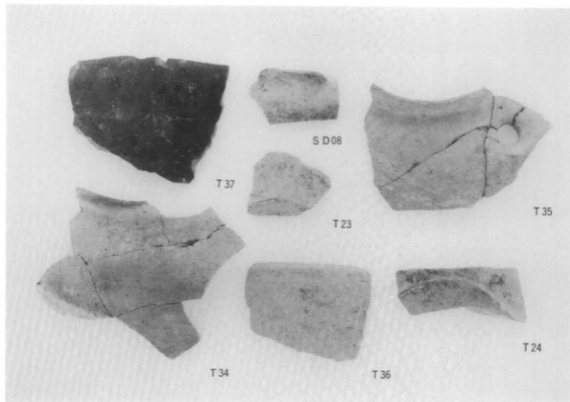
中世後半出土土器



(1) 中世後半出土土器 (外面)



(2) 中世後半出土土器 (内面)



(1) 中世後半出土土器 (外面)



(2) 中世後半出土土器 (内面)